

# 新潟市文化財センター年報

## 第7号

— 平成30（2018）年度版 —

2020

新潟市文化財センター

# 新潟市文化財センター年報

## 第7号

— 平成30（2018）年度版 —



秋葉区 程島館跡出土の刀形（中世）

2020

新潟市文化財センター

# 新潟市文化財センター

## 【設 置】

新潟市文化財センターは、埋蔵文化財及び有形民俗文化財を保存し、活用を図ることにより、これらに対する市民の関心及び理解を深め、もって市民文化の向上に資するため、『地方教育行政の組織及び運営に関する法律』第30条の規定に基づき設置された教育機関です。

## 【事 業】

- ① 埋蔵文化財の調査及び研究に関すること。
- ② 発掘調査などにより出土した考古資料の収集及び保存並びに公開、そのほかの活用に関すること。
- ③ 有形民俗文化財の保存及び活用に関すること。

新潟市内には旧石器時代から近代に至る766か所の遺跡が知られています（平成31年3月末）。平成17（2005）年の14市町村による広域合併後の各種開発事業などの増加に伴い、発掘調査も増加の一途をたどりました。その後も継続して発掘調査は一定数行われており、毎年新たに遺跡も発見され、遺跡数も年々増加しています。また、それらに伴う出土遺物や記録類も増えています。

文化財センターは各種開発事業や史跡整備などに伴う発掘調査を行い、埋蔵文化財の調査研究・収蔵保管・展示活用を進めていくために平成23（2011）年7月に開館しました。

文化財センターには、民俗資料収蔵庫も併設しており、敷地内には新潟市指定文化財の旧武田家住宅や畜動舎を移築復元しています。








新潟市文化財センター及び旧武田家住宅

# 例 言

- ・本書は、新潟市文化財センター（以下「文化財センター」）および文化スポーツ部歴史文化課（以下「歴史文化課」）の主に埋蔵文化財に係る平成30年度の業務年報である。Ⅰに新潟市の埋蔵文化財行政の概要、Ⅱに各種開発事業に伴う埋蔵文化財に係る事前審査、Ⅲに文化財センター業務年報、Ⅳに新潟市古津八幡山遺跡歴史の広場業務年報、Ⅴに資料紹介や研究ノートなどの研究活動について収録している。
- ・『新潟市文化財センター年報』（以下「年報」）は平成25年から刊行され、本書は第7号にあたる。文化財センター開館までの新潟市の埋蔵文化財行政の概要および経緯、文化財センターの概要については、第1号〔渡邊・八藤後ほか2014〕に記載されている。
- ・本書は文化財センター・歴史文化課埋蔵文化財担当職員が分担執筆した。執筆者の氏名は執筆者が替わる各文章の末尾に記載した。なお、全体の統一を図るために内容が変わらない範囲で編集者が字句の修正を行った。しかし、Ⅴについては各執筆者の研究成果の側面があるため、執筆者の意向に則して編集している。
- ・本書に記載されている施設名および所属などについては、本書刊行当時のものである。
- ・本書における調査面積などは、小数第2位を四捨五入して表記している。
- ・『年報』第6号まではⅡ2に主要な試掘・確認調査の概要を掲載していたが、本書から実際に担当している本発掘調査のみ記載する。
- ・Ⅲ2の「調査位置図」は、新潟市地形図（10,000分の1）を使用しており、縮尺は10,000分の1、地図の上位が北である。
- ・図・表番号は、章ごとに1から付している。しかし、Ⅲ2は項（概要）ごとに、Ⅴは節ごとに番号を付している。なお、Ⅴを除き写真には番号を付していない。
- ・Ⅲ2の「トレンチ位置図」のトレンチの凡例は右のとおりである。
- ・Ⅲ2の「遺物実測図」では、遺物の全周の1/12以下のような遺存率の低いものについては、誤差があるため中軸線の両側に空白を設けた。また、土器実測図の断面は、須恵器を黒塗り、それ以外を白抜きとした。さらに、土器実測に示す「┌」「└」はケズリ方向（移動した砂粒の終点を短線で区切っている）を、土器の黒色処理は■のトーンで表現している。
- ・掲載遺物の実測・トレースなどは文化財センターで行った。
- ・本書の編集は龍田優子・八藤後智人が行った。

トレンチ凡例

	調査対象範囲
	遺物・遺構未検出トレンチ
	遺物検出トレンチ
	遺構検出トレンチ
	遺物・遺構検出トレンチ

# 目 次

Ⅰ 新潟市の埋蔵文化財保護行政について	1
Ⅱ 開発事前審査	2
1 事前審査内容	2
Ⅲ 文化財センターの事業	8
1 本発掘調査の概要	8
2 平成30年度の本発掘調査	9
3 整理作業の概要	19
4 資料の収蔵・保管	20
5 資料の公開・展示	21
6 教育普及活動	25
7 保存処理	30
8 決算額	31
Ⅳ 新潟市古津八幡山遺跡歴史の広場	32
1 資料の公開・展示	32
2 教育普及活動	37
3 古津八幡山遺跡保存活用計画の推進	40
Ⅴ 研究活動－資料紹介・研究ノートなど－	41
1 新潟市西区六地山遺跡出土弥生土器の再検討	41
2 朝日普談寺観音堂の文禄五年銘罎口	75
引用・参考文献	78
付録（各表）	79



# I 新潟市の埋蔵文化財保護行政について

**概要** 新潟市では、「文化財に関する事項」は『行政組織規則』により市長部局の歴史文化課が主に補助執行することとされている。そのうち埋蔵文化財については、歴史文化課および文化財センターが所管している。事務分掌は、開発事前審査、試掘・確認調査、工事立会、古津八幡山遺跡を除く史跡管理を歴史文化課、本発掘調査、保存処理、収蔵・保管、展示・活用、史跡古津八幡山遺跡の保存・活用などを文化財センターが行っている。

**開発事前審査** 開発事前審査では、民間開発や公共工事に対する事前協議を行い、『新潟市試掘確認調査基準』（平成19年4月1日施行）に基づいて試掘・確認調査の要否を判断している。また、本市は政令指定都市のため、『文化財保護法』（以下『法』）第93条および第96条に基づく事務については、新潟市教育委員会が『新潟市埋蔵文化財取扱要綱』（平成19年4月1日施行）に基づいて『法』に伴う指示を行っている。

**本発掘調査** 本発掘調査は、民間や国・県などの原因者から新潟市が受託して「埋蔵文化財本格発掘調査事業」として実施している。本市が原因者の場合は、関係各部署からの依頼を受託して同様に実施している。

平成30年度の埋蔵文化財本発掘調査と整理作業に係る事業費は表1のとおりである。平成30年度に本発掘調査を実施した事業は内容欄に本発掘調査と記載した。

**埋蔵文化財** 新潟市内には、埋蔵文化財包蔵地が766か所存在する（平成31年3月31日時点）。平成30年度は、試掘調査による新発見遺跡が12か所、近世新潟町跡（近世新潟町跡の取扱いは『年報』1号〔渡邊2014a〕に記載）の周知化地点が1か所ある。今後も試掘調査などによる増加が見込まれる。

**本発掘調査件数** 新潟市で近隣市町村との合併（平成17年度）が行われてから平成30年度までの本発掘調査件数は表2のとおりである。14年間で83件の本発掘調査を行っており、平均すると1年間で約6件の本発掘調査を行っていることになる。

全体の件数では、平成19・20年度が10件と最も多く、徐々に件数は減少傾向に見えるが、1件あたりの本発掘調査の内容では、個人住宅などの小規模なものから、圃場整備などの大規模なものまであり、必ずしも件数の減少が調査面積の減少を示してはいない。

種別で見ると新潟県地域振興局（以前は新潟県農地事務

所）による圃場整備関係や新潟市による道路改良関係（政令指定都市指定以前は新潟県土木事務所）が定期的に行われており、民間開発関係は不定期に行われている（図1）。

現状では、本発掘調査は毎年一定件数実施しており、今後も継続される可能性が高い。平成30年度は個人住宅建設に伴う本発掘調査が2件あり、その他民間開発の状況により、突発的に件数が増大する可能性も十分にあり、文化財センターとして本発掘調査に対応できる体制を今後も維持していく必要がある。（龍田優子）

表1 平成30年度新潟市本発掘調査・整理作業事業費一覧

調査番号	原因者	事業名	遺跡名	内容	事業費 (円)	調査面積 (㎡)	担当
2018001	新潟市	前山遺跡 発掘調査事業	前山遺跡	本発掘調査 整理作業	3,230,000	64.8	遠藤恭雄
2017006	個人	小規模緊急 発掘調査事業	程島船跡	整理作業	2,396,000	-	相澤裕子 龍田優子
2018002		本発掘調査 整理作業		6,182,072	122.4	龍田優子	
2018003	個人	小規模緊急 発掘調査事業	原遺跡	本発掘調査 整理作業	7,817,928	177.4	立木宏明
2018004	新潟市	川根谷内遺跡 発掘調査事業	川根谷内遺跡	本発掘調査 報告書刊行	48,300,000	821.6	牧野耕作
2018005	新潟市	砂崩前遺跡 発掘調査事業	砂崩前遺跡	本発掘調査 整理作業	69,000,000	789.6	遠藤恭雄
2009002	新潟市	大沢谷内遺跡 発掘調査事業	大沢谷内遺跡	整理作業	8,600,000	-	相田孝臣
2010002							
2011006							
2009003 2010003							
2014001	県地域 振興局	両新地区ほ場整備 発掘調査事業	細池寺道上 遺跡	整理作業	70,000,000	-	立木宏明
2015002				整理作業 報告書刊行			
2016002 2017002				整理作業			
2017001	民間	小規模緊急 発掘調査事業	赤輪砂山	整理作業	3,500,000	-	立木宏明
2017003	新潟市	浦木東遺跡 発掘調査事業	浦木東遺跡	整理作業 報告書刊行	4,600,000	-	澤野優子
2017004	新潟市	亀田道下遺跡 発掘調査事業	亀田道下遺跡	整理作業	7,650,000	-	遠藤恭雄
2017005	個人	小規模緊急 発掘調査事業	秋葉遺跡	整理作業	4,407,624	-	今井さやか
合 計					235,683,624		

表2 新潟市本発掘調査件数（平成17～30年度）

種 別	年 度 (平成)													小 計	
	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29		30
民 間	2	5	3	1	0	0	1	0	1	0	1	0	3	2	19
県地域 振興局 (県農地)	2	2	2	2	2	1	3	5	3	1	2	1	1	0	27
県土木	2	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3
新潟市	1	1	5	7	2	3	1	3	2	2	0	2	2	3	34
合 計	7	9	10	10	4	4	5	8	6	3	3	3	6	5	83

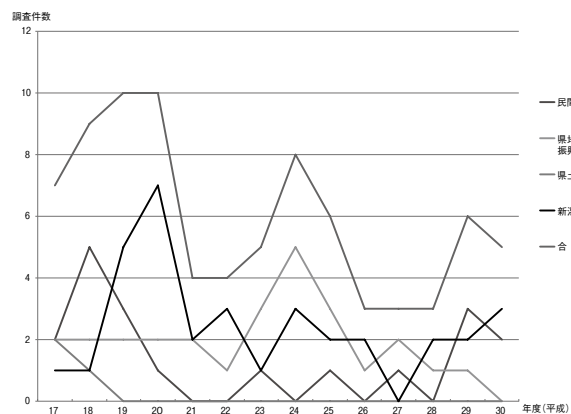


図1 新潟市本発掘調査件数の推移（平成17～30年度）

## II 開発事前審査

### 1 事前審査内容

#### (1) 開発事前審査

**概要** 新潟市は、国内でも有数な規模を誇る越後平野の中央に位置する。市域の大半を占めるこの越後平野は、長い年月をかけて信濃川・阿賀野川などの大河川が運んできた土砂により形成された沖積平野である。新津や角田・弥彦の丘陵地帯、新潟砂丘（新砂丘Ⅰ～Ⅲ）に代表される砂丘地帯のように標高の高い地域もあるが、大半は低湿地帯である。丘陵を除く地域には鳥屋野潟や福島潟などに代表される潟湖が多数存在し、かつては洪水など水害の多い地帯であった。江戸時代には、新田開発に伴い潟や沼などの水抜き工事が行われており、明治・大正・昭和へと引き継がれた。特に1950年代以降の土木技術の発展に伴う土地改良の結果、湿地帯は徐々に解消されていった。

遺跡（埋蔵文化財包蔵地）は、その大半が地中に埋まっており、地表面観察からの把握は困難である。長年の耕作などにより地表面に露出してきた遺物を丹念に観察・収集し、遺跡の所在把握に取り組んできたが、機械掘削が主体となっている現在の工事では、存在が把握されないまま地中にある遺跡に、直接掘削が及ぶ機会が増大している。すでに周知化されている遺跡および未周知遺跡の把握・周知・保護は行政の責務と考える。

このような変化に対応しつつ迅速に保護対応を図るため、本市では以下のような取り組みを実施している。

**公共事業** 国・県機関の実施する土木事業については、年に1度、新潟県教育庁文化行政課が一括して関係機関に照会し、得られたデータを県下の市町村に提供して審査および事業者との協議を依頼している。

国・県機関実施事業のうち、平成30年度の新潟市関連分は56件であった。平成29年度の51件から5件増加している。内訳は表1に示した。県事業39件のうち15件は圃場整備に係る事業で、継続して協議を行い、事業実施に際しては『法』第94条通知が行われている。

市の実施する事業については、年度ごとに庁内全部署へ照会をかけ、その回答を基に協議している。

規模を問わず、原則全ての事業を対象とするため、審査件数が膨大になり、短期間での審査・協議が困難となっている。また、年度途中で生起する小規模事業は拾いきれない場合があり、歴史文化課へ協議するよう各種の機

会をとらえて事業担当課に声掛けを行っている。

**民間事業** 事業計画地における遺跡の有無、もしくは保護協議の対象地であるかを、歴史文化課窓口およびFAXで対応している。

民間事業で最多の建築事業については、建築確認申請を提出する際、本市独自の施策として同申請書に「建築確認申請事前調査報告書」の添付を義務付けている（担当は建築部建築行政課）。その事前調査項目に「埋蔵文化財の有無」があり、建築主は歴史文化課へ照会して確認番号を取得する必要がある。その時点で遺跡に該当するかどうか把握できる仕組みとなっている（なお、公共の建築事業についても「計画通知」段階で同様の措置を取っている）。照会目的の大半は専用住宅建築に係る建築確認番号取得である。次いで土地取引もしくは不動産鑑定評価など計画段階での事前調査であり、電柱、看板設置などが続く。特にFAXでの照会は、民間事業者にかなり定着してきているが、日々の審査業務時間は増大している。

開発行為については、各区の『開発審査協議会設置要領』に規定されているとおり『都市計画法』第32条による事前協議書が各区役所建設課に提出された後、歴史文化課を含む庁内関係各課に意見照会されるため、全ての案件について取扱い方針の審査と協議を行っている。また、開発行為事前協議時の事前相談が開始された段階で、各区建設課から事業者に対し歴史文化課へも連絡を取るよう指導する対策が取られている。

さらに、本市では土木事業が農地内で行われることが多い。その場合、事前に『農地法』に係る転用許可申請・届出の提出が必要であることから、市内に6つある農業委員会事務局（北区・中央・秋葉区・南区・西区・西蒲区）に歴史文化課への情報提供を依頼し、全件審査して取扱い方針を決定している。なお、必要なものについては事業者と協議を行っている。

このように、民間事業者の行う各種開発などは、許可事務を担当する庁内各部署などと緊密に連携して事前把握を行っている。しかし、専用住宅建築を含む民間事業は、決定してから実施までが速く、試掘・確認調査の実施とその結果を踏まえた協議時間が非常に短い。制度と実行力にバランスが保てるような体制の強化が急務である。

**平成30年度** 平成30年度の協議実績の概要は以下のとおりである。

国・県事業の件数については先に触れた。国関係では、取扱いが必要となったものはなかった。県関係では、圃場整備および地盤沈下対策関係について協議対象とした。圃場整備は、新潟県新潟地域振興局の所管事業であり、同局農林振興部の所管区域は江南区・秋葉区、巻農業振興部の所管区域には西区・西蒲区が含まれる。平成28年度まで主に協議対応してきた巻農業振興部管内の整備計画のほかに、平成29年度には農林振興部管内でも複数地区で整備が計画され協議対応が必要となった。計画地はいずれも大面積で市単独の対応が困難となり、県教育庁文化行政課・県農地部・新潟地域振興局担当課、新潟市の4者で、埋蔵文化財保護と整備事業の進捗について調整会を持つこととなった。調整会で示された整備計画から、長期的な対応が必要であることを再確認した。

市事業の審査件数は426件であり、平成29年度の613件から187件減少している。主な内訳としては、水道関係145件（全体の約34.0%）、道路関係161件（同37.8%）、下水道関係55件（同12.9%）、その他公共施設関係65件（同15.3%）となった。公共施設関係はほとんどが改修工事や設計であった。

民間事業に係る事前審査については表2に示した。平成29年度とほぼ同傾向であるが、案件ごとの重複を除いた実数は8,947件（平成29年度8,331件に比して616件の増）であった。内訳をみると、開発行為は微減（平成29年度の88件から72件）、農地転用はやや増加（同520件から577件）、建築確認申請に係る審査件数もやや増加（同4,140件から4,198件）であった。開発行為では宅地造成が最も多く、店舗建設・福祉施設・共同住宅がこれに続く。

(2) 試掘・確認調査

**概要** 事前審査・協議において、遺跡の有無を事前に把握する必要があると判断した場合は試掘調査、すでに周知遺跡となっているが、その詳細な内容が不明な場合は確認調査を実施している。経費は市の事業「市内遺跡範囲等確認調査事業」として公費から支出している（事業費の約50%は文化庁の補助を受けている）。原則として事業者へ経費負担を要求していない。

試掘調査については、公共事業はもちろん、民間事業の場合もほとんどは事業者の理解と協力を得て実施している。以前はまれに試掘調査の実施を拒否される場合があったが、近年はほぼ全ての案件で承諾が得られている。試掘調査の意義と効果に対する理解が事業者に浸透してきていると思われる。

平成30年度 表1・3のとおり、試掘調査45件、確認調査20件、計65件の調査を実施した。平成29年度の件数と比較すると試掘調査が8件、確認調査は4件減少して

表1 平成30度公共事業審査事業主体別内訳

事業主体	審査件数	新発見遺跡 ( )は遺跡範囲変更	試掘調査の 協議をしたもの	94条通知
国	17	0	0	0
県	39	6 (1)	7	14
市	426	33	10	16
計	482	39	17	30

表2 平成30年度民間事業事前審査件数

区名	審査種別(件数)					審査・照会 件数	[法] 93条 届出
	建築確認	窓口・FAX 照会	32条照会	農地転用	文書照会		
北区	380	347	7	77	3	814	9
東区	677	663	7	61	0	1,408	11
中央区	773	1,150	12	37	0	1,972	5
江南区	415	421	15	54	0	905	53
秋葉区	469	292	11	81	0	853	55
南区	265	209	5	45	2	526	2
西区	970	794	13	200	4	1,981	5
西蒲区	249	215	2	22	0	488	7
合計	4,198	4,091	72	577	9	8,947	147

※審査種別の各項目は次のとおりである。「建築確認」は照会用紙による建築確認申請事前調査報告書に係る照会。「窓口・FAX照会」は「建築確認」以外の照会用紙による照会。「32条照会」は「都市計画法」第32条に係る公文書による照会。「農地転用」は「農地法」第4条・第5条に係る公文書による照会。「文書照会」は「32条照会」、「農地転用」以外の公文書による照会。

表3 平成30年度試掘・確認調査、工事立会件数

区名	調査内容	事業者	件数		埋蔵文化財 検出件数	割合 (%)
			公共	民間		
北区	確認調査	公共	0	0	0	0
		民間	0			
	試掘調査	公共	3	6	1	17
		民間	3			
工事立会	公共	3	5	1	20	
	民間	2				
東区	確認調査	公共	1	1	1	100
		民間	0			
	試掘調査	公共	0	4	0	0
		民間	4			
工事立会	公共	3	6	0	0	
	民間	2				
中央区	確認調査	公共	0	2	2	100
		民間	2			
	試掘調査	公共	3	5	2	40
		民間	2			
工事立会	公共	1	2	1	50	
	民間	1				
江南区	確認調査	公共	0	7	5	71
		民間	7			
	試掘調査	公共	2	10	4	40
		民間	8			
工事立会	公共	4	26	4	15	
	民間	22				
秋葉区	確認調査	公共	2	7	2	28
		民間	5			
	試掘調査	公共	3	6	5	83
		民間	3			
工事立会	公共	11	23	3	13	
	民間	12				
南区	確認調査	公共	0	0	0	0
		民間	0			
	試掘調査	公共	2	7	0	0
		民間	5			
工事立会	公共	0	0	0	0	
	民間	0				
西区	確認調査	公共	0	1	1	100
		民間	1			
	試掘調査	公共	0	2	0	0
		民間	2			
工事立会	公共	3	6	1	17	
	民間	3				
西蒲区	確認調査	公共	2	2	1	50
		民間	0			
	試掘調査	公共	3	5	1	20
		民間	2			
工事立会	公共	13	15	2	13	
	民間	2				
合計	確認調査	公共	5	20	12	60
		民間	15			
	試掘調査	公共	16	45	13	28
		民間	29			
工事立会	公共	38	83	12	14	
	民間	45				

表4 平成30年度経費（調査支援委託費のみ 単位：千円）

調査内容	金額
試掘・確認調査（民間開発・公共事業）	28,473
試掘・確認調査（ほ場整備対応）	21,617

表5 平成30年度試掘・確認調査一覧(調査番号順)

調査番号	遺跡名 遺跡番号	調査種別	開発種別		調査地	遺跡種別	遺跡の時代	調査で 確認された時代	調査期間	調査 日数	調査面積 (調査対象面積) (㎡)	調査担当	調査員	検出遺構	出土遺物	取扱い	備 考
			事業者	内 容													
2018101	(美田遺跡) 793	試掘調査	民間	宅地造成	秋葉区 吉田三丁目 881番 外	遺物包含地	奈良・平安	奈良・平安	4/18～20	3	1490 (3,863.0)	瀧田幸幸	金田拓也	炭化物の落込み(古代)	土師器・須恵器・有機物・ 搬入物(古代)、 青磁(中世・混入)	継続協議後 工事立会	新発見遺跡
2018102	-	試掘調査	民間	宅地造成	南区 戸石字居満 392番1 外	-	-	-	4/26	1	210 (1,283.0)	金田拓也	瀧田幸幸	なし	なし	取扱い不要	
2018106	-	試掘調査	公共 (市)	公有地 売却	秋葉区 新保字浦郷 1254番	-	-	近世	5/9・10	2	675 (3,946.1)	金田拓也	瀧田幸幸	なし	陶器(近世)	取扱い不要	
2018107	-	試掘調査	公共 (市)	公有地 売却	南区 菱野新田字居満 287番1	-	-	-	5/14	1	458 (1,220.0)	金田拓也	瀧田幸幸	なし	なし	取扱い不要	
2018108	-	試掘調査	公共 (市)	公有地 売却	北区 新井郷字居満 1157番	-	-	-	5/16	1	210 (2,137.3)	瀧田幸幸	金田拓也	なし	なし	取扱い不要	
2018109	彦七山遺跡 9	確認調査	民間	個人住宅	江南区 丸山字清水が丘 129番	遺物包含地	奈良・平安	-	5/2	1	64 (222.4)	瀧山えりか	-	なし	なし	慎重工事	
2018110	-	試掘調査	民間	農業施設	南区 七徳字七徳 52番	-	-	-	4/20	1	480 (1,455.0)	瀧山えりか	-	なし	なし	取扱い不要	
2018112	-	試掘調査	民間	工場	江南区 砂原字真満 279番1	-	-	-	6/14	1	327 (2,968.0)	瀧山えりか	-	なし	なし	取扱い不要	
2018114	(近世新町遺跡) 575	試掘調査	民間	コンビニ	中央区 本町通八番町 1306番 外	港町跡	近世	近世	5/23～25	3	420 (1,036.2)	瀧山えりか	金田拓也	溝(近世)	陶磁器、木製品、 漆工関連遺物(近世)	取扱い不要	
2018115	-	試掘調査	民間	土地活用	東区 山本戸四丁目 1049番	-	-	-	5/31	1	311 (1,590.0)	瀧山えりか	-	なし	土師器(盛土から)	取扱い不要	
2018116	-	試掘調査	民間	福祉施設	西区 新中込五丁目 2番1 外	-	-	-	5/21	1	634 (1,981.0)	金田拓也	瀧田幸幸	なし	なし	取扱い不要	
2018117	-	試掘調査	民間	宅地造成	南区 下塚字土居内 788番6 外	-	-	-	6/6	1	313 (4,661.8)	瀧山えりか	金田拓也	なし	なし	取扱い不要	
2018119	-	試掘調査	公共 (市)	市道	南区 東笠倉新田字谷内 1536番 外	-	-	近世	6/11～21	9	6843 (53,628.6)	金田拓也	-	川・掘り込み(近世以降)	磁器(近世)	取扱い不要	
2018120	所島前遺跡 754	確認調査	民間	宅地造成	江南区 所島二丁目乙 177番2 外	敷布地	縄文・古代・ 中世・近世	-	6/18	1	342 (947.2)	瀧山えりか	-	なし	なし	取扱い不要	造成工事による掘削を行 わなかったため、取扱い不要。
2018121	舟戸遺跡 132	確認調査	民間	社屋	秋葉区 古津字船田 1843番2 外	集落跡	縄文・弥生・ 古墳・奈良・ 平安	-	6/21	1	183 (453.0)	瀧山えりか	-	なし	なし	慎重工事	
2018123	(近世新町遺跡) 575	試掘調査	民間	コンビニ	中央区 古町通四番町 581番1	港町跡	近世	近世	7/3	1	527 (54.7)	金田拓也	朝岡政康	井戸(近世)	陶磁器・土製品・石製品、木製品・ 金属製品(近世)	取扱い不要	
2018125	藤原遺跡 157	試掘調査	民間	宅地造成	秋葉区 大塚字藤原 1255 2 外	遺物包含地	古代・中世	古代(平安)	6/28	1	344 (1,218.6)	瀧山えりか	-	なし	土師器(平安)	継続協議	遺跡範囲拡大・時代追加 (平安時代)
2018128	(岡崎遺跡) 794	試掘調査	公共 (市)	市道	江南区 嘉瀬字横江 570番 外	遺物包含地	古墳・平安・ 近世	古墳・平安・ 近世	7/17～8/23	23	1,2607 (48,500.0)	金田拓也	-	土坑・ピット(平安)	土師器(古墳・平安)、 須恵器(平安)	本発掘調査	新発見遺跡 ※3 2018182と同一の調査
2018130	近世新町遺跡 575-21	確認調査	民間	市街地 再開発	中央区 古町通七番町 944番 外	港町跡	近世	近世	7/5・6	2	120 (800.0)	瀧山えりか	-	溝(近世)	陶磁器・漆製品・木製品(近世)	工事立会	
2018131	亀田道下遺跡 768	確認調査	民間	宅地造成	江南区 亀田表前根二丁目 156番1 外	遺物包含地	古代・近世	古代・近世	7/17・18	2	293 (5,005.5)	瀧山えりか	-	溝(近世)	土師器・須恵器(古代)、 陶磁器(近世)	工事立会	
2018132	(結七島遺跡) 209	試掘調査	民間	宅地造成	秋葉区 結字内畑 251番4 外	遺物包含地	縄文・古墳・ 古代・中世	平安・中世	7/24・25	2	708 (2,219.5)	瀧山えりか	-	溝・ピット	土師器・須恵器(古代)、珠洲焼・ 珠洲系陶器(中世)、石製品	工事立会	遺跡範囲拡大
2018133	-	試掘調査	民間	宅地造成	江南区 小杉二丁目 1133番	-	-	-	7/12	1	264 (1,771.2)	瀧山えりか	-	なし	なし	取扱い不要	
2018135	居屋敷跡遺跡 577	確認調査	民間	工場	江南区 沢海三丁目 188番2 外	集落跡	古墳・平安・ 中世	古代	8/8	1	262 (1,392.6)	瀧山えりか	-	なし	土師器(古代)	工事立会	
2018138	(真木江向遺跡) 801	試掘調査	公共 (県)	圃場整備	西蒲区 福島	遺物包含地	中世	中世・近世	10/3～18	9	3970 (320,000.0)	龍田優子	-	溝(中世)	珠洲焼(中世)、陶磁器(近世)	継続協議後 工事立会	新発見遺跡 ※3 2018171と同一の調査
2018139	百瀬遺跡 35	確認調査	公共 (市)	擁壁	東区 河津本町 6番3地先	遺物包含地	平安	近世	9/4	1	21 (200)	瀧山えりか	-	なし	陶磁器(近世)	工事立会	
2018140	(木田中谷内遺跡) 799	試掘調査	公共 (県)	圃場整備	秋葉区 木田	遺物包含地	平安	平安	10/31～11/8	6	2579 (130,000.0)	牧野耕作	-	溝・性格不明遺構・ピット (平安)	土師器・黒色土器・須恵器・ 石製品・金属製品(平安)	継続協議	新発見遺跡 ※3 2018247と同一の調査
2018154	-	試掘調査	民間	倉庫	江南区 根文興字下中道内 208番3の内 外	-	-	-	8/17	1	186 (1,725.9)	瀧山えりか	-	なし	なし	取扱い不要	
2018155	-	試掘調査	民間	宅地造成	東区 牡丹山一丁目 205番14	-	-	-	9/7	1	288 (2,292.4)	瀧山えりか	-	なし	なし	取扱い不要	
2018158	-	試掘調査	民間	宅地造成	江南区 徳川字東新甲 348番4 外	-	-	-	9/11	1	282 (1,000.0)	瀧山えりか	-	なし	なし	取扱い不要	
2018170	茶院A遺跡 543	確認調査	公共 (県)	圃場整備	西蒲区 打越	集落跡	古墳・古代・ 中世・近世	古墳・古代・ 中世	10/1～11/20	32	9467 (890,000.0)	金田拓也	-	土坑・溝・性格不明遺構・ ピット(古代・中世)	土師器(古墳・古代・中世)、 須恵器(古代)、土製品、木製品、 石製品	継続協議後 工事立会	高六遺跡(穴倉となる)を茶院 A遺跡に含め遺跡範囲拡大。時 代追加(古墳)。 ※3 2018148、2018249、 2018250、2018251と同一の調査
2018171	福島遺跡 522	確認調査	公共 (県)	圃場整備	西蒲区 福島	遺物包含地	中世	-	10/3～18	9	3970 (320,000.0)	龍田優子	-	なし	なし	継続協議後 工事立会	※3 2018138と同一の調査
2018172	-	試掘調査	公共 (県)	圃場整備	西蒲区 山島	-	-	-	10/3～10/ 11/20・21	6	2462 (370,000.0)	今井さやか	立木安明	なし	なし	取扱い不要	
2018173	(堂中遺跡) 802	試掘調査	公共 (県)	圃場整備	西蒲区 麻堀	遺物包含地	古墳	古墳(前期)	10/23～25	3	1042 (220,000.0)	龍田優子	-	なし	土師器(古墳)	継続協議	新発見遺跡
2018174	(桑山前田遺跡) 798	試掘調査	公共 (県)	圃場整備	西蒲区 桑山	遺物包含地	平安	平安	10/11～10/22	7	6046 (340,000.0)	今井さやか	立木安明	なし	土師器・須恵器・籾(平安)	継続協議後 工事立会	新発見遺跡
2018175	亀田道下遺跡 768	確認調査	民間	分譲分譲	江南区 荻原二丁目 14番1 外	遺物包含地	平安・近世	平安・近世	9/26	1	166 (799.0)	瀧山えりか	-	溝(近世以降)	土師器(平安)、陶器(近世)	取扱い不要	宅地分譲の分譲のための 93不要
2018182	(道正遺跡) 795	試掘調査	公共 (市)	市道	江南区 嘉瀬字横江 570 外	遺物包含地	縄文・弥生・ 古墳・平安	縄文・弥生・ 古墳・平安・ 近世	7/17～8/23	23	1,2607 (48,500.0)	金田拓也	-	土坑・溝・ピット (古墳・平安)	縄文土器、弥生土器、 土師器(古墳・平安)、 須恵器(平安)、石製品、木製品	本発掘調査	新発見遺跡 ※3 2018128と同一の調査
2018187	-	試掘調査	民間	土地区画 整理事業	南区 北田中字宮下 518番1 外	-	-	-	10/26・29	2	837 (86,148.0)	瀧山えりか	-	なし	なし	取扱い不要	
2018189	藤原遺跡 157	確認調査	民間	個人住宅	秋葉区 大塚字藤原 109番1	遺物包含地	古代・中世	-	10/30	1	60 (596.4)	瀧山えりか	-	なし	なし	工事立会	



調査番号	遺跡名 遺跡番号	調査種別	関係種別 事業者 内容	調査地	遺跡種別	遺跡の時代 調査で 確認された時代	調査期間	調査 日数	調査面積 (調査対象面積) (㎡)	調査担当	調査員	検出遺構	出土遺物	取扱い	備 考	
																調査地
2018190	-	試掘調査	民間 学校施設	江南区 太右衛門前田一分田 318番2外	-	-	10/10・11	2	457 (26,721.0)	諏山えりか	-	なし	なし	取扱不要		
2018191	古津八幡山遺跡 173	確認調査	公共 (市) 保存目的 の範囲 確認	秋葉区 古津 346番 外	集落跡	旧石器・縄文・ 弥生・古墳・ 奈良・平安	旧石器・縄文・ 弥生・古墳・ 奈良・平安	5/30 - 11/2	82	1950	相田泰臣	-	彫穴住居・掘立柱建物・ 土坑・溝・ピット・ 性格不明遺構	縄文土器・弥生土器・陶磁器・ 石器・鏝・鉄器	現状保存	史跡指定地の確認調査
2018192	-	試掘調査	民間 宅地造成	北区 内島見字前田 1248番 外	-	-	11/13	1	504 (7,499.2)	諏山えりか	-	なし	なし	取扱不要		
2018193	-	試掘調査	民間 宅地造成	北区 前新田字前新田甲 24番 外	-	-	11/22	1	227 (2,854.0)	諏山えりか	-	なし	なし	取扱不要		
2018196	-	試掘調査	民間 宅地造成	江南区 江口字伊勢堂 4024番2外	-	-	11/9	1	257 (1,911.1)	諏山えりか	-	なし	なし	取扱不要		
2018197	-	試掘調査	公共 (市) 公有地 売却	北区 嘉山字大口 2196番2外	-	-	11/7	1	330 (3,336.0)	諏山えりか	-	なし	なし	取扱不要		
2018198	-	試掘調査	民間 工場	西蒲区 旗谷字前谷内 413番 外	-	-	11/6	1	180 (4,020.0)	諏山えりか	-	なし	なし	取扱不要		
2018199	-	試掘調査	公共 (市) 道路	中央区 田中町字蒲浦 5190番12 外	-	-	10/4	1	41 (1,268)	諏山えりか	-	なし	なし	取扱不要		
2018200	-	試掘調査	公共 (市) 駐車場	北区 長塚字村下 1834番1	-	-	11/14	1	155 (2,120.8)	諏山えりか	-	なし	なし	取扱不要		
2018201	横川浜境外地遺跡 345	確認調査	公共 (市) 架橋	秋葉区 横川浜 49番1 外	遺物包含地	縄文・古代・ 中世	-	12/7・8	2	542 (12,500.0)	諏山えりか	-	なし	なし	継続協議	
2018203	鳥屋野遺跡 79	確認調査	民間 個人住宅	中央区 鳥屋野一丁目 722番1 外	遺物包含地	中世	中世・近世	12/4	1	151 (241.0)	金田拓也	-	ピット(中世)	珠洲焼(中世)、陶磁器(近世)	慎重工事	遺跡範囲拡大
2018208	-	試掘調査	民間 駐車場	南区 根野字福西 116番 外	-	-	12/13	1	240 (3,504.9)	諏山えりか	-	なし	なし	取扱不要		
2018209	(下郷中遺跡) 796	試掘調査	民間 宅地造成	江南区 横塚字一丁目 3677番1 外	遺物包含地	平安	平安	12/19・20	2	327 (3,600.1)	諏山えりか	-	土坑・ピット(平安)	土師器・須恵器(平安)	継続協議後 工事立会	新発見遺跡
2018213	岡崎遺跡 794	確認調査	民間 土地区画 整理事業	江南区 新野字岡崎 3775番 外	遺物包含地	縄文・弥生・ 古墳・平安	縄文・弥生・ 古墳・平安	1/15 - 2/7	16	7647 (69,300.0)	金田拓也	-	土坑・溝・性格不明遺構・ ピット	縄文土器・石器(縄文)、弥生土 器・石製品(弥生)、土師器(古墳)、 土師器・須恵器・土製品・石製品、 木製品(平安)	本発掘調査	遺跡範囲拡大、 ※3 2018236と同一の調査
2018219	-	試掘調査	民間 事務所	東区 山本字七丁目 1412番1 外	-	-	12/27	1	426 (8,728.7)	諏山えりか	-	なし	なし	取扱不要		
2018220	程島館跡 168	確認調査	民間 個人住宅	秋葉区 新栄町 1831番4	城館跡	平安・中世	縄文・平安	1/22 - 24	3	144 (1,799)	諏山えりか	-	土坑・溝・ピット(縄文)	縄文土器・土師器・須恵器(平安)、 石製品	工事立会	
2018221	-	試掘調査	民間 宅地造成	西蒲区 和崎字金子 1358番	-	-	2/18・19	2	1238 (2,209.1)	諏山えりか	-	なし	なし	取扱不要		
2018223	山脇遺跡 217	確認調査	民間 個人住宅	秋葉区 朝日字山脇 2353 外	遺物包含地	古墳・平安	-	1/9	1	136 (429.8)	諏山えりか	-	なし	なし	慎重工事	
2018225	-	試掘調査	公共 (国) 国道	中央区 栗竹山 外	-	-	近世	7/24・25	2	440 (12,190.0)	高橋保雄	工藤祐大	なし	近世陶磁器	取扱不要	※2
2018226	-	試掘調査	公共 (国) 国道	中央区 明石 外	-	-	近世	9/13	1	280 (3,050.0)	高橋保雄	工藤祐大	なし	近世陶磁器	取扱不要	※2
2018229	-	試掘調査	民間 宅地造成	西区 新通字藤棚 2812番7 外	-	-	2/6	1	411 (3,761.8)	諏山えりか	-	なし	なし	取扱不要		
2018230	川根谷内墓所遺跡 380	確認調査	民間 農業施設	江南区 横塚字上郷 2383番1 外	遺物包含地	平安・中世	平安・近世	2/13	1	454 (3,416.0)	諏山えりか	-	土坑・ピット(平安)	土師器・須恵器・石製品(平安) 近世陶磁器	継続協議後 工事立会	
2018234	藤原遺跡 157	確認調査	民間 宅地造成	秋葉区 大鹿字藤原 1255-2外	遺物包含地	古代・中世	-	2/7	1	176 (1,218.6)	諏山えりか	-	なし	なし	工事立会	
2018235	-	試掘調査	民間 宅地造成	東区 竹尾一丁目 531番1 外	-	-	2/28	1	234 (2,137.2)	諏山えりか	-	なし	なし	取扱不要		
2018236	(岡崎南遺跡) 804	試掘調査	民間 土地区画 整理事業	江南区 新野字岡崎 3775番 外	遺物包含地	中世	中世	1/15 - 2/7	16	7647 (69,300.0)	金田拓也	-	ピット(中世)	土師器(平安)、珠洲焼・石製品、 木製品(中世)	本発掘調査	新発見遺跡 ※3 2018213と同一の調査
2018239	(五郎巻遺跡)	試掘調査	民間 店舗	北区 浦本字五郎巻 1194番 外	遺物包含地	平安	平安・近世	3/6	1	425 (2,050.5)	諏山えりか	-	なし	土師器・須恵器(平安)、 陶磁器(近世)	継続協議後 工事立会	新発見遺跡
2018240	六地山遺跡 3	確認調査	民間 社屋	西区 曾和字字田 965番1 外	遺物包含地	弥生・古墳・ 古代・中世	弥生	3/13	1	168 (2,647.6)	諏山えりか	-	性格不明遺構	弥生土器	継続協議後 工事立会	
2018247	(蛇喰遺跡) 800	試掘調査	公共 (県) 副場整備	秋葉区 水田	遺物包含地	平安	平安	10/31 - 11/8	6	2579 (130,000.0)	牧野耕作	-	性格不明遺構(平安)	土師器(平安)	継続協議	新発見遺跡 ※3 2018140と同一の調査
2018248	モスの塚 557	確認調査	公共 (県) 副場整備	西蒲区 打越	塚	中世	-	10/1 - 11/20	32	9467 (890,000.0)	金田拓也	-	なし	なし	継続協議後 工事立会	※3 2018170、2018249、 2018250、2018251と 同一の調査
2018249	茶院B遺跡 561	確認調査	公共 (県) 副場整備	西蒲区 打越	古銭出土地	中世	-	10/1 - 11/20	32	9467 (890,000.0)	金田拓也	-	なし	なし	継続協議後 工事立会	※3 2018170、2018248、 2018249、2018251と 同一の調査
2018250	狐島遺跡 792	確認調査	公共 (県) 副場整備	西蒲区 打越	遺物包含地	古代	古代	10/1 - 11/20	32	9467 (890,000.0)	金田拓也	-	なし	土師器(古代)	継続協議後 工事立会	※3 2018170、2018248、 2018249、2018250と 同一の調査
2018251	(宮上遺跡) 803	試掘調査	公共 (県) 副場整備	西蒲区 打越	遺物包含地	中世	中世	10/1 - 11/20	32	9467 (890,000.0)	金田拓也	-	土坑・性格不明遺構(中世)	珠洲焼・鉄滓(中世)	継続協議後 工事立会	新発見遺跡 ※3 2018170、2018248、 2018249、2018250と 同一の調査

※1 近世新潟県指定範囲内の周知化しない試掘調査についても、範囲内と判断できるように遺跡名と遺跡番号を記載している。近世新潟県跡の取扱いの経緯は、「年報」第1号に記載されている(表2014)。

※2 調査番号：2018226・2018229は新潟県教育委員会が実施した試掘調査のため、新潟市が実施した試掘調査に含まれない。

※3 埋蔵文化財情報管理システムの運用上、同一の調査でも遺跡が複数に分かれる場合は、遺跡ごとに調査番号が付けられている。

いる。公共事業に伴う試掘調査は道路・圃場整備事業が多く、民間事業に伴う試掘調査では宅地造成や店舗建設が多い。また、確認調査は専用住宅が多い。道路建設や圃場整備事業など1件当たりの事業規模（調査対象面積）が大規模なものは調査期間も長期に及ぶため、件数のみでは測れない。特に圃場整備に係る試掘確認調査は大規模かつ長期間に及び、市職員の現地調査日数は平成29年度並みに費やしている。

地域別では、秋葉区・江南区が多い。両区は、遺跡数はもとより公共事業・民間事業ともに他の区よりも多い。中央区では近世新潟町跡に関連する試掘調査が目立つ。

今年度の試掘調査で新しく発見された遺跡は、五郎巻遺跡（北区）、道正遺跡・岡崎遺跡・岡崎南遺跡（江南区）、裏田郷遺跡・水田中谷内遺跡・蛇喰遺跡（秋葉区）、桑山前田遺跡・真木江向遺跡・宮上遺跡・萱中遺跡（西蒲区）の計12遺跡と近世新潟町跡（中央区）で1地点である。秋葉区の2遺跡、西蒲区の4遺跡が圃場整備事業に伴う試掘調査で発見された。特に、萱中遺跡では現地表面下2.8mから古墳時代早期の遺物がまとまって出土した。また、西蒲区の茶院A遺跡は圃場整備に伴う確認調査により広範囲に広がる遺跡であることが確認された。

### (3) 工事立会

**概要** 工事立会は、遺跡の範囲内で行われる各種土木工事などに対し、原則として事前の試掘・確認調査で遺跡の内容を十分把握したうえで、『埋蔵文化財の保護と発掘調査の円滑化について（通知）』（平成10年9月29日付庁保記第75号 各都道府県教育委員会教育長宛文化庁次長通知、以下「文化庁標準」）および『発掘調査の要否等の判断基準』（平成11年9月10日付教文第578号、以下「新潟県基準」）に従って実施している。具体的には、以下の判断基準で実施している。

- ・「土木工事等により、明らかに遺跡の一部が破壊されるが、掘削範囲がきわめて狭小（『新潟県基準』により原則として掘削幅1m以下）であるため、記録保存を目的とした本発掘調査の実施が困難であるもの」

- ・「掘削が遺物包含層等におよばず、保護層も確保できる見込みであるが、施工が設計通りであるか立会によって確認する必要がある場合」などである。

工事立会にあたっては、『法』第93条の届出・同第94条の通知に対する取扱い指示文を事業者へ通知する。事業者は工事日程が決定次第当課へ連絡する。工事立会は、事業者の工程に従って新潟市の埋蔵文化財担当専門職員が可能な限り現地に訪れている。しかし、工事立会は件数が多く市全域に及ぶため、現状では委託業者の作業員数名で行う場合が多い（表6の調査担当者欄には、実際に現

地へ訪れた市職員あるいは委託事業者名を記載した）。

特に長期間にわたる大規模な工事の場合、事業者の協力を得て、あらかじめ施工代理人を交えた打合せを綿密に行うようにしている。これにより、保護施策の意義を理解してもらうことができ、工程の一部変更などを早期に連絡してもらえる体制が強化されてきている。

工事立会により遺物や遺構が発見された場合は、その場で記録を取り、出土遺物や記録類は、試掘・確認調査に準じた取扱いとしている。

また、大規模開発や圃場整備などに伴う長期間の工事立会では、限られた人数の市職員での対応に困難な場合があり、かつ経費も相当にかかる。今後、人員体制などを真剣に検討していく必要がある。なお、年々減少しているが工事立会指示が出ているにもかかわらず、事後報告となる例が後を絶たない。今後も事業者に対して理解と協力を得るため丁寧な説明を続けていく必要がある。

平成30年度 表3・6のとおり83件の工事立会を行った。平成29年度の65件から18件の増加である。工事内容は圃場整備関係が多く、秋葉区・西蒲区では大規模な面積で長期間に及んでいる。ほかには個人住宅関係・下水・水道などの案件が多い。（朝岡政康）



試掘調査風景（2018173・馬堀地区）



工事立会風景（2018143・六地山遺跡）

表6 平成30年度工事立会一覧(調査番号順)

調査番号	道路名		開発種別		所在区	調査期間	調査担当	検出 遺構	出土 遺物
	道路番号	事業者	内 容						
2018103	下郷遺跡 367	民間	個人住宅 (解体工事)	江南区	4/25	委託(吉沢組)	×	×	
2018104	所島前遺跡 754	民間	個人住宅	江南区	5/17	委託(吉沢組)	×	×	
2018105	上町遺跡 464	民間	倉庫	西蒲区	5/24・6/1	委託(吉沢組)	×	×	
2018111	中新田久保遺跡 208	民間	住宅解体	秋葉区	5/11	委託(吉沢組)	×	×	
2018113	紫ノ木原遺跡 771	公共	圃場整備	西蒲区	5/8	委託(吉沢組)	×	×	
2018118	程島船跡 168	民間	堀の造作	秋葉区	5/28	委託(吉沢組)	×	×	
2018122	西島中谷内遺跡 210	民間	管理設	秋葉区	7/30・31	委託(吉沢組)	×	×	
2018124	原遺跡 126	公共 (市)	上水道敷設	秋葉区	7/2	委託(吉沢組)	×	×	
2018126	裏田郷遺跡 793	公共 (市)	排水路入替・ 舗装	秋葉区	9/18～19・ 21～22・25・ 28、10/1	委託(吉沢組)	×	×	
2018127	下郷南遺跡 758	民間	個人住宅	江南区	7/10	委託(吉沢組)	×	×	
2018129	地蔵山遺跡 29	民間	個人住宅	中央区	7/24	委託(吉沢組)	×	×	
2018134	砂崩遺跡 389	民間	駐車場	江南区	8/9	諫山えりか	×	×	
2018136	浦木東遺跡 773	公共 (市)	下水道施設	北区	9/11	委託(吉沢組)	×	×	
2018137	結七島遺跡 209	公共 (市)	側溝・ 集水溝舗装工事	秋葉区	1/24	委託(吉沢組)	×	×	
2018141	砂岡遺跡 406	民間	個人住宅	江南区	9/19	諫山えりか	×	×	
2018142	宮浦遺跡 35	公共	電話柱撤去新設	東区	10/25	諫山えりか	×	×	
2018143	六地山遺跡 3	民間	基礎解体・ 浄化槽撤去	西区	12/21・25～ 26	委託(吉沢組)	○	○	
2018144	山木戸遺跡 112	民間	個人住宅	東区	9/26	諫山えりか	×	×	
2018145	大浦遺跡 16	民間	個人住宅	江南区	8/18	委託(吉沢組)	×	×	
2018146	宮下遺跡 780	公共	圃場整備	西蒲区	10/9、1/8・ 10・18・21、 2/15・19～20	委託(吉沢組)	×	×	
2018147	仲歩切遺跡 572	公共	圃場整備	西蒲区	10/3～19、 11/9、1/31、 2/1～12、 3/6～19・ 25～27	委託(吉沢組)	×	○	
2018148	中島遺跡 584	民間	排水路工事	西蒲区	10/10	委託(吉沢組)	×	×	
2018149	前山遺跡 11	公共	電話柱撤去新設	江南区	-	-	-	-	
2018150	湯前遺跡 751	公共	暗渠排水工事	西蒲区	11/12・28	委託(吉沢組)	×	×	
2018151	島瀬遺跡 623	公共	圃場整備	西蒲区	10/15・16、 11/13	委託(吉沢組)	×	×	
2018152	細池寺道上遺跡 151	公共	暗渠排水工事	秋葉区	10/22～31、 11/8・15～16	委託(吉沢組)	×	○	
2018153	西江浦遺跡 150	公共	暗渠排水工事	秋葉区	11/26、12/3	委託(吉沢組)	×	○	
2018156	三王山遺跡 419	民間	個人住宅	江南区	8/27	委託(吉沢組)	×	×	
2018157	大道外遺跡 92	公共	電話柱支線撤去	江南区	8/3	委託(吉沢組)	×	×	
2018159	裏田郷遺跡 793	民間	宅地造成	秋葉区	9/27、10/6	委託(吉沢組)	×	×	
2018160	原遺跡 126	公共	水道管	秋葉区	10/9～12	委託(吉沢組)	×	×	
2018161	宮浦遺跡 35	公共 (市)	道路改修工事	東区	12/18～20	委託(吉沢組)	×	×	
2018162	前山遺跡 11	民間	個人住宅	江南区	12/7・13	委託(吉沢組)	×	×	
2018163	前山遺跡 11	民間	個人住宅	江南区	2/13	委託(吉沢組)	×	×	
2018164	一本杉遺跡 490	公共	電話柱新設	西蒲区	2/22	諫山えりか	×	×	
2018165	新田郷南遺跡 775	民間	集合住宅	江南区	10/9	委託(吉沢組)	×	×	
2018166	下新田遺跡 573	公共	暗渠排水工事	西蒲区	10/11	諫山えりか	×	×	
2018167	仲歩切遺跡 572	公共	暗渠排水工事	西蒲区	11/8～10・ 13～14	委託(吉沢組)	○	×	
2018168	道上荒田遺跡 548	公共	暗渠排水工事	西蒲区	11/15～16	委託(吉沢組)	×	×	
2018169	亀田道下遺跡 768	民間	宅地造成	江南区	-	-	-	-	
2018176	曾我墓所遺跡 379	公共 (市)	下水道敷設	江南区	11/30	委託(吉沢組)	×	×	

調査番号	道路名		開発種別		所在区	調査期間	調査担当	検出 遺構	出土 遺物
	道路番号	事業者	内 容						
2018177	丸山遺跡 13	公共 (市)	上水道敷設	江南区	11/2	諫山えりか	○	×	
2018178	前田遺跡 53	公共	電話柱	西区	9/4	委託(吉沢組)	×	×	
2018179	ヤマサキ遺跡 55	民間	個人住宅	西区	9/19	委託(吉沢組)	×	×	
2018180	下郷遺跡 367	民間	個人住宅	江南区	5/11	委託(吉沢組)	×	×	
2018181	旧新潟税関 788	公共	税関庁舎 改修工事	中央区	9/19～28、 10/1～2・ 4～13・17	委託(吉沢組)	○	×	
2018183	居屋敷跡遺跡 577	民間	工場新設	江南区	-	-	-	-	
2018184	福島遺跡 552	公共	区画整理	西蒲区	3/6	委託(吉沢組)	×	×	
2018185	上向遺跡 544	公共	区画整理	西蒲区	11/12、 2/18・20、 3/1～2	委託(吉沢組)	×	×	
2018186	福島土手内遺跡 779	公共	区画整理	西蒲区	11/12	委託(吉沢組)	×	×	
2018188	高矢C遺跡 135	民間	個人住宅	秋葉区	10/26	委託(吉沢組)	×	×	
2018194	腰懸遺跡 157	民間	土蔵の解体	秋葉区	10/26	委託(吉沢組)	×	×	
2018195	山木戸遺跡 112	民間	集合住宅	東区	10/9・23	委託(吉沢組)	×	×	
2018202	腰懸遺跡 157	民間	個人住宅	秋葉区	11/17	委託(吉沢組)	×	×	
2018204	浦木東遺跡 773	公共	電話柱	北区	12/11	委託(吉沢組)	×	×	
2018205	岡崎遺跡 794	民間	用水管布設	江南区	12/17・ 20～21、 2/6～8	委託(吉沢組)	○	○	
2018206	結七島遺跡 209	民間	宅地造成	秋葉区	11/8・27	委託(吉沢組)	×	×	
2018207	浦木東遺跡 773	民間	電柱	北区	11/30	委託(吉沢組)	×	×	
2018210	砂岡遺跡 460	民間	農機具格納庫	江南区	12/25	委託(吉沢組)	×	×	
2018211	下郷西遺跡 777	民間	集合住宅	江南区	4/14	諫山えりか	○	×	
2018212	山木戸遺跡 112	民間	集合住宅	東区	4/13	諫山えりか	×	×	
2018214	舟戸遺跡 132	公共	電話柱	秋葉区	1/10	委託(吉沢組)	×	×	
2018215	山脇遺跡 217	公共	電話柱	秋葉区	12/25、1/9	委託(吉沢組)	×	×	
2018216	下場遺跡 86	公共	電話柱	東区	1/16	委託(吉沢組)	×	×	
2018217	舟戸遺跡 132	公共	電話柱	秋葉区	1/10	委託(吉沢組)	×	×	
2018218	塩辛遺跡 134	公共	電柱	秋葉区	1/31	委託(吉沢組)	×	×	
2018222	茨島遺跡 405	民間	住宅解体	江南区	2/8	委託(吉沢組)	×	×	
2018224	砂崩上ノ山遺跡 401	民間	土留工事	江南区	3/20・27	委託(吉沢組)	×	○	
2018227	三王山遺跡 419	民間	個人住宅	江南区	4/26	委託(吉沢組)	×	×	
2018228	平遺跡 128	公共 (市)	道路	秋葉区	3/5・8	委託(吉沢組)	×	×	
2018231	所島前遺跡 754	民間	個人住宅	江南区	1/8	委託(吉沢組)	×	×	
2018232	程島船跡 168	民間	カーポート	秋葉区	1/15	委託(吉沢組)	×	×	
2018233	砂岡遺跡 406	民間	用水路移設工事	江南区	1/23	委託(吉沢組)	×	×	
2018237	福島遺跡 552	公共	区画整理	西蒲区	2/19	委託(吉沢組)	×	×	
2018238	三王山遺跡 419	民間	個人住宅	江南区	4/26	委託(吉沢組)	×	×	
2018241	大蔵遺跡 41	公共 (外)	電話柱支線 撤去新設	西区	-	-	-	-	
2018242	緒立A遺跡 116	民間	資材置場	西区	3/6	委託(吉沢組)	×	×	
2018243	程島船跡 168	民間	個人住宅	秋葉区	3/7・8	委託(吉沢組)	×	○	
2018244	五郎巻遺跡 797	民間	店舗	北区	3/28・29	諫山えりか	×	○	
2018245	上土地亀B遺跡 293	公共 (市)	下水道工事	北区	-	-	-	-	
2018246	舟戸遺跡 132	民間	事務所	秋葉区	3/18	委託(吉沢組)	×	×	
2018252	緒立C遺跡 117	公共 (市)	東屋ベンチ撤去	西区	3/19	朝岡政康	×	×	
2018253	宅地郷遺跡 785	民間	個人住宅	秋葉区	-	-	-	-	

### III 文化財センターの事業

#### 1 本発掘調査の概要

##### (1) 本発掘調査について

埋蔵文化財包蔵地は現状のまま保存され、後世に継承されることが望ましい。しかし、工事で掘削されるなど、現状保存が不可能な場合は、記録による保存を目的とした発掘調査が必要となる。これを本発掘調査と呼んでいる。本発掘調査は報告書の刊行をもって完了する。

新潟市では、『法』第94条の通知については、事前に試掘・確認調査を実施して遺跡の内容などを把握し、文化庁の示した標準（『文化庁標準』）およびそれを受けて細目を設定した新潟県教育委員会の基準（『新潟県基準』）に則して取扱いに関する意見を付して県教育委員会へ副申している。これを受けて県教育委員会が判断した遺跡の取扱いに関する指示を通知者へ示している。

一方、『法』第93条の届出については、『新潟県基準』とこれを参考に新潟市が定めた『新潟市埋蔵文化財事務取扱要綱』（平成19年4月1日施行）に則して取扱いを決定し、届出者へ通知している。

本発掘調査が必要な場合は、遺跡内の掘削面積を最小にするため、開発事業者などと遺跡の取扱いについて協議している。しかし、公共事業では各種法令に基づき設計されていることから、設計変更し遺跡の現状保存を図ることは困難な場合が多い。民間事業もまた大規模に設計変更できないのが現状である。

本発掘調査実施にあたっては、『法』第99条により、新潟市教育委員会が実施するものとし、直営体制で実施している。新潟市では、歴史文化課が教育委員会事務を補助執行しており、本発掘調査に係る全体協議は埋蔵文化財担当が行い、本発掘調査は文化財センターが担当している。しかし、調査の件数・規模に対し、市専門職員

は人数が限られていることから、市専門職員による調査担当（正）および調査員（副）の正副調査員の配置が困難で、調査担当のみの配置となっている。また、現場の発掘作業と並行して現年度調査分および過年度調査分の整理・報告書作成作業も進めなければならない。解決手段の一つとして、民間調査組織を適切に導入し、調査員として調査業務の一部を委託している。調査担当は、本発掘調査全体管理のほか民間調査組織の監理も求められることになる。

##### (2) 平成30年度の本発掘調査

表1に示したとおり、5遺跡で本発掘調査を行った。道路建設関係（市事業）で2件、個人住宅関係で2件、民間開発関連事業で1件である。

公共事業は、江南区の中央環状線横越バイパスに係る川根谷内遺跡で821.6㎡を調査した。また、同区の市道砂崩南線に係る砂崩前郷遺跡で789.6㎡を調査した。江南区では民間開発事業に係る前山遺跡で64.8㎡を調査した。さらに、秋葉区では個人住宅建設に伴って程島館跡122.4㎡、原遺跡177.4㎡の調査を実施した。（朝岡政康）

##### (3) 平成30年度の本発掘調査現地説明会

平成30年度は川根谷内遺跡と砂崩前郷遺跡で現地説明会を開催した（表2）。いずれも50名を超える参加者があり、市民の遺跡や地域の歴史に対する関心の高さがうかがえる。なお、前山遺跡や程島館跡・原遺跡については、面積が狭小でいずれも調査地が住宅街のため、現地説明会は行わなかった。（龍田優子）

表2 平成30年度本発掘調査現地説明会参加者数

年月日	遺跡名	参加者数（人）
2018/10/6（土）	川根谷内遺跡	58
2018/10/6（土）	砂崩前郷遺跡	79

表1 平成30年度新潟市本発掘調査一覧（調査番号順）

調査番号	遺跡名 調査番号	調査回数 (回)	発掘 調査面積 (㎡)	調査地	調査の原因	調査担当	調査員	発掘 調査期間	遺跡の時代	主な遺構	主な遺物	位置 番号 (図1)
2018001	前山遺跡 11	6	64.8	江南区 北山字前山 263番 外	宅地造成 (民間開発)	遠藤恭雄	牧野耕作	5/14 ~5/31	古代	ピット(古代)、 性格不明遺構(近世以降)	土師器・須恵器(古代)、 陶磁器(中世・近世)、 石製品・金属製品	1
2018002	程島館跡 168	9	122.4	秋葉区 新栄町 65番1 外	個人住宅 建設	龍田優子	-	5/25 ~7/2	縄文・古代・ 中世	井戸・土坑・溝・ 性格不明遺構・ピット	縄文土器、 土師器・須恵器(古代)、 土製品・石製品、木製品	2
2018003	原遺跡 126	10	177.4	秋葉区 程島字 28番3 外	個人住宅 建設	立木宏明	-	6/1 ~7/30	縄文・弥生	土坑・性格不明遺構・ ピット・埋設土器	縄文土器・土製品・石器	3
2018004	川根谷内遺跡 365	6	821.6	江南区 曙町5丁目 37-2 外	道路整備 (公共事業)	牧野耕作	脇本博康(㈱吉田建設)	8/1 ~10/15	古代	水田跡・畦畔・ 性格不明遺構(近世以降)	土師器・須恵器(古代)、 陶磁器(近世)、 石製品・金属製品	4
2018005	砂崩前郷遺跡 421	3	789.6	江南区 砂崩697-5 716-7 外	道路整備 (公共事業)	遠藤恭雄	澤野慶子、 重留康広 (㈱シテックコンサル)	7/23 ~12/14	縄文・弥生・ 古代	土坑・ピット(縄文)、 旧河道(平安)、井戸・土坑・ 溝状遺構(近世以降)	縄文土器、弥生土器、土師 器・須恵器(平安)、石器・ 石製品・土製品・木製品	5



## 2 平成30年度の本発掘調査

平成30年度本発掘調査の概要を調査番号順に次項より

記す。概要掲載遺跡の位置を図1、一覧を表1に示した。  
各項題は、調査名であり、末尾括弧内は調査番号である。

(龍田優子)



図1 平成30年度本発掘調査位置図 (1/300,000)



本発掘調査風景 (前山遺跡第6次調査)



現地説明会風景 (砂崩前郷遺跡第3次調査)

(1) 前山遺跡 第6・7次調査 (2017188・2018001)

所在地 新潟市江南区北山字前山263番 外  
 調査の原因 宅地造成に伴う引き込み道路工事  
 (民間事業)

調査期間 平成29年9月4日  
 ～10月20日 (2017188・4日間)

平成30年5月14日～31日 (2018001)  
 調査面積 55.0㎡ (2017188・調査対象面積2,117㎡)  
 64.8㎡ (2018001)

調査担当 諫山えりか (2017188)  
 遠藤恭雄 (2018001)

調査員 牧野耕作 (2018001)

処置 記録保存

**調査に至る経緯** 前山遺跡内の宅地造成に伴い、平成29年4月13日付で事業者より市教育委員会宛てに照会があった。これを受けて、平成29年に確認調査(第6次・2017188)を行った。調査地は2か所に分かれており、東側に5か所、西側に14か所のトレンチを設定した。このうち西側調査地の1・5・13～18Tで遺物が出土し、14・17Tでは遺構も検出された(図2)。その後、17・18Tが宅地造成に伴い改良される引き込み道路の範囲に含まれることから、事業者と協議を進めた結果、19T以南の道路改良範囲の本発掘調査を実施することで合意した。また、宅地造成範囲については、開発の際に個別協議することとした(図1)。

**位置と環境** 本遺跡は江南区北山にある北山池の南東約200mに所在し、信濃川・阿賀野川・小阿賀野川に囲まれた新砂丘I(亀田砂丘)の東寄りに位置する。この地区は北から北山地区側の砂丘列(新砂丘I-3)、砂丘間低地、砂崩地区側の砂丘列(新砂丘I-2)に分かれており、遺跡は北山地区側の砂丘の南側斜面に位置する。昭和42年頃の砂取り工事によって砂丘が削平された際には遺物が出土したという。同砂丘列上には金塚山遺跡や彦七山遺跡といった古代の遺跡が所在する。現在の標高は2.7m前後で、現況は住宅地・畑地・道路となっている。

調査は宅地造成に伴う引き込み道路部分の幅6m、延長約24mを対象とした。遺跡範囲に10m方眼の大グリッドを設定した。この大グリッドを2m方眼に区分して1から25の小グリッドに分割し、「2B12」のように呼称・表記した。調査範囲内の2B1グリッドの座標は、X座標207880.00、Y座標54710.00で、座標北は真北方向に対し0度22分54秒西偏する。

**層序** 基本的な層序はI層が道路造成に伴う盛土、II層が近世以降の耕作土で、II a層が黒褐色シルト層、II b層が暗褐色シルト層、III a層が黒褐色シルト層



図1 調査位置図 (●: 寄贈資料採集地点) (1/10,000)

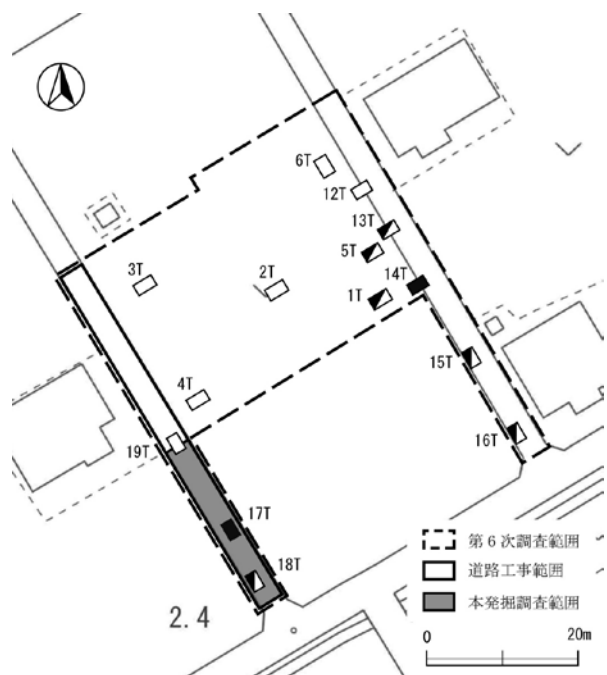


図2 第6次調査西側調査地トレンチ位置図 (1/1,000)

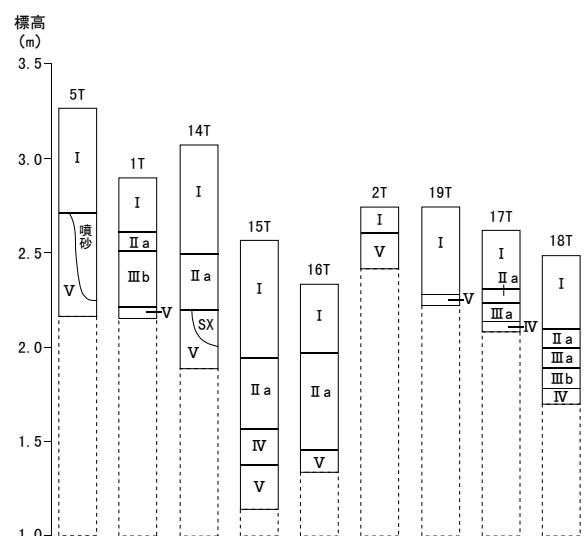


図3 第6次調査土層柱状図(抜粋) (1/40)





で古代の遺物包含層、Ⅲ b 層が灰黄褐色砂質シルト層で古代の遺構確認面、Ⅳ層がにぶい黄色シルト層で基盤層、Ⅴ層は灰黄褐色砂層で基盤砂層である。

Ⅲ a・b 層は調査区北半と中央部の砂丘斜面の落ち際に検出されたが、調査区南半では遺構によって削平され遺存していない。Ⅳ層は砂丘間低地に流れていた河川によって堆積したものと推測され、調査区南側にもみ堆積している。基盤砂層のⅤ層は中央部付近では確認できるが、北端部では土取りによってⅢ～Ⅴ層が削られており、灰白色の砂丘砂がⅠ・Ⅱ層直下で検出される場所もある。

**検出遺構** 調査区中央部で古代のピット (SP) 2 基、

南側で近世以降の性格不明遺構 (SX) 3 基、北側で近代以降の畝状遺構 (SN) 8 条が検出された。ピットはⅢ b 層上面で検出された。木柱などは残存しておらず、掘立柱建物の配置も確認できなかった。一方、本調査区南側で検出された SX 1・2 は水田に類する遺構、SX 9 は SX 1・2 の間の畦畔と考えられる (図4・表1)。

**出土遺物** 第6次・7次調査の出土遺物と調査地周辺で採集された寄贈資料を併せて報告する (図5・表2)。時期に関しては春日編年〔春日1999〕を参考にした。

第6次調査では古代の土師器・須恵器が出土しており、このうち2点を図化した (1・2)。1・2 は須恵器大甕

表1 遺構計測表

遺構 No.	グリッド	時代	確認面	主軸方位	規模 (m)					底面標高 (m)	形態		覆土	出土遺物
					上端		下端		深度		平面	断面		
					長軸	短軸	長軸	短軸						
SP10	2B-12	古代	Ⅱ b		0.31	0.31	0.20	0.14	0.21	1.49	円形	弧状	1	
SP11	2B-2・12	古代	Ⅲ a		0.36	0.20	0.18	0.06	0.53	1.87	-	箱状	4	
SX1	3B-4・5・9・10	近世	Ⅱ b		-	2.24	-	2.21	1.05	1.35	-	-	6	土師器・須恵器・近世陶磁器・石製品
SX2	2B-12・13・17・18・19・22・23・24、3B-3・4	近世	Ⅱ b		-	5.00	-	3.76	0.83	1.57	-	半円状	9	土師器・須恵器・近世陶磁器・石製品・金属製品
SX9	2B-24、3B-4	近世	Ⅱ b	N-47°-E	2.24	0.69	2.24	1.20	0.12	2.28	-	逆台形状	1	
SN3	2B-2	近代	Ⅱ a	N-40°-E	0.48	0.41	0.35	0.24	0.37	2.03	-	半円状	2	土師器
SN4	2B-1・2	近代	Ⅱ a	N-32°-E	1.39	0.54	1.29	0.39	0.38	2.02	-	半円状	2	土師器
SN5	1B-21、2B-1	近代	Ⅱ a	N-36°-E	1.53	0.42	1.34	0.22	0.35	2.05	-	半円状	2	土師器・金属製品
SN6	1B-21、2B-1	近代	Ⅱ a	N-40°-E	1.91	0.30	1.84	0.18	0.29	2.11	-	半円状	2	土師器・石製品・金属製品
SN7	1A-25、1B-21、2A-5	近代	Ⅱ a	N-40°-E	2.26	0.30	2.18	0.18	0.36	2.04	-	半円状	2	土師器・近世陶磁器・金属製品
SN8	1B-16	近代	Ⅱ a		-	-	-	-	0.25	2.15	-	半円状	2	土師器



調査区遠景 (南東から)



調査区完掘状況 (南東から)



調査区東壁基本層序 (南西から)



SP11 完掘状況 (南西から)

である。1の口縁部は直線的に立ち上がり外面には波状文が描かれる。2は口縁端部の破片資料である。5 Tから出土し、後述の寄贈資料と接合した。

第7次調査では土師器・須恵器・近世陶磁器・石製品・鍛冶関連遺物が出土した。遺物は古代の遺構ではなく、包含層や近世・近代遺構などに混入して出土する。このうち18点を図化した(3~20)。3は須恵器大甕の底部付近、4は須恵器無台杯の底部、5は須恵器杯蓋の口縁部である。いずれも破片資料で、4は立ち上がり部分のロクロナデが強く残る。6は土師器長甕、7は土師器小甕の口縁部である。6は非ロクロナデ成形でIV期の所産と考える。8は古墳時代の土師器高杯である。内黒土器で古墳時代後期に位置付けられる。9は須恵器無台杯、10は須恵器杯蓋の破片資料である。11~13は土師器長甕、14~17は土師器小甕である。このうち11~13・17は非ロクロナデ成形で、IV期の所産と考える。18は須恵器有台杯の底部資料である。底径が大きく、IV期に位置付けられる。19・20は時期不明の鉄滓と石製品で、いずれも破片資料であった。

次に寄贈資料について報告する。寄贈資料は本調査地の北東約80mの畑地(図1)で村木武明氏が採集した土器である。総量はコンテナ2箱で、このうち13点を図化した(21~33)。21~29は須恵器である。21の無台杯は口縁端部で外反する。22の有台杯は厚手で、高台は内端

接地となる。23~25は杯蓋である。23・24は内面に短いかえりが付き、II期に位置付けられる。25は内面全体に墨痕があり、硯として転用されたと考える。26は円面硯の高台部である。透かしと思われる痕跡もあるが、破片のため詳細は不明である。27は大甕、28は甕とした。28は通常の大甕より口縁部が短く、鉢の可能性もある。29は小型の壺の底部資料である。30~32は土師器で、30は無台椀、31・32は長甕である。30は底径が大きく、内面のロクロナデが強く残る。31・32は非ロクロナデ成形でIV期の所産と考える。33は珠洲焼の播鉢の体部で、内面に卸目が確認できる。

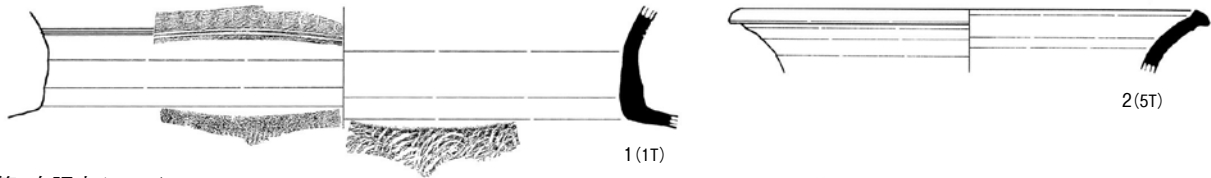
まとめ 出土遺物と寄贈資料から前山遺跡の存続期間は古墳時代後期から中世と推測され、主体となるのは古代である。遺跡の中心は本調査地の北東側、寄贈資料が採集された地点周辺の可能性が高い。今回の調査で確認された古代の遺構・遺物はわずかであったが、砂丘から砂丘間低地にかけての堆積状況を観察することができた。亀田砂丘後列東端に立地する小丸山東遺跡[遠藤2015]でも同様の土層堆積が確認されており、砂丘縁辺における遺跡の形成過程を示した調査事例である。

なお、前山遺跡第7次調査は、本書の記述をもって正式報告とする。(澤野慶子)

表2 遺物観察表

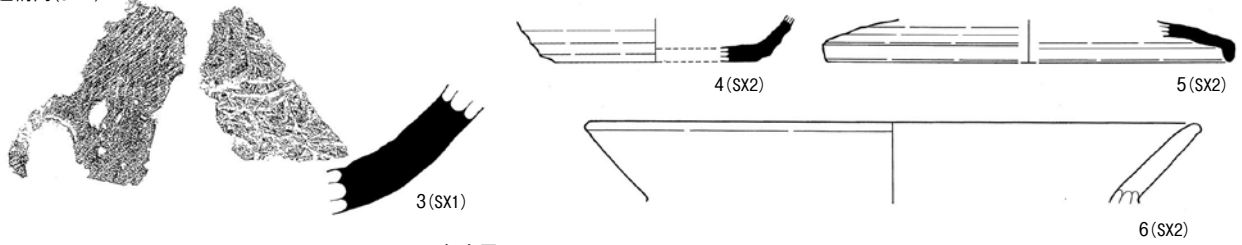
掲載No.	調査番号	出土位置		層位	種別	器種	法量 (cm)			手 法			遺 存 率		時期	備 考
		遺構名	グリッド・地番				口 径	底 径	器 高	外 面	内 面	底 部	口縁部	底 部		
1	2017188	1 T		IIb	須恵器	大甕				ロクロナデ・波状文・沈線・タタキメ	ロクロナデ・当て具痕				IV	
2	2017188	5 T	北山340・351	I	須恵器	大甕	36.0			ロクロナデ	ロクロナデ		6/36		V・VI	寄贈資料と接合
3	2018001	SX1	3B5	2	須恵器	大甕				タタキメ	当て具痕				V・VI	底部か
4	2018001	SX2	2B18	2	須恵器	無台杯		8.0		ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切		4/36	V・VI	
5	2018001	SX2	3B3	2	須恵器	杯蓋	16.0			ロクロナデ	ロクロナデ		1/36		V・VI	
6	2018001	SX2	2B24	1	土師器	長甕	24.0			ヨコナデ・ヘラナデ	ヨコナデ		2/36		IV	
7	2018001	SN4	2B2	2	土師器	小甕	14.0			ロクロナデ	ロクロナデ		1/36		V・VI	
8	2018001		2B23	IIb	土師器	高杯				ヘラナデ	ミガキ				古墳	古墳時代後期
9	2018001		2B2	IIIb	須恵器	無台杯	12.0	8.2	3.1	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切	7/36	9/36	V・VI	
10	2018001		2B18	IIb	須恵器	杯蓋				ロクロナデ	ロクロナデ				V・VI	
11	2018001		2B7	IIIa	土師器	長甕	22.0			ハケメ			1/36		IV	
12	2018001		2B7	IIIa	土師器	長甕		8.0		ヘラナデ		ヘラナデ		8/36	IV	
13	2018001		2B7	IIIa	土師器	長甕		7.0				無調整		10/36	IV	
14	2018001		2B12	IIIa	土師器	小甕		7.0		ロクロナデ	ロクロナデ			9/36	V・VI	内外面磨耗
15	2018001		2B12	IIIb	土師器	小甕		8.0		ロクロナデ・ハケメ	ロクロナデ	ヘラナデ		2/36	V・VI	
16	2018001		2B2	IIIa	土師器	小甕		5.0		ロクロナデ	ロクロナデ			3/36	V・VI	
17	2018001		2B6	IIIb	土師器	小甕				ヨコナデ・ハケメ	ハケメ				IV	
18	2018001	表採			須恵器	有台杯		10.0		ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切		11/36	IV	高台内端接地
19	2018001	SX2	2B12	2	鍛冶関連	鉄滓	長さ139	幅36	厚さ17						-	重量28.5g
20	2018001	SX1	2B17	1	石製品	巖石	長さ111	幅41	厚さ31						-	重量178.0g 流紋岩
21	寄贈		北山340・351		須恵器	無台杯	14.0		3.0	ロクロナデ	ロクロナデ		4/36		V・VI	
22	寄贈		北山340・351		須恵器	有台杯		7.8		ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切・右		36/36	V・VI	高台内端接地
23	寄贈		北山340・351		須恵器	杯蓋	18.0			ロクロナデ・ケズリ	ロクロナデ		6/36		II	かえり有
24	寄贈		北山340・351		須恵器	杯蓋	16.0			ロクロナデ	ロクロナデ		1/36		II	かえり有
25	寄贈		北山340・351		須恵器	杯蓋	13.8		2.3	ロクロナデ・ケズリ	ロクロナデ		15/36		V・VI	内面墨痕・転用硯
26	寄贈		北山340・351		須恵器	円面硯		14.0		ロクロナデ	ロクロナデ			3/36	-	透かしあり
27	寄贈		北山340・351		須恵器	大甕				ロクロナデ・タタキメ	ロクロナデ・当て具痕				V・VI	
28	寄贈		北山340・351		須恵器	甕	26.0			ロクロナデ	ロクロナデ		3/36		V・VI	
29	寄贈		北山340・351		須恵器	小壺		6.2		ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切・左		18/36	V・VI	
30	寄贈		北山340・351		土師器	無台椀		7.0		ロクロナデ	ロクロナデ	糸切・右		11/36	V・VI	
31	寄贈		北山340・351		土師器	長甕	22.0			ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ		1/36		IV	
32	寄贈		北山340・351		土師器	長甕	20.0			ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ		2/36		IV	
33	寄贈		北山340・351		珠洲焼	播鉢					卸目				中世	

第6次調査(1・2)

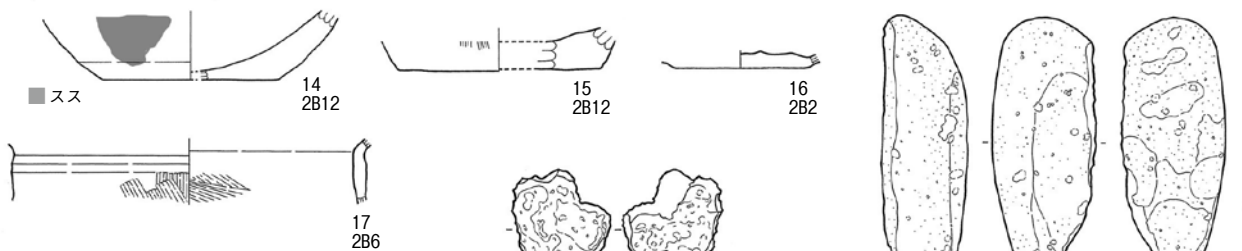
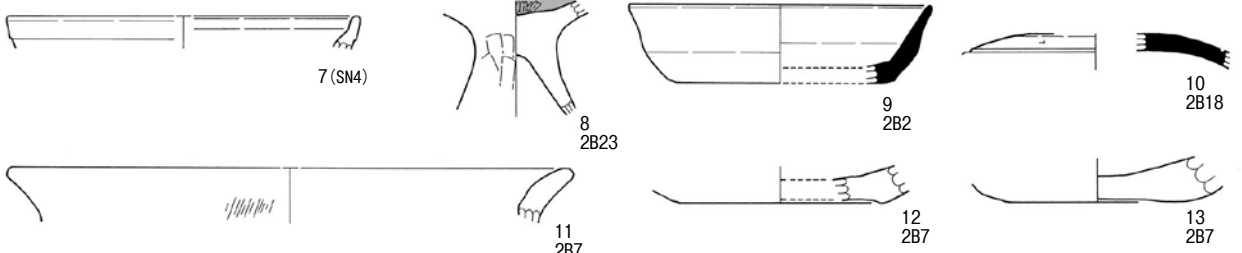


第7次調査(3~20)

遺構内(3~7)

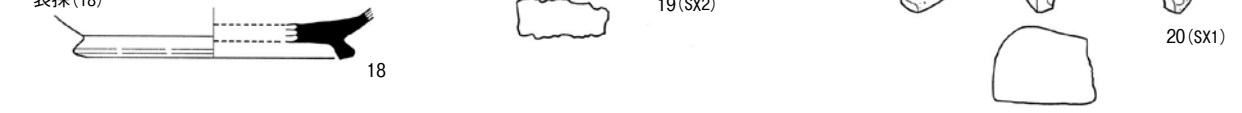


包含層(8~17)



■ スス

表採(18)



寄贈資料(21~33)

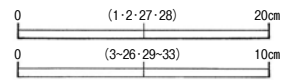
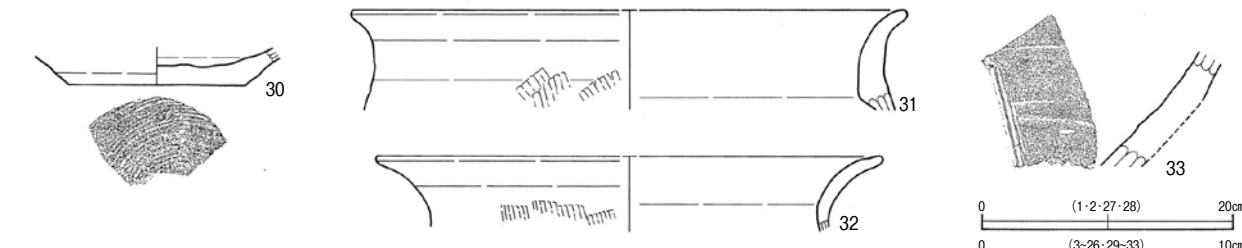
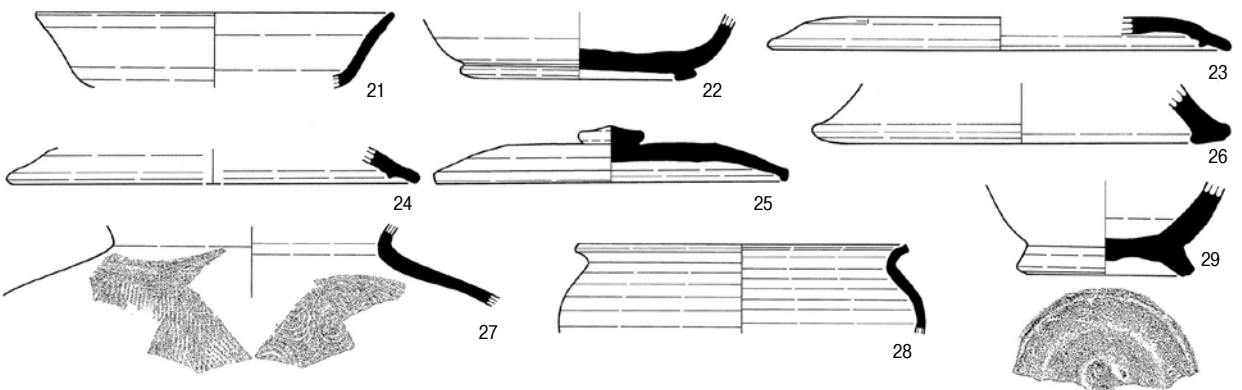


図5 遺物実測図(1/3・1/6)



## (2) 程島館跡 第9次調査 (2018002)

所在地 新潟市秋葉区新栄町1831-1 外

調査の原因 個人住宅建設 (民間事業)

調査期間 平成30年5月25日～7月2日

調査面積 122.4㎡

調査担当 龍田優子

処置 記録保存

調査に至る経緯 平成29年11月、個人住宅建設に伴い既存の建物解体前に確認調査 (第8次・2017229) を実施した。その結果、後世の攪乱を受けているものの遺物包含層と遺構が検出され遺物も出土した。この結果を受け建物解体時に工事立会、解体後の平成30年2月には追加の確認調査 (第8次・2017229) を実施した。結果は遺物包含層と遺構確認面が検出され、遺物が出土した。以上の調査結果を基に事業主と協議を行い、基礎工事などにより遺物包含層が掘削されるなど保護層が確保できない範囲について平成30年4月29日付で『法』第93条届出、同日付で発掘調査依頼書が提出された。平成30年5月18日付新歴F第26号の4で着手報告を提出し、本発掘調査を実施した (図1)。

位置と環境 新津丘陵の北西末端部に位置し、標高は6m前後である。程島館跡は一辺110mの方形とされ、旧更正図では水田に囲まれた区画を確認できる。堀として掘削された部分は水田、堀の掘削土は内側に盛り上げて土塁を築いたようである。旧更正図に畑として記載されるこの土塁の一部は現在も残る。また、水田部分は城ノ越、水田に囲まれた内側には館ノ内という小字名が残る。今回の調査地は、縄文時代前期終末の資料が多く出土した昨年の本発掘調査 (2017006) 地の道路を挟んで北西に位置し、両調査地ともに堀の内側にあたる。

検出遺構 かつての整地などで大部分が遺構確認面まで攪乱されて盛土や盛砂が厚く堆積していたが、確認面は概ね北へ向かって傾斜して下る。遺構は非常に多く、井戸2基、土坑10基、溝状遺構5条、性格不明遺構7基、ピット117基が重なり合うように検出された。大半が古代と中世で、縄文時代の遺構は南側のわずかに高くなった一部で確認された。

古代の遺構は、焼土と炭化物が層状に堆積する土坑が複数基検出された。遺構内には焼土が広範囲に厚く堆積し、燃焼時間の長さがうかがえる。中世の遺構は、井戸のほか、柱根は検出されなかったが柱痕をもつピットが多数検出され、掘立柱建物が複数棟建つと推測される。

出土遺物 遺物包含層は2層に分層されるが、両層からは縄文・古代・中世の遺物が混在して出土する。整地時の重圧などで包含層遺物の残存状況は良くないが、

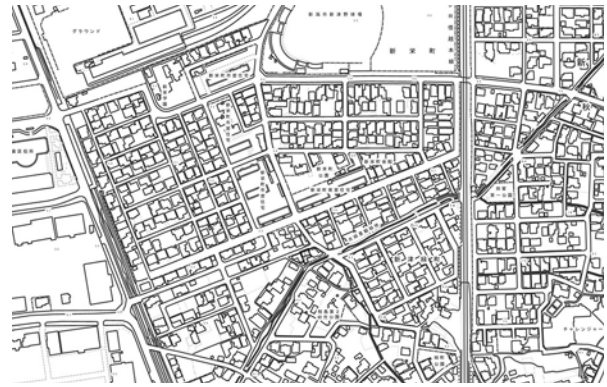
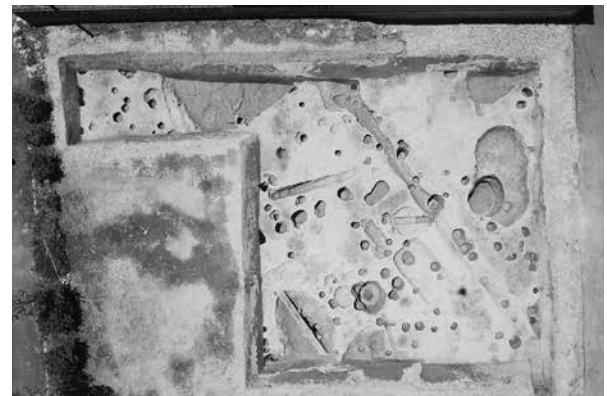


図1 調査位置図 (1/10,000)



調査区全景 (右が北西)



SX36断面 (西から)

遺構覆土からは比較的良好な状態の遺物が出土している。遺物の多くは平安時代の土師器や須恵器で、縄文土器や黒曜石片のほかに焼成粘土塊やアスファルトがわずかに含まれる。また、中世の井戸底面からは良好な状態の横槌や刀形などの木製品、端部を削って尖らせている加工木や樹皮が付いた自然木などが多数出土した。総出土量は木製品1箱を含め、コンテナで26箱である。

まとめ 調査地の北西端まで古代・中世の遺構が密に検出され、遺跡の範囲がさらに低地へ広がることが分かった。今後は、各遺構で採取した土壌で堆積当時の植生や植物利用などを推測し、2か年の調査を総合的に判断して時代ごとの土地利用を考えたい。報告書刊行は令和2年度以降の予定である。(龍田優子)

(3) 原遺跡 第10次調査 (2018003)

所在地 新潟市秋葉区程島字原208番3 外

調査の原因 個人住宅建設 (民間事業)

調査期間 平成30年6月1日～7月30日

調査面積 177.4㎡

調査担当 立木宏明

処置 記録保存

**調査に至る経緯** 個人住宅建設に先立ち、平成29年12月に確認調査(第9次・2017238)を実施した結果、表土直下に遺物包含層が残存していることが明らかとなった。そこで、事業者と協議を行い駐車場工事などにより遺物包含層が掘削される範囲について本発掘調査を実施することで合意した。平成29年12月26日付で『法』第93条届出が、平成30年4月27日付で発掘調査依頼書が事業者より提出された。これを受けて平成30年5月15日付で着手報告を提出し、本発掘調査を実施した(図1)。

**位置と環境** 新津丘陵の北西部、丘陵から張り出した台地状の尾根に立地する。現地表面の標高は約25mで現況は宅地である。戦後、周囲はお茶栽培が盛んな場所で調査地も以前は茶畑として利用されていた。市域では著名な縄文時代の遺跡であり、明治時代以来、多くの研究者が踏査を行い、その遺物が研究誌・市町村史に紹介されてきた。今回の調査は、旧新津市教育委員会による調査も含めて第10次調査にあたり、記録保存を目的とする初の本発掘調査である。

**概要と層序** 基本層序はI層が表土(旧耕作土)、II・III層が遺物包含層、IV層上面が遺構確認面、IV層以下が基盤層である。耕作の影響による攪乱が著しく、II層が全域でほとんど破壊されていたのに対し、III層が調査区北東部に良好に残存し、遺物が多量に出土した。

**検出遺構** 遺構は埋設土器3基、土坑16基、性格不明遺構1基、ピット31基の計51基が検出された。調査区西側および南東部は削平を受けており、遺構の大半は北東部に集中する。調査区各所には土器集中部がみられ、埋設土器はいずれもその集中部付近で発見された。特徴的な遺構として貯蔵穴とみられる袋状土坑や、破碎された土版が出土した土坑が検出された。

**出土遺物** 破片数で約10,000点の縄文土器が出土した。時期は、縄文時代中期前半から晩期後葉だが、晩期中葉から後葉の時期が主体を占める。また、弥生土器(前期)が、今回の調査で初めて出土した。縄文土器片の一部には、アスファルトが付着したものもある。石器では、石鎌や石錐、石匱、磨製石斧、磨石、石皿、台石など生業に関する道具がまとまって出土した。石材として、玉髓が多用されていることが注目され、原石や石核に伴っ



図1 調査地位置図 (1/10,000)



調査地全景 (下が北東)



縄文土器出土状況

て剥片も大量に出土していることから、遺跡で盛んに石器製作が行われていたと考えられる。その他、土版や石棒といった祭祀に関わる道具も出土している。

**まとめ** 小規模な発掘調査であったにも係らず、多数の遺構が検出され、大量の遺物が出土した。これまでの確認調査の結果を合わせても、原遺跡は縄文時代中期から晩期における新津丘陵の拠点集落と位置付けることができ、今回の調査でその一端が明らかとなった。

なお、報告書の刊行は令和2年度以降の予定である。

(立木宏明)



#### (4) 川根谷内遺跡 第6次調査 (2018004)

所在地 新潟市江南区曙町5丁目37-1 外

調査の原因 主要地方道新潟中央環状線道路整備事業  
(公共事業)

調査期間 平成30年8月1日～10月15日

調査面積 821.6㎡

調査担当 牧野耕作

調査員 協本博康 (榎吉田建設)

処置 記録保存

**調査に至る経緯** 主要地方道新潟中央環状線道路(横越バイパス)建設に伴い実施した試掘調査(第6次・2017191)の結果、水田の可能性のある遺構や平安時代の遺物が見つかり、隣接する川根谷内遺跡が事業用地まで拡大することが確認された。

この調査結果を基に協議を進めた結果、道路建設により影響の及ぶ道路本線部分の延長約60m、幅約12mの範囲について本発掘調査を行うこととなった。排水路以北の範囲については追加の確認調査を令和元年度に実施し、その結果をもって対応を決定することとした。事業主から『法』第94条の届出が提出され(平成29年12月13日付)、平成30年7月30日付新歴F第3号で着手報告を提出し、本発掘調査を実施した(図1)。

**位置と環境** 遺跡は阿賀野川の支流と考えられる埋没した旧河道南側の自然堤防に立地する。現地の標高は3.1～3.7mで、現況は宅地である。遺跡は阿賀野川から西へ約1.9kmの距離にある。この一帯は昭和40年代前半に工事に土取りされており、遺跡の大部分が消滅したとされている。

**検出遺構** 遺構確認面は現地表面下1.0～1.5mで、近世以降の水田跡とそれに伴う畦畔4条、性格不明遺構1基が検出された。調査区全面が近世以降の水田跡であり、畦畔は水田に伴うと考えられる。南北方向の畦畔は確認できたが、東西方向の畦畔は確認できなかった。

性格不明遺構は調査区北端で見つかり、遺構の深度は現地表面より約1.3m下であった。遺構は調査区外へ延びており、遺構全体を調査できなかったため明確ではないが、遺構の位置から旧河道の川べりの可能性が高いと考えられる。

**出土遺物** 平安時代(9世紀代)の土器と江戸時代以降の陶磁器を中心に、鉄製品・石製品が出土している。出土量はコンテナで6箱である。9世紀の土器は須恵器無台杯・有台杯・杯蓋・長頸壺や土師器無台碗・長甕・鍋などで、近世陶磁器は瓶・搦鉢・鉢などである。鉄製品は和釘が出土した。

**まとめ** 今回の本発掘調査では、江戸時代以前と



図1 調査位置図(1/10,000)



調査地と北にのびる中央環状道路(南西から)



完掘状況(南西から)

考えられる遺構は発見されなかった。しかし、平安時代の遺物が出土していることや、同じ自然堤防上で数多く同時代の遺跡が所在していることから、川根谷内遺跡でも当時人々が生活していたと考えられる。調査地は自然堤防の幅が狭まる場所で、南側に向けて傾斜していることから、居住に適した場所とはいえないと推測できる。そのため、遺跡の主要部は自然堤防の幅が広がる、調査区より東側の遺跡範囲中心付近で、調査地はその縁辺部と考えられる。

なお、報告書は平成30年度内に刊行した〔牧野・協本ほか2019〕。  
(牧野耕作)

(5) 砂崩前郷遺跡 第3次調査 (2018005)

所在地 新潟市江南区砂崩697-5・716-7 外

調査の原因 市道砂崩南線整備工事 (公共事業)

調査期間 平成30年7月24日～12月14日

調査面積 789.6㎡

調査担当 遠藤恭雄

調査員 澤野慶子、  
重留康宏 (㈱シン技術コンサル)

処置 記録保存

**調査に至る経緯** 市道砂崩南線建設工事に先立ち、平成29年度に砂丘の南側に沿う延長約770mを対象に試掘・確認調査を行った。その結果、平安時代の遺物が出土した1区(204㎡)と縄文時代中期・晩期と平安時代の遺物が出土した2区(424㎡×2面)が本発掘調査の対象となった。江南区建設課より『法』第94条の通知(平成30年1月11日付)が提出され、平成30年7月24日付新歴F第24号で着手報告を提出し本調査を実施した(図1)。

**位置と環境** 遺跡は、亀田砂丘前列(新砂丘I-2)の中央東寄りに位置し、東西約200m、南北約200mの範囲と推定されている。付近には、縄文時代前期初頭まで遡る砂崩遺跡が本遺跡北東側に隣接するなど、原始・古代の遺跡が密集し、信濃川以東の市内平野部では、最も早くから人々の活動痕跡がみられる地域である。

**概要と層序** 基本層序は水田耕作土(I層)、沖積層である黄灰色～灰色シルト(II層)および灰色粘性シルト層(III層)、砂丘堆積土である黒褐色腐植砂(IV層)および基盤となる浅黄色砂層(V層)に分けられる。I・II層は水平に堆積し、II層上面が近世以降の遺構および古代と推定される旧河道の検出面である。III層以下は2区でのみ検出され、IV層上面では標高0.5～0.9mで南東側に舌状に突き出した地形となる。IV層は層厚0.3～0.5m、a～cに分けられ、IVa・b層が縄文～弥生時代の遺物包含層、IVcはV層との漸移層で、IVc～V層上面が同時期の遺構確認面である。

**検出遺構と出土遺物** 古代については、2区上層において旧河道から9世紀代の須恵器杯・大甕などが出土したにとどまる。2区下層では、土坑3基、ピット1基が確認された。遺構の分布は標高の高い調査区の北側に偏り、土坑(SK7)において晩期中葉の所産とみられる遮光器系土偶の胴下半(写真下 現存高10.7cm)が出土した。IV層では、縄文時代中期前葉および後期中葉から弥生時代初頭の土器、石鏃・磨製石斧の刃部などの石器が出土した。土器の主体は縄文時代晩期後葉であり、縄文時代中期・後期の土器はIV層下位層を中心に出土している。

**まとめ** 2区下層では、縄文時代中期から弥生時



図1 調査位置図(1/10,000)



2区下層(IV層)遺物出土状況(南西から)



遮光器系土偶(2区SK7出土)

代初頭の遺物包含層が良好な状態で残存することが確認された。焼土痕など明確な生活痕跡は検出されなかったが、遺物の出土状況から、砂丘頂部に向かう北側調査区外に遺跡の中心部が存在し、遺物はそこから廃棄または自然力により2次的に調査区内に移動したものと推定された。各時期の遺物が散発的に出土しており、砂丘後背湿地に面した立地を背景に、周辺の拠点遺跡の活動領域として断続的に利用されたことがこうした出土状況につながったものと考えられる。砂丘上の遺跡の多くが開発などにより破壊され消滅する中で、その一部は深く埋没し、良好な状態で遺存する可能性を示す例である。また、自然科学分析の結果から、当該地は3世紀第2四半世紀～4世紀初頭に急速に埋没した可能性がある。

なお、報告書は令和元年度に刊行した〔遠藤・重留ほか2020〕。(遠藤恭雄)



### 3 整理作業の概要

平成30年度に文化財センターが実施した本発掘調査などの整理作業の一覧を調査番号順に表4に、同年度に刊行した報告書を刊行順に表5に示した。

#### (1) 試掘・確認調査、工事立会、本発掘調査の再整理事業

試掘・確認調査、工事立会は歴史文化課で実施し、出土遺物は調査担当の指示により文化財センターで水洗・注記・収蔵作業を行っている。

本発掘調査以外の遺物は、一般に公開されることなく収蔵されてしまう場合が多い（昨年度までは、本書『年報』で主要な試掘・確認調査および工事立会の概要と出土遺物などを記載していたが今号から割愛している）。

平成30年度は前年度の試掘・確認調査、工事立会に伴う遺物の整理を行い、38調査分でコンテナ約52箱を収蔵した。報告書刊行済みの掲載資料は、コンテナ収納状況の点検を行い、接着剤や充填材の経年劣化により破損した資料の再接合などを適宜行っている。（相澤裕子）

#### (2) 整理作業

表4に示したとおり、複数の本発掘調査について整理作業を行い、順次報告書を刊行している。特に、県営圃

場整備事業に伴い平成19年から継続して本発掘調査を行っている細池寺道上遺跡の整理作業は膨大で、未刊行の複数の調査を並行して進めている。

#### (3) 平成30年度刊行報告書

発掘調査は報告書の刊行をもって完了する。事業者への費用負担もあるため、報告書は発掘調査成果が風化する前の可能な限り早い刊行が望ましい。

表5に示したとおり、平成30年度に報告書を刊行した本発掘調査は3件である。平成28年に発掘調査した細池寺道上遺跡（2016001）は『細池寺道上遺跡Ⅷ 第48次調査－県営ほ場整備事業（担い手育成型）両新地区に伴う細池寺道上遺跡第23次発掘調査報告書－』（立木・奈良ほか2019）として刊行した。また、平成29年度に本発掘調査を実施した赤鎗砂山遺跡（2017001）の報告書『赤鎗砂山遺跡 第5次調査－商業施設建設に伴う赤鎗砂山遺跡第3次発掘調査報告書－』（立木・澤野ほか2019）を刊行した。さらに、今年度の本発掘調査を実施した川根谷内遺跡（2018004）は、遺構・遺物ともに少なかったため『川根谷内遺跡 第6次調査－主要地方道新潟中央環状線道路整備事業に伴う川根谷内遺跡第2次発掘調査報告書－』（牧野・脇本ほか2019）として年度内刊行した。

（龍田優子）

表4 平成30年度整理作業一覧

遺跡名・事業名	調査回数	調査番号	調査原因	整理担当	主な作業内容
細池寺道上遺跡	29・31・44・46・48・50	2009003・2010003・2014001・2015002・2016002・2017002	圃場整備	立木宏明・奈良佳子、細野高伯（㈱シン技術コンサル）	基礎整理・遺物実測・報告書作成・印刷刊行
大沢谷内遺跡	15・17・19	2009002・2010002・2011006	道路整備	相田泰臣	基礎整理・報告書作成
赤鎗砂山遺跡	5	2017001	商業施設建設	立木宏明・澤野慶子・奈良佳子	報告書作成・印刷刊行
浦木東遺跡	3	2017003	道路整備	金田拓也・澤野慶子	基礎整理・写真整理・遺物実測・報告書作成
亀田道下遺跡	2	2017004	道路整備	澤野慶子・遠藤恭雄	基礎整理・写真整理・遺物実測・報告書作成
秋葉遺跡	13	2017005	個人住宅建設	今井さやか	基礎整理・写真整理・遺物実測・報告書作成
程鳥館跡	7・9	2017006・2018002	個人住宅建設	龍田優子・相澤裕子	基礎整理・写真整理・遺物実測
前山遺跡	6	2018001	民間開発	遠藤恭雄・牧野耕作・澤野慶子	基礎整理・写真整理・遺物実測・報告書作成
原遺跡	10	2018003	個人住宅建設	立木宏明	基礎整理・写真整理・遺物実測・報告書作成
川根谷内遺跡	6	2018004	道路整備	牧野耕作、脇本博康（㈱吉田建設）	基礎整理・写真整理・遺物実測・報告書作成報告書刊行
砂前郷遺跡	3	2018005	道路整備	遠藤恭雄・澤野慶子、重留康広（㈱シン技術コンサル）	基礎整理・写真整理・遺物実測・報告書作成
試掘調査・確認調査・工事立会・本発掘調査再整理事業	-	-	各種事業	相澤裕子	収蔵作業・台帳作成・遺物修復

表5 平成30年度刊行発掘調査報告書一覧

書名	副書名	発行年月日	執筆者
赤鎗砂山遺跡 第5次調査	商業施設建設に伴う赤鎗砂山遺跡第3次発掘調査報告書	平成31年3月8日	立木宏明・澤野慶子ほか
川根谷内遺跡 第6次調査	主要地方道新潟中央環状線道路整備事業に伴う川根谷内遺跡第2次発掘調査報告書	平成31年3月28日	牧野耕作・脇本博康ほか
細池寺道上遺跡Ⅷ 第48次調査	県営ほ場整備事業（担い手育成型）両新地区に伴う細池寺道上遺跡第23次発掘調査報告書	平成31年3月15日	立木宏明・奈良佳子ほか
平成30年度 史跡古津八幡山 弥生の丘展示館 企画展関連講座・講演会 記録集		平成31年3月30日	相田泰臣（編集）

## 4 資料の収蔵・保管

各項の概要および基本的事項の詳細は、『年報』第1号に記載されている〔渡邊2014b〕。

### (1) 収蔵方針

文化財センターは、新潟市内で発掘調査によって出土した遺物や、写真・図面などの記録類を一括集中管理している。

また、文化財センター開館前の平成22年以前の発掘調査によらない考古資料は、各区の博物館や資料館などで保管・管理が行われている。

### (2) 収蔵・保管施設

収蔵・保管施設には、埋蔵文化財収蔵庫・特別収蔵庫1（木製品）・2（金属製品）・資料収蔵庫・図書室・民俗資料収蔵庫がある。民俗資料収蔵庫はⅢ4（6）に記載した。

**埋蔵文化財収蔵庫** 土器や石器など温湿度変化の影響を受けにくい資料を収蔵している。平成31年3月末時点でコンテナ・段ボール箱11,643箱収蔵されている。

**特別収蔵庫1・2** 保存処理が完了した木製品や金属製品などを収蔵している。平成31年3月末時点で特別収蔵庫1にコンテナ945箱（木製品）、特別収蔵庫2にコンテナ196箱（金属製品104箱、骨・骨製品92箱）収蔵されている。特別収蔵庫1では46箱、特別収蔵庫2では5箱増加した。

**資料収蔵庫** 発掘調査の図面や写真フィルム・測量成果簿、CD・DVDなどの記録類を収蔵している。

**図書室** Ⅲ6（6）に記載した。

### (3) 発掘調査番号

遺物や調査記録類をまとめるために、新潟市内における全ての発掘調査（試掘・確認調査、本発掘調査、そのほか工事立会を含む）に対して年度ごとに調査番号（7桁）を付けている。

### (4) 再整理作業

文化財センター開館以前の調査資料について、平成30年度も継続して台帳整備などの作業を行っている。また、報告書刊行済みの資料は、適宜点検を行い、接着剤や充填材の経年劣化による破損が認められるものについて修復を進めた。

### (5) 収蔵資料のデジタル化およびデータベース化

保存と活用のために、遺物・遺構に関しては台帳を作成し、図面や写真などの記録類はデジタル化されている。

発掘調査図面は、殆どが業者に委託したデジタルデータ（CADデータ）が存在する。

写真に関しては、発掘調査終了後速やかにデジタル化

を行っており、データ形式も汎用性を考えてtiffデータとしている。

発掘調査報告書に関しては、印刷業者に編集データを入稿する前もしくはその後にpdfデータを作成している。収蔵図書についても書誌データ（CSV形式）を継続して登録している。（相澤裕子）

### (6) 民俗資料など

民俗資料収蔵庫には、旧黒埼町で使用され保管されてきた農具・漁労具・生活用具などの民具を中心に収蔵している。平成23年の開館以来、民俗資料は収蔵・展示されているだけだったが、平成29年10月より本格的に再整理作業を開始した。

民具収蔵庫内を11のブロックに分け、ブロックごとに所在確認や旧黒埼町時代に作成された台帳との照合作業を進めている。台帳に掲載されている整理番号の重複や、実物の所在、貼付されている写真と実物の相違など、今後解決しなければならない多くの問題が明らかになってきている。収蔵されている民具は、平成30年度の収蔵数は台帳に記入が確認できる範囲で2,123件であり、未整理分も含めると約3,000件になる。平成31年3月末時点で、823件の所在確認と台帳の照合作業が終了した。

また、文化財センターに隣接する旧木場小学校校舎は、「大形民具収蔵庫」として利用され、文化財センターの民具は20件所蔵されている。敷地・建物を文化財センターが、収蔵品の民俗資料は歴史文化課・新潟市歴史博物館が管理している。（久住直史）

### (7) 埋蔵文化財情報管理システム

埋蔵文化財の管理と活用、デジタル化した記録類のデータ管理を目的として、平成27年6月1日より『埋蔵文化財情報管理システム』を活用している。遺跡管理のための地理情報管理システム（GIS）と発掘調査記録や収蔵品管理のためのデータベース機能を併せ持ったシステムである。このシステムは新潟市の統合型GISのサブシステムとして構築されている。

システムの機能としては、「遺跡管理」「発掘調査管理」「埋蔵文化財保護業務」「出土品管理」「記録類（図面）検索」「記録類（写真）検索」「遺物検索」「木製品、金属製品検索」「図書検索」「地図表示」を備えている。

運用は開始されたが、「出土品管理」「記録類（図面）検索」「記録類（写真）検索」「遺物検索」「木製品、金属製品検索」の記録類などをエクセルデータで一括取り込み可能にするための機能については、現在も構築作業中である。（今井さやか）

## 5 資料の公開・展示

### (1) 展示概要

『新潟市文化財センター条例』の設置目的にある「埋蔵文化財及び有形民俗文化財を保存し、及びこれらの活用を図る」主な事業の一つとして埋蔵文化財・有形民俗文化財の展示を行っている。詳しい方針および概要については、『年報』第1号に記載している〔今井2014a〕。

平成26年度に文化財センターでは初めて企画展を開催し、平成30年度で5年目を迎えた。内容については、市内8区の遺跡について時代や地域に偏りがないようテーマを選び全3回開催した(表6)。事業見直しに伴い前年度より1回減少している。館外展示は1か所で行った。なお、企画展と館外展示事業は、経費の50%について国の補助金「地域の特色ある埋蔵文化財活用事業」を受けた。

**展示室 1** 導入展示室兼、展示室2の前室としての機能を有している。「歴史を伝える出土品の世界」と題して、市内で出土した縄文時代から近世の土器陶磁器や木製品を、壁一面に展示している。また、緒立遺跡出土の網代や御井戸遺跡の木柱など大形木製品や市内出土の木簡レプリカ104点、近世新潟町跡出土の陶磁器をケース内で展示している。なお、平成30年度は展示の変更は行わなかった。

**展示室 2** 「新潟市文化財センターの活動」、「遺跡が語る新潟市の歴史」、「企画展示コーナー」の大きく3つの展示に分かれている。

「新潟市文化財センターの活動」の一角には平成28年度から「日本遺産関連展示」コーナーを設置して、秋葉遺跡と大沢谷内遺跡を通年展示し紹介している。

また、展示室中央の企画展示コーナーでは、平成30年度は3回の企画展を開催した。各展示詳細についてはⅢ5(2)~(4)に記載する。

**エントランス** エントランスでは、大形の土器や速報性のある出土品を展示している。平成30年度は昨年度から引き続き角田沖から揚がった縄文土器を展示した。ま

た、大展示ケースは全て企画展示で使用したため、速報展示は行わなかった。

**館外展示** 平成30年度は文化財センターおよび弥生の丘展示館の企画展以外に新潟市江南区郷土資料館からの申し出による館外展示「亀田砂丘と遺跡」を行った。亀田砂丘の成り立ちを紹介するパネルをはじめ砂丘上の砂崩遺跡や笹山前遺跡の遺物展示を行った。また、消えた砂丘の風景として昭和30~40年代の江南区内の亀田砂丘の写真を展示し、非常に好評だった。

**まとめ** 平成30年度の企画展示は、回数を減らしたものの、時代や地域を幅広く扱ったため好感を得られたようである。特に企画展2では、考古資料にとどまらない展示となり、考古学に興味を持っていなかった層の来館が目立った。新規の客層を取り込むためには、このような工夫が今後も必要となるだろう。

一方で、「展示の文字が小さくて読みにくい」などの意見も多く寄せられた。次年度以降、読みやすいパネルの作成を心掛けたい。(今井さやか)



館外展示ポスター

表6 平成30年度文化財センター企画展一覧

企画展名	会期	企画担当	入館者数(人)	関連講演会・イベント			
				演目 イベント名	年月日	講師	参加者数(人)
砂丘と遺跡Ⅱ - 亀田砂丘 -	2018/4/10(火) ~ 7/16(月・祝)	今井さやか	3,390	沈む砂丘と遺跡	2018/5/13(日)	卜部厚志氏 (新潟大学災害・復興科学研究所准教授)	98
鑄物師 - 近世新潟町の職人 -	2018/7/24(火) ~ 11/25(日)	渡邊朋和	5,379	展示解説	2018/8/19(日)	渡邊朋和	7
				鑄造を体験しよう	2018/9/8(土)	今井さやか	15
				北国越後の鑄物生産	2018/9/9(日)	五十川伸矢氏 (元京都橋大学教授)	37
西蒲区の隠れた宝もの - 縄文時代から幕末まで -	2018/12/4(火) ~ 2019/3/24(日)	前山精明 龍田優子	2,426	展示解説	2018/12/16(日)	前山精明	22
				歩く考古学からの贈り物	2019/1/20(日)	前山精明	90



(2) 企画展1 「砂丘と遺跡Ⅱ—亀田砂丘—」

会 期 平成30年4月10日(火)～

7月16日(月・祝)

担 当 今井さやか

入館者数 3,390人

**展示概要** 新潟市には、海岸に並行した10列の砂丘とその砂丘に阻まれ排水不良となって形成された海岸平野が広がっている。砂丘上には古くは6,500年前の縄文時代から多くの遺跡がある。本展示は、砂丘上の遺跡についてその立地と遺跡の性格を紹介するものである。平成29年度には西区を中心とする信濃川左岸の砂丘上の遺跡を紹介した。平成30年度は信濃川と阿賀野川に挟まれた亀田砂丘の遺跡について紹介した。

**展示構成**

- 1) 新潟の砂丘-地質学からみた亀田砂丘-
- 2) 縄文時代の交流拠点-砂崩遺跡-
- 3) 北陸からの文化-駒込小丸山遺跡-
- 4) 亀田砂丘の古墳時代集落-笹山前遺跡-
- 5) 砂丘上に住んだ有力者-小丸山遺跡-
- 6) 自然堤防上の集落-駒首渦遺跡-
- 7) 五頭山麓産の中世陶器-下郷南遺跡-
- 8) 江戸時代の一字一石経-日水南遺跡-
- 9) 消えゆく砂丘

**主要展示** 1) では、砂丘の形成過程のほか、沼沢火山の活動との関連性について紹介した。2) 3) では亀田砂丘Ⅰ-2列の遺跡紹介では、擦切り溝が残った石斧(砂崩遺跡)や製作途中の管玉資料(駒込小丸山遺跡・前郷遺跡)などを展示した。5) では古代の砂丘遺跡である小丸山遺跡の大形建物跡や丸木舟転用の井戸枠について紹介した。6) では駒首渦や鶴ノ子渦といった渦の自然堤防上の遺跡を紹介し、古代の河川交通についての展示を行った。9) では、昭和30～40年代に土取りに伴い消滅した砂丘の写真と、当時レスキューされた土器の展示を行った。

**関連講演会** 企画展の関連講演会を開催した。

**演 目** 沈む砂丘と遺跡

**講 師** 卜部厚志氏

(新潟大学災害・復興科学研究所准教授)

**日 時** 平成30年5月13日(日)

午後1時30分～3時30分

**参加者数** 98人

新潟大学災害・復興科学研究所の卜部厚志氏から、越後平野の沈降と埋没砂丘についての解説をしていただいた。受講者からは「地下深くから遺跡が見つかる理由がわかった」、「古代史を地質・地震・気候など色々な視点

から観ると深く理解できると感じた」などの感想が寄せられた。

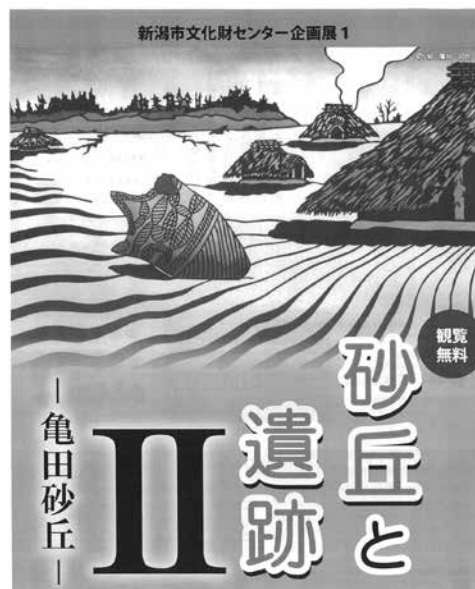
**展示解説** 講演会終了後に企画展担当者による展示解説を開催した。

**ま と め** 前年度、企画展と連動したまちあるき企画が好評だったことから、平成30年度についても大江山のまちあるきガイドからご協力をいただき、展示と江南区大江山地域のまちあるきをセットにしたバスツアーを企画した。砂丘と昭和40年代に土取りにより失われた砂丘や池の痕跡をめぐる歴史まちあるきは、定員を大幅に上まわる企画となった。また、実際に歩くことにより砂丘の高低差を実感できたと好評であった。なお、このツアーは広聴相談課の「個人で参加する動く市政教室」の制度を利用している。

砂丘への市民の関心が引き続き高いことからシリーズ化した企画であったが、想定どおり考古学に関心のない層からも展示を見ていただけた。今後も同テーマでの展示をしていきたい。

今回の企画展チラシ製作の際に、切り絵の作品を使用した。考古学の展示の場合は土器や遺跡の写真が使用されることがほとんどであったため、「目立って良い」、「写真でなくて新鮮な印象」と好評であった。

(今井さやか)



チラシ表

**(3) 企画展2 「鋳物師—近世新潟町の職人—」**

会 期 平成30年7月24日(火)～11月25日(日)

担 当 渡邊朋和

入館者数 5,379人

**展示概要** 平成28年に行った試掘調査で近世新潟町跡から江戸時代の鋳造関連遺物が出土した。試掘調査対象地は新潟鋳物師が間口31間もある屋敷を構えて〔渡邊2018〕、17世紀中頃から幕末まで藤田家→市島家→土屋家と3家の鋳物師に引継がれて梵鐘や鍋釜などの日用品鋳物などを作っていた場所であった。藤田家・市島家の屋敷図面が残っており、試掘調査地点はまさに金屋があった場所にもかかわらず、対象地(遺跡)は周知化も、工事立会もされずに煙滅してしまった。

新潟鋳物師のことは新潟県史や新潟市史にも掲載され、近世江戸時代の新潟町の産業として、また幕末には川村修就奉行の命で大砲が鋳造され、元治元(1864)年に紀興之によって書かれた『越後土産 初編』に「新潟鍋釜」として掲載される程有名だったにもかかわらず、その貴重な文化財(遺跡)がなくなってしまった。

本企画展は、この試掘調査によって発見された新潟町の鋳造関係遺物をきっかけとし、懺悔の意味も込めて計画したものである。湊町新潟は、鋳物の材料である石見の銑鉄や鋳型の材料である土・砂が入手しやすかったこと、信濃川や阿賀野川などによる河川交通によって、梵鐘や鍋釜なども上流に運ばれていったのである。

**展示構成** 鋳造・鋳物とは、溶解炉(こしき炉)、鍋釜、鋳造の歴史、北陸の鉄生産、日本海の物流、中世の鋳物、新潟鋳物師が作った梵鐘・半鐘・鰐口、新潟の鋳物師藤田家・土屋家の歴史、真継家、金属類回収令と齋藤秀平、長岡鋳物師などのテーマで展示を行った。

藤田家の文書類や幟などの一部の民俗資料、土屋家の文書類は現在新潟市に寄贈されているので、その中から代表的な鋳物に関する文書、真継家の許状などを借用して展示した。企画展に際し、挽き型など鋳物づくりに使用した資料の調査をしたが確認できなかった。

企画展前に、新潟鋳物師が作った梵鐘類の悉皆調査を行った。その際に基にしたのは齋藤秀平が金属回収令前の梵鐘等の記録をまとめた『新潟県史蹟名勝天然記念物第12輯』である〔齋藤1944〕。この記録などから37点あることがわかった新潟鋳物師の作品の内6点が現存することを確認し、半鐘2点(盛岩寺・日光寺)、鰐口1点(平等寺)を借用して展示するとともに、梵鐘(日光寺・西福寺)などは写真パネルや拓本を展示した。現在、県内に江戸時代の梵鐘は殆ど残っていない。第2次世界大戦時に供出されたことによるが、この際に尽力したのが当時県内

の文化財保護を担っていた齋藤秀平である。齋藤秀平文書も現在新潟市に所蔵されているが、文書を見ると現在残っている梵鐘類も齋藤氏の尽力がなければ残らなかったと思われる。梵鐘などの鋳物の保存に尽力した齋藤氏の業績も併せて紹介した。

**主要展示** 県内の遺跡出土の考古資料、中世の伝世品、江戸時代の伝世品を展示したが、中世と江戸時代は技術的には繋がらないことを説明した。

また、藤田作二氏・桑原紀昭氏など先学の研究を基に、新潟鋳物師の藤田家・相葉家・土屋家・市島家の略年表を作成した。藤田作二文書中の家相図、市島家文書中の屋敷図、土屋家伝来の釜、川村修就関係資料の「新潟表新規鋳立大筒銘書案同御台銘書案(及び銘拓本)」なども所蔵者のご協力をいただいて展示した。

**関連講演会** 企画展の関連講演会を開催した。

演 目 北国越後の鋳物生産－鍋釜・鉄鉢・梵鐘－

講 師 五十川伸矢氏(元京都橋大学教授)

日 時 2018年9月9日(日)

午後1時30分～3時30分

参加者数 37人

講師は梵鐘研究の第1人者で、梵鐘研究で著名な坪井良平氏の後を継ぐ考古学研究者である。講演は鋳鉄鋳物鍋釜の生産と流通、梵鐘の様式と技術という2本立てで話をされたが、「大工越後蒲原郡大崎住妙実」銘のある会津法用寺の湯口のことに触れ、湯口が大きく残っていることから梵鐘製作は初めてだったとする話は大変興味深く拝聴した。

**関連イベント** 鋳造を体験しよう

日 時 平成30年9月8日(土)

参加者数 15人

**展示解説** 展示担当による展示解説を開催した。

日 時 平成30年8月19日(日)

午後1時30分～3時30分、

平成30年9月9日(日)講演会終了後

参加者数 7人(8/19)、37人(9/9)

**まとめ** 本企画展を契機に、新潟鋳物師の子孫の方々に来ていただき、ご自宅に所蔵されている文書や写真などの記録類を確認することができた。

新潟鋳物師が作った梵鐘や鰐口は第2次世界大戦時に殆どが供出されていたが、6点は現存していることを確認した。今後は寄進者名のみで鋳物師名がない擬宝珠などのような鋳物を、建造物調査などの際に悉皆調査をする必要がある。また、今回の企画展の調査で、中世末期の文禄年間の銘のある鰐口を発見できたことは特筆され、V2で資料報告をしている。(渡邊朋和)

(4) 企画展3「西蒲区の隠れた宝もの  
—縄文時代から幕末まで—」

会 期 平成30年12月4日(火)～  
平成31年3月24日(日)

担 当 前山精明・龍田優子  
入館者数 2,426人

**展示概要** 新潟市南西部に位置する西蒲区には日本海の「ランドマーク」弥彦・角田の山並が連なり、海辺・砂丘・平野・潟といった多様な環境が展開する。こうした地理条件を背景に、区内には新潟市全体の約4割にあたる292か所の遺跡が分布している。また、西蒲区では80年あまりに及ぶ遺跡調査を通じて考古資料が蓄積されている。これまで目にふれる機会が少なかった資料に光を当てるとともに新発見の資料も取り上げ、この地域に備わる魅力を約1,800点の展示品を通じ紹介した。

**展示構成**

- |                   |           |
|-------------------|-----------|
| 1) ヒシの実採りと西蒲原     | 2) 豊原遺跡   |
| 3) 南赤坂遺跡          | 4) 和納館跡   |
| 5) 布目遺跡           | 6) 新谷遺跡   |
| 7) 干納遺跡           | 8) 前表遺跡   |
| 9) 上堰潟湖底遺跡        | 10) 青龍寺遺跡 |
| 11) 弥生時代の御井戸遺跡    |           |
| 12) 西蒲区東部の古墳時代遺跡群 |           |
| 13) 古代の仲歩切遺跡      | 14) 樋切遺跡  |
| 15) 峰岡上町遺跡        |           |

**主要展示** 7)では縄文時代のタイムカプセルと呼ばれる福井県の鳥浜貝塚に匹敵する資料が出土している干納遺跡からの出土品(シカ・鳥・魚・貝、狩りのパートナーである縄文犬の骨など)を初めて展示した。12)では近年の調査で越後平野の地下深くから次々と発見される古墳時代の遺跡として地下2.8mから出土した土器を展示し、謎に包まれた越後平野を紹介した。15)では米百俵で有名な三根山藩に関する考古学的な資料からうかがえる上級武士の質素儉約生活を示した。

また、縄文時代の遺跡から見つかるヒシの実から、かつて市内の潟で盛んに行われていたヒシの実採りが6,000年ほど前から続くこと、遺跡は今の時代とつながっていることを紹介した。

**関連講座** 企画展の関連講座を開催した。

演 目 歩く考古学からの贈り物  
講 師 前山精明  
日 時 平成31年1月20日(日)  
午後1時30分～3時30分  
参加者数 90人

西蒲区における遺跡踏査で得られた多くの重要な成果

について、実体験をもとにセンター職員が解説した。参加者は皆、熱心に聞き入っていた。

**展示解説** 展示担当による展示解説を2回開催した。  
日 時 平成30年12月16日(日)午前10時～12時・  
午後1時30分～3時30分、  
平成31年1月20日(日)講座終了後

参加者数 22人(12/16)、80人(1/20)

**入館者の声** 「縄文人もヒシを食べていたことに驚いた」、「初めて見る資料の多さに圧倒された」、「発見される遺跡の深さに驚いた」など大変好評であった。

**まとめ** 古くから遺跡調査などが行われ地域研究の盛んだった西蒲区について、最近の調査成果も含め縄文時代から幕末まで通史的に紹介できた。展示した膨大な資料のほとんどが初公開であり、遺跡・遺物を有効活用することができた。(龍田優子)



2018年12月4日(火)▶2019年3月24日(日)  
観覧時間/午前9時～午後5時 休曜日/月曜(月曜が祝日の場合翌日)、年末年始(12月28日～1月3日)

チラシ表



展示解説風景



## 6 教育普及活動

### (1) 公開講座

文化財は地域の成り立ちなどを知る上で重要な役割を担っている。文化財センターでは市民が地域の歴史や文化に対する理解を深められるように、収蔵している考古資料や民俗資料を積極的に公開・活用し、様々な講座・体験イベントを実施している。以下、平成30年度に実施した公開講座の概要について述べる(表7)。

**講座** 考古学と民俗学関連の講座を行った。考古学関連の講座では企画展の内容に関連した講座を行った。詳細は各企画展の頁を参照いただきたい。民俗学講座では、新潟県民俗学会会員や地域史研究者を講師に招き2回行った。

また、観察再現講座と題して遺物を観察し、当時の技術と工夫を体感する講座を開催した。平成30年度も引き続き縄文土器を観察して再現する講座を2回行った。

**体験イベント** 子ども向け歴史体験「の字状石製品づくり」「文化財センター仕事体験」「藍の生葉染め体験」を夏休みに開催した。「の字状石製品づくり」は今年度新たに企画した体験イベントである。南赤坂遺跡などから出土している縄文時代の石製品をモデルに軟らかい滑石を利用して製作した。途中、比較のためにネフライト(軟石)を穿孔する体験なども行い、考古学的な見も得られる体験となった。

旧武田家住宅を会場に地域の方々との交流を目的としたイベントとして、「民具と民話を楽しむ会」と「旧武田家住宅で民具とお茶を楽しむ会」を開催した。

**速報会** 平成30年度の遺跡発掘調査速報会では、講演の部に、佐賀県立九州陶磁文化館名誉顧問の大橋康二氏を招き、「出土陶磁器から見る近世新潟町の繁栄」と題して講演いただいた。平成30年度から午前開催とした報告の部では、本発掘調査を行った5遺跡のすべての報告が行われた。

**出前講座・職員派遣** 文化財センターでは、依頼に応じて、研究団体、地方自治体、市民団体などへ職員派遣を行っている。平成30年度は、市民団体からの講座や学習会の依頼が目立った。特に砂丘をテーマにした内容に人気があり、昨年度から行った「砂丘と遺跡」展示が影響したと考えられる。小学校の利用は、3学年の「昔の暮らし」を中心に、出前授業が15件あった。また、初めて中学校からの講演依頼があり2件行った(表8)。

### (2) 施設利用

文化財センターでは、展示見学のほかに研修室の一部を「体験コーナー」として新潟や埋蔵文化財に関連した

体験学習ができる場所を設けている。ここでは「開館時間中であれば、いつでもだれでも予約なしでできる個人向け体験」と、「予約をいただいた団体向けの体験」の2種類を行っている。いずれも材料費相当を負担していただいている。また、無料の体験として新潟市などから出土した土器をもとに制作した「土器パズル」が5点ある。

昨年度から月別体験メニューとして、「勾玉づくり・和同開珎づくり・銅鏡づくり・火起こし体験・土器づくり体験・裂き織体験」を行っている。平成30年度には、初めての試みとして夏休み前に西区内の小学校の全児童に体験メニューのチラシ配布を行った。その結果、火起こし体験が346名(前年度447名)、土器づくりが456名(前年度100名)となり、総体験参加者数が個人2,491名(前年度1,890名)、団体3,091名(前年度3,024名)と個人体験が大幅に伸びた(表9)。

また、旧武田家住宅及び体験広場(芝生)の貸出(有料)を行っている。利用状況は表10のとおりである。古民家の雰囲気を楽しむサークルでの活動のほか、企業の商品イメージ撮影など様々な目的で利用されている。今年度は水と土の芸術祭2018市民プロジェクト「木場城復活プロジェクト」で約2週間の利用があった。

### (3) 入館者数

当センターの入館者数は表11のとおり11,970人である。平成29年度の12,767人に比べて797人減少した。

入館者のアンケートからは、「民具収蔵庫を自由に見せて欲しい(※現在は職員同伴を原則)」、「展示が地味。食事のサンプル例などを置いてはどうか」、「場所がわかりにくい」などの提案やご要望をいただいた。アクセス経路への要望は、依然として多くの方から寄せられている。良い点としては「展示解説が面白かった」、「毎月体験メニューが変わってよい」との感想をいただいた。

平成31年3月末までの開館からの累計入館者数は92,749人である。

### (4) 団体見学・施設見学

小学校や子ども会などの子どもが主体の団体では、見学だけではなく体験活動を組み込むことが多い。特に小学校では社会科の授業として4・5月には6学年の歴史で、1・2月は3学年の昔のくらしの学習で利用する傾向にある。平成30年度では、小学校・中学校の利用は35校で平成29年度と変わらなかった。社会科の授業以外では、総合学習で利用する学校もある。総合学習では地域の水害史や、地名の由来といった地域史的内容での授業が多い。(今井さやか)

表7 平成30年度公開講座一覧

観察再現講座			
年 月 日	内 容	講 師	人数
2018/6/2 (土)	鳥屋遺跡の縄文土器をつくる【大人向け】 3週連続 (6/2、6/9、6/16)	まいぶんポートボランティア	8
2018/11/3 (土)	三条市吉野屋遺跡の火焔型土器をつくる【大人向け】 5週連続 (11/3、11/10、11/17、11/24、12/1)	まいぶんポートボランティア	10
民俗講座・イベント			
年 月 日	内 容	講 師	人数
2018/7/7 (土)	黒崎の民具と民話を楽しむ会	新潟民話の語り手交流会黒崎とんと	57
2018/9/22 (土)	新潟市の妖怪伝説	高橋郁丸氏 (新潟民俗学会理事)	45
2018/9/30 (日)	黒崎の民具とお茶を楽しむ会	江戸千家新潟不白会	49
2018/10/13 (土)	間瀬銅山と人々の暮らし	鳴海忠夫氏 (県文化財保護指導委員)	47
2018/12/15 (土)	切り絵で正月飾りを作ろう	坂井輪切り絵同好会	22
夏休み子ども歴史体験			
年 月 日	内 容	講 師	人数
2018/7/29 (日)	「の」字状石製品を作ろう	龍田優子・前山精明	21
2018/8/5 (日)	キミも考古学者	今井さやか・龍田優子	10
2018/8/11 (土)	藍の生葉染め	今井さやか、まいぶんポートボランティア	42
新潟市遺跡発掘調査速報会			
年 月 日	内 容	講 師	人数
2019/2/24 (日)	講演 出土陶磁器からみる近世新潟町の繁栄	大橋康二氏 (佐賀県立九州陶磁文化館名誉顧問)	164
	報告 原遺跡 一新津丘陵に営まれた縄文時代の拠点集落一	立木宏明	
	報告 前山遺跡 一亀田砂丘の奈良・平安時代の遺跡一	牧野耕作	
	報告 砂崩前郷遺跡 一水田下に埋没した縄文遺跡一	遠藤恭雄	
	報告 古津八幡山遺跡 一弥生時代の掘立柱建物群と大形竪穴住居一	相田泰臣	
	報告 程島館跡 一新津丘陵末端に残る平安時代・中世の痕跡一	龍田優子	
ボランティアステップアップ講習会			
年 月 日	内 容	講 師	人数
2018/7/5 (木)	ステップアップ勉強会「縄文土器の文様を極める」	宮尾 亨氏 (県立歴史博物館専門研究員)	13
2018/8/30 (木)	ステップアップ勉強会「火焔土器の鶏頭冠の製作手順を学ぶ」	宮尾 亨氏 (県立歴史博物館専門研究員)	7

表8 平成30年度職員派遣・出前講座一覧

年 月 日	内 容	会 場	依頼者	派遣職員名
2018/4/18 (水)	6学年社会科授業「新潟市の遺跡について」	亀田小学校	亀田小学校	今井さやか
2018/4/22 (日)	郷土史勉強会 (峰岡地区・福井地区の遺跡について)	巻農村環境改善センター	峰岡地区コミュニティ協議会	前山精明
2018/5/14 (月)	亀田砂丘について	亀田西中学校	亀田西中学校	今井さやか
2018/5/24 (木)	動く市政教室「遺跡と砂丘2」	前山遺跡ほか	広聴相談課	今井さやか
2018/5/29 (火)	動く市政教室「遺跡と砂丘2」	前山遺跡ほか	広聴相談課	今井さやか
2018/6/26 (火)	学年行事「土偶マグネット作り」	白山小学校	白山小学校1学年PTA	龍田優子
2018/7/14 (土)	わくわくランド (土鈴づくりに挑戦！)	関屋地区公民館	関屋地区公民館	今井さやか
2018/7/31 (火)	勾玉づくり体験	小針青山公民館	小針青山公民館	今井さやか
2018/8/9 (木)	土器づくり体験	江南区郷土資料館	江南区郷土資料館	今井さやか・龍田優子
2018/8/22 (水)	火起こし・勾玉づくり体験	江南区郷土資料館	江南区郷土資料館	久住直史
2018/9/19 (水)	亀田砂丘と遺跡	ふれあいの駅よりなせ家	亀田小学校区コミュニティ協議会	今井さやか
2018/9/20 (木)	遺跡について (勾玉づくり)	亀田地区公民館	新潟市民生委員児童委員横越地区協議会	今井さやか
2018/9/21 (金)	3学年社会科授業「昔の暮らし」	鏡郷小学校	鏡郷小学校	久住直史
2018/9/28 (金)	勾玉づくり体験	中之口東小学校	中之口東小学校 (もの作りクラブ)	龍田優子
2018/10/1 (月)	まいぶんポートと遺跡めぐり	老人デイサービスセンター黒崎荘	坂井輪地区公民館	今井さやか
2018/10/27 (土)	銅鏡づくり (西安展関係)	みなとびあ	みなとびあ	今井さやか・龍田優子
2018/10/28 (日)	勾玉づくり (西安展関係)	みなとびあ	みなとびあ	龍田優子
2018/11/1 (木)	4学年社会科学習「昔から今へ続くまちづくり」	赤塚小学校	赤塚小学校	今井さやか
2018/11/16 (金)	講演会「潟と砂丘に育まれた赤塚地域の遺跡」	赤塚中学校	赤塚中学校	今井さやか
2018/11/18 (日)	講演会「北区の古代ロマン」	豊栄図書館	豊栄図書館	遠藤恭雄
2018/12/13 (木)	新潟市の遺跡について	西新潟オープンカレッジ	小針青山公民館	今井さやか
2019/1/12 (土)	勾玉と和同開珎作り体験教室	潟東地区公民館	潟東地区公民館	久住直史
2019/1/22 (火)	3学年社会科授業「昔の暮らし」	両川小学校	両川小学校	久住直史
2019/1/23 (水)	砂丘は語る「地図のない湖に浮かんでいる亀田砂丘とは」	亀田市民会館	亀田福寿大学探訪部	今井さやか
2019/1/25 (金)	3学年社会科授業「昔の暮らし」	青山小学校	青山小学校	今井さやか
2019/1/29 (火)	3学年社会科授業「昔の暮らし」	大形小学校	大形小学校	今井さやか・久住直史
2019/1/30 (水)	3学年社会科授業「昔の暮らし」	葛塚東小学校	葛塚東小学校	今井さやか
2019/1/31 (木)	3学年社会科授業「昔の暮らし」	立仏小学校	立仏小学校	久住直史
2019/2/1 (金)	3学年社会科授業「昔の暮らし・牡丹山諏訪神社古墳について」	牡丹山小学校	牡丹山小学校	今井さやか・久住直史
2019/2/5 (火)	3学年社会科授業「昔の暮らし」	大鷲小学校	大鷲小学校	久住直史
2019/2/6 (水)	3学年社会科授業「昔の暮らし」	早通南小学校	早通南小学校	今井さやか
2019/2/19 (火)	3学年社会科授業「昔の暮らし」	小針小学校	小針小学校	今井さやか・久住直史
2019/2/20 (水)	3学年社会科授業「昔の暮らし」	曾根小学校	曾根小学校	今井さやか
2019/2/21 (木)	3学年社会科授業「昔の暮らし」	桜ヶ丘小学校	桜ヶ丘小学校	久住直史
2019/2/27 (水)	3学年社会科授業「昔の暮らし」	真砂小学校	真砂小学校	久住直史
2019/3/31 (日)	講演「古津八幡山遺跡と八幡山古墳-近年の調査成果を踏まえて-	みなとびあ	みなとびあ	相田泰臣

表9 平成30年度文化財センター体験利用人数

個人													
メニュー	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
勾玉づくり	76	65	104	131	278	52	51	23	81	29	40	87	1,017
鑄造体験(和同開珎)	14	24	11	27	58	10	11	2	9	3	20	16	205
鑄造体験(鏡)	6	8	9	13	45	5	3	8	3	2	6	11	119
火起こし(5・8月)	-	89	-	-	257	-	-	-	-	-	-	-	346
弓矢体験(4・9・3月)	82	-	-	-	-	83	-	-	-	-	-	132	297
袈裟織り(6・12・1月)	-	-	19	-	-	-	-	-	19	10	-	-	48
土器・土偶づくり(7・10・11・2月)	-	-	-	352	-	-	30	22	1	-	52	-	457
合計	178	186	143	523	638	150	95	55	113	44	118	246	2,489

団体													
メニュー	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
勾玉づくり	291	159	186	74	0	0	54	0	0	0	0	0	764
鑄造体験(和同開珎)	0	0	36	0	20	0	0	0	0	0	0	0	56
土器・土鈴・土偶づくり	0	247	0	0	0	163	107	0	0	0	0	0	517
弓矢体験	59	35	44	0	20	209	0	0	0	0	0	0	367
火起こし	398	441	230	0	20	186	275	0	0	0	0	0	1,550
合計	748	882	496	74	60	558	436	0	0	0	0	0	3,254

※出前講座分は含まない

表10 平成30年度旧武田家住宅利用状況

年月日	利用者名	目的
2018/7/29(日)	足立茂久商店	商品イメージ写真撮影
2018/8/18(土)	木場の郷土を愛する会 (文化スポーツ部文化創造推進課)	水と土の芸術祭市民プロジェクト 「木場城復活プロジェクト」
2018/9/21(金)	新潟市消費者協会	かまど吹き体験・試食会
2018/9/23(日)	うたごえの集い実行委員会	うたごえの集い
2018/9/29(土)	黒崎南小学校	ふれあいスクールまめっ子 活動

表11 平成30年度文化財センター入館者数

月	開館日数	入館者数(人)				累計(開館から)
		個人	団体	全体	1日平均	
4	26	609	435	1,044	40.2	81,823
5	26	606	578	1,184	45.5	83,007
6	26	591	279	870	33.5	83,877
7	26	1,202	112	1,314	50.5	85,191
8	27	1,435	54	1,489	55.1	86,680
9	26	962	273	1,235	47.5	87,915
10	26	772	469	1,241	47.7	89,156
11	24	687	288	975	40.6	90,131
12	23	560	116	676	29.4	90,807
1	24	476	117	593	24.7	91,400
2	24	720	0	720	30.0	92,120
3	26	592	37	629	24.2	92,749
合計	304	9,212	2,758	11,970	39.4	

表12 平成30年度文化財センター団体利用・行政視察一覧

団体利用(学校以外)			
年月日	団体名	利用内容	人数
2018/4/10(火)	木場保育園(西区)	広場	16
2018/4/19(木)	木場保育園(西区)	広場	18
2018/5/15(火)	32区「なかま」の会(江南区)	見学	18
2018/5/22(火)	老人クラブ神道寺ふたば会(中央区)	見学	21
2018/5/23(水)	木場保育園(西区)	広場	32
2018/5/24(木)	木場保育園(西区)	広場	35
2018/5/29(火)	木場保育園(西区)	広場	31
2018/6/24(日)	燕市吉田大保町自治会(県内)	見学・火起こし・勾玉・和同開珎	75
2018/7/6(金)	福祉バス(シニアカレッジ)(西区)	見学	20
2018/7/12(木)	西区健康福祉課(善久サロン)(西区)	見学	18
2018/8/8(水)	坂井輪地区公民館(西区)	見学・火起こし・弓・和同開珎	20
2018/8/22(水)	赤塚地区自治連絡協議会(西区)	見学	34
2018/9/1(土)	西区農政商工課木場まちあるきツアー(西区)	見学	18
2018/9/2(日)	船戸山育成会(江南区)	見学・火起こし・弓	23
2018/9/21(金)	新潟市消費者協会(中央区)	見学	20
2018/9/21(金)	西区農政商工課木場まちあるきツアー(西区)	見学	19
2018/9/29(土)	黒崎南小学校まめっ子クラブ(西区)	見学・弓	30
2018/10/18(木)	デイサービスセンター赤とんぼ(中央区)	見学	18
2018/10/24(水)	道上が丘自治会(西区)	見学	25
2018/10/31(水)	早通シニアクラブ(北区)	見学	14
2018/11/1(木)	三条歴史研究会(県内)	見学	15
2018/11/7(水)	北谷内自治会(中央区)	見学	36
2018/11/15(水)	小針・黒崎中学校区地域教育 コーディネーターの会	見学	16
2019/3/12(火)	西蒲区・北国街道まち歩きガイドの会	見学	14
合計			586

団体利用(学校)			
年月日	団体名	利用内容	人数
2018/4/19(木)	味方小学校(南区)	見学・火起こし・勾玉・土器に触れる	35
2018/4/20(金)	青山小学校(西区)	見学・火起こし・土器に触れる	51
2018/4/24(火)	赤塚小学校(西区)	見学・火起こし・弓・土器に触れる	46
2018/4/25(水)	坂井東小学校(西区)	見学・火起こし・勾玉	68
2018/4/26(木)	亀田西小学校(江南区)	見学・火起こし・勾玉	94
2018/4/26(木)	木山小学校(西区)	見学・火起こし・弓・土器に触れる	13
2018/4/27(金)	西内野小学校(西区)	見学・火起こし・勾玉	94
2018/5/2(水)	内野小学校(西区)	見学・火起こし・土偶・土器に触れる	127
2018/5/2(水)	山の下小学校(東区)	見学・火起こし・土偶・土器に触れる	37
2018/5/8(火)	紫竹山小学校(中央区)	見学・火起こし・勾玉	92
2018/5/10(木)	鏡郷小学校(西蒲区)	見学・火起こし・弓・土器に触れる	35
2018/5/11(金)	山田小学校(西区)	見学・火起こし・土器づくり	83
2018/5/25(金)	南中野山小学校(東区)	見学・火起こし・勾玉	67
2018/6/5(火)	江南小学校(東区)	見学・火起こし・勾玉・土器に触れる	84
2018/6/22(金)	黒崎中学校(西区)	総合学習(地域の歴史)	18
2018/6/27(水)	小針小学校(西区)	見学・火起こし・勾玉	102
2018/7/18(水)	浜浦小学校(西区)	見学・火起こし・勾玉	74
2018/9/4(火)	東山の下小学校(東区)	見学・火起こし・弓・土偶・土器に触れる	163
2018/10/11(木)	南万代小学校(中央区)	見学・民具学習	64
2018/10/12(金)	五十嵐小学校(西区)	見学・火起こし・土器に触れる	114
2018/10/16(火)	南万代小学校(中央区)	見学・火起こし・勾玉	54
2018/10/18(木)	坂井輪小学校(西区)	見学・火起こし・土器づくり	107
2018/10/26(金)	新津第一小学校(秋葉区)	見学・民具学習	73
2018/11/13(火)	沼垂小学校(中央区)	見学・民具学習	69
2018/11/14(水)	有明台小学校(中央区)	見学・民具学習	22
2018/11/16(金)	山の下小学校(東区)	見学・民具学習	39
2018/11/20(火)	黒崎南小学校(西区)	見学	23
2018/11/29(木)	矢代田小学校(秋葉区)	見学・民具学習	31
2018/11/30(金)	赤塚小学校(西区)	見学・民具学習	37
2018/12/7(金)	根岸小学校(南区)	見学・民具学習	23
2018/12/14(金)	桃山小学校(東区)	見学・民具学習	93
2019/1/9(水)	坂井東小学校(西区)	見学・民具学習	77
2019/1/17(木)	坂井小学校(西蒲区)	見学・民具学習	14
2019/1/23(水)	鏡郷小学校(西蒲区)	見学・民具学習	26
2019/3/15(金)	黒崎南小学校(西区)	見学・民具学習	23
合計			2,172

行政視察			
年月日	団体名	利用内容	人数
2018/11/1(木)	西安博物院随員	バックヤード見学等	6
合計			6





学校利用「土偶づくり」



ボランティア講習会「縄文土器の文様を極める」



夏休み子ども体験「の字状石製品を作ろう」



民俗講座「間瀬銅山と人々の暮らし」

## (5) 資料利用

### A 手続きに関する条例・規則

**特別利用許可** 文化財センター内で考古資料の熟覧・実測・撮影などを行う場合：『新潟市文化財センター条例』および『新潟市長から委任を受けた新潟市文化財センター管理に関する規則』により許可申請書を新潟市教育委員会宛に提出する。

**貸出許可** 考古資料の寄託・借用・貸出などをする場合：『新潟市文化財センター考古資料の寄託、借用及び貸出に関する規則』により許可申請書などを新潟市教育委員会宛に提出する。

**寄附申込** 考古資料の寄附申込みをする場合：『新潟市物品管理規則』により物品寄附申込書を新潟市長宛に提出する。

**民俗資料** 民俗資料の利用・貸出をする場合：『新潟市物品管理規則』により許可申請書を新潟市長宛に提出する。

なお、分析資料提供・掲載許可手続き、写真データの提供および掲載許可申請については『新潟市文化財センター考古資料の寄託、借用及び貸出に関する規則』で対応している。

### B 利用件数

以下、平成30年度の各利用件数について記す（表13）。

**特別利用許可** 考古資料に関して熟覧・実測・撮影の利用件数は8件（前年度比4件減）である。

**貸出許可** 考古資料と民俗資料の貸出許可は、博物館などでの常設展示に伴う年度単位の貸出と企画展などの短期間の貸出がある。前者では次年度も引き続き貸出を希望する場合は年度ごとに手続きを行っている。公民館などでは地域の歴史に親しみを感じてもらう観点からその地域の遺跡から出土した遺物の貸出を行っている。資料の貸出期間などは『新潟市文化財センター考古資料の寄託、借用及び貸出に関する規則』に規定されている。常設展示に伴う長期貸出5件（前年度比1件減）、企画展などに伴う短期貸出9件（前年度比6件増）である。

**掲載許可** 文化財センターが保管する写真や報告書などの掲載資料の提供を希望する場合や申請者が貸出を受けて撮影したものを印刷物などで使用する場合がある。利用件数は13件（前年度比1件増）であった。

**寄附申込** 採集資料や歴史関係書籍などを個人から9件受理した（前年度比8件増）。（相澤裕子）

表13 平成30年度資料対応件数一覧

考古資料

特別利用許可

件数	申請者	資料	数量	来館日	備考
1	本間組・国際総合計画共同企業体 作業所長 古澤 聡	旧大和跡地試掘調査出土資料 近世新潟町跡出土陶磁器等	4箱	2018/4/11 (水)	古町通7番町地区再開発事業施設建築物の設計にあたり、 デザインの参考ため
2	個人	古津八幡山遺跡 砥石	27点	2018/6/7 (木)	論文作成に係るデータ収集
3	個人	沖ノ羽遺跡 土器	13点	2018/7/23 (月)	奈良時代土器の研究
4	個人	夏井焼窯跡資料 他 松郷屋焼窯跡資料	42箱 一式	2018/8/28 (火)・29 (水)	新潟県考古学会編『新潟県の考古学Ⅲ』執筆のため
5	個人	近世新潟町跡 他 丹波焼播鉢 他 夏井焼窯跡資料	6点 3箱	2018/9/22 (土)	新潟市内で出土した近世遺物の調査
6	個人	古津八幡山遺跡 鉄剣 他	2点	2018/9/25 (火)	個人研究、論文等作成に係る資料調査
7	個人	馬場屋敷遺跡 土器・陶磁器	21箱	2018/10/15 (月)	白山平泉寺田境内の発掘調査報告書作成にともなう 中世土器・陶磁器編年基準資料検討
8	個人	夏井焼窯跡資料 松郷屋焼未成品 他	9箱 3点	2018/11/6 (火)	借用する遺物を抽出するための調査

貸出許可

件数	申請者	資料	数量	貸出期間	備考
1	医療社団法人幸人会 理事長 阿達敏幸	諏訪畑遺跡 土器	5点	2018/4/1 (日) ~ 2019/3/31 (日)	常設展示
2	新潟市江南区郷土資料館 市長 篠田 昭	砂崩遺跡 土器 他	51件	2018/4/1 (日) ~ 2019/3/31 (日)	常設展示
3	新潟市北区郷土博物館 館長 頼所洋一	鳥屋遺跡 石器 鳥屋遺跡 土器レプリカ	23点 12点	2018/4/1 (日) ~ 2019/3/31 (日)	常設展示
4	新潟市歴史博物館 館長 小林昌二	笹山前遺跡 土器 他 的場遺跡 土鐘・石鐘 的場遺跡 レプリカ 近世新潟町跡 陶磁器・泥面子 古津八幡山遺跡 土器 古津八幡山遺跡 レプリカ	84点 48点 54点 27点 3点 3点	2018/4/1 (日) ~ 2019/3/31 (日)	常設展示
5	新潟市長 篠田 昭 (担当 西蒲区役所地域課)	茶院A遺跡 土器 他	8点	2018/4/1 (日) ~ 2019/3/31 (日)	常設展示
6	新潟県立歴史博物館 館長 矢澤健一	近世新潟町跡 磁器	13点	2018/4/4 (水) ~ 2018/6/3 (日)	企画展示
7	朝霞市博物館 館長 関口豊樹	うるちアワ・もちアワの穂 他	4点	2018/6/1 (金) ~ 2018/9/9 (日)	テーマ展示「家紋になった動植物」における展示および解説パネル、 パンフレット等印刷物への掲載
8	新潟県埋蔵文化財センター指定管理者 公益財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団 理事長 池田幸博	的場遺跡 權 他	9点	2018/6/13 (水) ~ 2019/1/31 (木)	企画展「丸木舟の考古学」展示
9	十日町市博物館 館長 佐野誠市	的場遺跡 土製品 他	10点	2018/9/3 (月) ~ 2018/11/30 (金)	特別展「機織りのムラ 馬場上遺跡」展示
10	村上市教育委員会 教育長 遠藤友春	西郷遺跡 足形付土製品	2点	2018/9/26 (水) ~ 2018/11/29 (木)	企画展「縄文の願い-縄文人の思いをこめたモノ-」展示
11	新潟市歴史博物館 館長 伊東祐之	南赤坂遺跡 「の」字状垂飾	1点	2018/9/5 (水) ~ 2018/11/2 (金)	「玉と鏡の世界-西安・新潟友好交流特別展」展示
12	新潟市歴史博物館 館長 伊東祐之	新谷遺跡 縄文土器	1点	2018/10/26 (金) ~ 2019/2/6 (水)	企画展「むかしのくらし展 いれもの」展示
13	新潟市岩室地区公民館 館長 松本一栄	夏井焼 他	16点	2018/11/14 (水) ~ 2018/11/15 (木)	公民館主催アンコール・ふるさと講座「岩室の松郷屋焼」において展示
14	信濃川火焔街道連携協議会 監事(新潟市長) 中原八一	秋葉遺跡 王冠型土器	1点	2019/2/14 (木) ~ 2019/2/18 (月)	信濃川火焔街道連携協議会主催・津田強大学共催の 縄文文化発信イベント「火焔×5輪」展示

掲載許可

件数	申請者	資料	数量	許可日	備考
1	浄土宗 長善寺住職 廣川亮敏	中央区西堀通6番町(旧長善寺墓地) 地点 写真データ	2点	2018/5/10 (木)	寺誌「長善寺の歴史と写真集」掲載
2	株式会社 平凡社代表取締役社長 下中実都	角田山沖海揚がり 縄文土器 他 写真データ	2点	2018/5/14 (月)	『新版 縄文美術』掲載
3	新潟市長 篠田 昭 (担当 西区役所農政商工課)	大蔵遺跡 写真データ	1点	2018/6/5 (火)	「赤塚ガイドブック-まち歩き&砂丘歩き-」掲載
4	個人	笹山前遺跡 土器 他 写真データ	5点	2018/6/8 (金)	まちあるきガイド資料として使用
5	株式会社ベネッセコーポレーション著作権 申請窓口 担当部長 小林圭一郎	大沢谷内遺跡 木簡 写真データ	1点	2018/9/5 (水)	中学生向け通信教育教材に問題資料の一部として掲載
6	株式会社 アム・プロモーション	笹山前遺跡 土器 写真データ	1点	2018/9/20 (木)	「縄文カレンダー 2019」(仮称)掲載
7	新潟市歴史博物館館長 伊東祐之	近世新潟町跡 写真データ	2点	2018/8/29 (水)	「開港150年誌(仮)」掲載
8	国立歴史民俗博物館館長 久留島 浩	寺道上遺跡 須恵器復元図	1点	2018/10/31 (水)	雑誌「延喜式研究」刊行終了にともなうネット公開
9	個人	浦廻遺跡 木簡 写真データ	1点	2018/12/12 (水)	新潟市住吉遺跡発掘調査報告書の参考写真として掲載
10	個人	近世新潟町跡 遺物 写真データ	11点	2018/12/26 (水)	「北野博士先生還暦記念論集」近世新潟町跡の礎石について(仮題)で 写真を参考資料として掲載
11	長井市教育委員会教育長 平田 裕	古津八幡山遺跡 他 写真データ 他	3点	2019/2/5 (火)	長井市史(平成版)第1巻「原始・古代、中世」編に掲載
12	個人	沖ノ羽遺跡 木製品 実測図	2点	2019/2/27 (水)	学術書『食べものの民俗考古学』(仮題)に掲載
13	新潟市歴史博物館館長 伊東祐之	古津八幡山遺跡 他 写真データ	2点	2019/3/11 (月)	企画展「新潟市の文化財」展示パネルおよび図録に掲載

寄附申込

件数	申込者	資料	数量	申込日	備考
1	個人	前山遺跡採集土器器 他	449点	2018/6/5 (火)	
2	個人	歴史関係書籍 他 絵巻 CD 他 犬釘	923点 2箱 45点 1点	2018/8/9 (木)	
3	個人	歴史関係書籍	47点	2018/10/29 (月)	
4	個人	個人所蔵地図	1293点	2018/10/28 (日)	
5	個人	縄文土器	131点	2019/1/12 (土)	
6	個人	歴史関係書籍	84点	2019/2/22 (金)	
7	個人	歴史関係書籍	489点	2018/11/27 (火)	
8	個人	駒込小丸山遺跡採集遺物 他	161点	2019/3/18 (月)	
9	個人	歴史関係書籍 他	326点	2019/3/24 (日)	

## (6) 図書の収蔵と閲覧

### A 収 蔵

図書室の面積は89.33㎡で、室内には単式固定5段8連1台、複式移動7段7連5台、複式移動7段8連6台の棚が列設置されている。棚段数は総数で1,202段、約5万冊の図書の収蔵が可能である。なお、分類整理作業が必要な図書や登録未了図書に関しては、隣接する埋蔵文化財収蔵庫の棚に仮置きをし、登録が終わったものから順次配架している。

図書の収蔵状況は、旧市町村で所蔵していた発掘調査報告書が合併に伴い集められた結果、新潟県内の発掘調査報告書には複本が多数生じることになった。複本があり利用頻度の高い報告書は、文化財センター図書室のほか、調査研究室と保存処理室、そして秋葉区にある弥生の丘展示館に置いて利用している。また、県内外の研究者などから寄贈される本が増大したため、遺物収蔵庫の一部にも配架することにした。

書誌情報の入力作業は、司書（臨時職員）2名を雇用して継続して行っている。書誌情報の入力は、平成21年度に構築し、平成27年度に再構築が完了・運用した埋蔵文化財情報管理システム（Ⅲ4（7）参照）を利用している。入力作業と併せ、図書の管理のために寄贈者印・所蔵印を押捺し、3段ラベル・バーコードを貼っている。なお、平成31年3月末までの入力数は52,306冊である。

### B 利用状況

図書室には2名分の閲覧スペースがあり、平成24年6月から閲覧開始するとともに、著作権法の範囲内でコピーサービス（有料）も開始した。平成28年4月1日からは、土曜日・日曜日・祝日の図書室の利用を事前申し込み制としている。平成30年度の図書室の利用人数とコピーサービス利用人数は表14のとおりである。前年度比では利用者数は18人増、コピーサービス利用人数は2人増である。コピー申込冊数は66冊であり、考古学に関する雑誌3冊、発掘調査報告書58冊、一般書5冊である。

なお、収蔵図書は発掘調査報告書などの発行部数の少ない稀観本がほとんどのため、館外貸出は行っていない。（相澤裕子）

表14 平成30年度図書室・コピー利用者数

月	図書室利用（人）	コピー利用（人）
4	5	1
5	3	0
6	2	1
7	8	0
8	2	2
9	9	2
10	3	0
11	1	1
12	4	2
1	1	0
2	4	2
3	5	1
合計	47	12

## 7 保存処理

### (1) 木製品の保存処理について

**処理の概要** 文化財センターでは、木製品の保存処理は資料の形態・材質・劣化度を考慮しPEG（ポリエチレングリコール）含浸法を中心に行っている。しかし、PEG含浸法では漆被膜が剥がれてしまう漆器や、PEGの色により墨痕が見えにくくなってしまう墨書のある遺物は、トレハロース含浸法で行っている。詳細な方針および方法については、『年報』第1号に記載されている〔今井2014b〕。

**平成30年度** 平成30年度には15遺跡37調査分で合計819点の木製品の保存処理を行った（表15）。駒首潟遺跡（2006008）や、県から譲与を受けた小坂居付遺跡（2009007）から出土した木製品の保存処理をPEG含浸法で行った。この処理はPEG含浸処理装置で行うが、厚みが5cm以下の小形木製品は、プラスチック製密閉容器を使ったPEG含浸を温風定温乾燥機内で行っている。PEG以外の処理法としては近世新潟町跡の漆器などをトレハロース含浸法で、土付の漆膜等は水溶性のバインダー17を使用して処理を行った。

### (2) 金属製品・その他の保存処理について

**処理の概要** 文化財センターでは、木製品の保存処理の含浸期間中に金属製品の保存処理を行っている。保存処理を行う順序は、原則として調査年次が古いものからとしている。詳細な方針および方法については、『年報』第1号に記載されている〔今井2014b〕。また、本調査において脆弱遺物が出土した際には、取り上げと仮強化処理を行っている。

**平成30年度** 前年度に引き続き新潟市史編さんのために調査された大藪遺跡（1989008）出土の鉄製品を中心に5遺跡6調査分で合計465点の保存処理を行った（表15）。県が調査した近世新潟町跡（2006015）から出土した鉄製品が多かった。これらは出土時の状態が良かったため、多数の処理が行えた。青銅製品も大藪遺跡（1989008）や近世新潟町跡（2006015）からの出土品を中心に5遺跡8調査分で合計214点の保存処理を行った。

### (3) 保存処理外部委託について

PEGによる処理法に向いていない木製品や大形の木製品など、文化財センターで保存処理ができないものについて、外部委託を行っている。平成30年度は仲歩切遺跡（2014178）の木柱1点と林付遺跡（2010001）の木柱など5点の保存処理を外部に委託した（表16）。（今井さやか）



表15 平成30年度木製品、鉄製品、銅・青銅製品保存処理一覧

木製品						
遺跡名	調査番号	材質	器種	処理方法	点数	備考
中谷内遺跡	1997003	木製品	棒状	PEG	1	
中谷内遺跡	2011002	木製品	柱根	PEG	2	
結七島遺跡	2006006	木製品	棒状ほか	PEG	45	
駒首湯遺跡	2006008	木製品	柱根ほか	PEG	111	
西郷遺跡	2006012 2007011	木製品	柱根ほか	PEG	59	
西郷遺跡	2007011	木製品	材	トレハロース	1	
沖ノ羽遺跡	2007004	木製品	板状ほか	PEG	6	
沖ノ羽遺跡	2008002	木製品	板状ほか	PEG	18	
細池寺道上遺跡	2007005	木製品	曲物底板ほか	PEG	3	
細池寺道上遺跡	2014001	木製品	底板ほか	PEG	13	
細池寺道上遺跡	2014001	木製品	漆器	トレハロース	6	
細池寺道上遺跡	2014001	木製品	漆膜	バインダー	1	
細池寺道上遺跡	2015002	木製品	曲物底板ほか	PEG	5	
細池寺道上遺跡	2016002	木製品	備板ほか	PEG	134	
細池寺道上遺跡	2016002	木製品	漆器	トレハロース	10	
細池寺道上遺跡	2016002	木製品	漆膜	バインダー	8	
豊栄長湯遺跡	2007009	木製品	下駄ほか	PEG	2	
手代山北遺跡	2008003	木製品	板状ほか	PEG	25	
大沢谷内遺跡	2008005	木製品	柱根ほか	PEG	10	
大沢谷内遺跡	2010004	木製品	礎板ほか	PEG	2	
大沢谷内遺跡	2008004	木製品	木羽	バインダー	1	
四石遺跡	2008009	木製品	柱根ほか	バインダー	11	
小坂居付遺跡	2009007	木製品	木柱ほか	PEG	306	
小坂居付遺跡	2009007	木製品	烏帽	バインダー	6	
林付遺跡	2010001	木製品	曲物底板ほか	PEG	2	
下郷南遺跡	2013106	木製品	板状	PEG	1	
芥木遺跡	2016003	木製品	杭	PEG	1	
近世新潟町跡	2015140	木製品	底板	トレハロース	1	
近世新潟町跡	2015148	木製品	底板ほか	トレハロース	3	
近世新潟町跡	2017118	木製品	漆器	トレハロース	1	
近世新潟町跡	2017125	木製品	漆器	トレハロース	1	
近世新潟町跡	2017125	木製品	漆膜	バインダー	1	
近世新潟町跡	2017131	木製品	漆器	トレハロース	1	
近世新潟町跡	2017167	木製品	漆器	トレハロース	7	
近世新潟町跡	2017240	木製品	漆器	トレハロース	12	
近世新潟町跡	2017240	木製品	漆膜	バインダー	1	
中之口ほ場試掘	2017207	木製品	漆膜	バインダー	1	
合 計					819	

鉄製品						
遺跡名	調査番号	材質	器種	処理方法	点数	備考
大藪遺跡	1989008	鉄製品	釘ほか	クリーニング・樹脂含浸	265	
道上遺跡	2005003	鉄製品	刀子ほか	クリーニング・樹脂含浸	8	
下久保遺跡	2006003	鉄製品	鉄滓	クリーニング	1	
近世新潟町跡	2006015	鉄製品	釘ほか	クリーニング・樹脂含浸	181	
近世新潟町跡	2009241	鉄製品	鉄鏡ほか	クリーニング・樹脂含浸	4	
細池寺道上遺跡	2016002	鉄製品	鉄鏡	クリーニング・樹脂含浸	6	
合 計					465	

青銅製品						
遺跡名	調査番号	材質	器種	処理方法	点数	備考
大藪遺跡	1989008	青銅製品	古銭	クリーニング・樹脂含浸	16	
道上遺跡	2005003	青銅製品	煙管	クリーニング・樹脂含浸	1	
近世新潟町跡	2006015	青銅製品	古銭ほか	クリーニング・樹脂含浸	156	
近世新潟町跡	2009241	青銅製品	煙管ほか	クリーニング・樹脂含浸	9	
細池寺道上遺跡	2014001	青銅製品	古銭	クリーニング・樹脂含浸	4	
細池寺道上遺跡	2015002	青銅製品	古銭ほか	クリーニング・樹脂含浸	23	
細池寺道上遺跡	2016002	青銅製品	古銭	クリーニング・樹脂含浸	4	
芥木遺跡	2016003	青銅製品	古銭	クリーニング・樹脂含浸	1	
合 計					214	

表16 平成30年度外部委託保存処理一覧

遺跡名	調査番号	点数	備考	委託先	金額(円)	合計(円)
仲尖切遺跡	2014178	1	木柱	(公財)元興寺文化財研究所	1,735,776	4,571,078
林付遺跡	2010001	5	木柱ほか		2,835,302	

## 8 決算額

平成30年度における文化財センター決算額は表17のとおりである。(天野泰伸)

表17 平成30年度新潟市文化財センター決算額

■歳入 (一般会計)	
区 分	決算額(円)
○使用料及び賃借料	1,032,300
文化財センター設備使用料	4,300
行政財産使用料	1,028,000
○国庫補助金	60,014,000
市内遺跡範囲等確認調査	37,826,109
両新地区ほ場整備発掘調査	3,468,698
古津八幡山遺跡及びびガイダンス施設の保存・活用事業	2,817,415
文化財センター保存処理・活用事業	10,451,778
史跡古津八幡山遺跡確認調査事業	5,450,000
○諸収入	71,072,050
受託事業収入	69,730,000
両新地区ほ場整備発掘調査	63,000,000
小規模緊急発掘調査	6,730,000
雑入	1,342,050
コピー代実費	9,450
文化財センターその他雑入	743,800
弥生の丘展示館その他雑入	588,800
	132,118,350

■歳出 (一般会計)	
区 分	決算額(円)
○市内遺跡範囲等確認調査事業	55,077,761
市内遺跡範囲等確認調査事業費	30,506,613
市内遺跡範囲等確認調査事業費(ほ場整備等)	24,571,148
○埋蔵文化財本格発掘調査事業	97,788,041
両新地区ほ場整備発掘調査費	70,000,000
小規模緊急発掘調査費	27,788,041
○史跡古津八幡山遺跡確認調査事業	10,919,810
○文化財センターの管理運営	66,027,657
○古津八幡山遺跡及びびガイダンス施設の管理運営	18,591,184
	248,404,453



鉄製品 保存処理前(近世新潟町跡・2006015)



鉄製品 保存処理後(近世新潟町跡・2006015)

## IV 新潟市古津八幡山遺跡歴史の広場

史跡古津八幡山遺跡は新潟市秋葉区に所在する弥生時代後期の高地性環濠集落および新潟県内最大規模の古津八幡山古墳などからなる遺跡であり、平成17年7月に国史跡に指定されている。

現在は「新潟市古津八幡山遺跡歴史の広場」として、保存・整備・管理・活用が行われており、歴史の広場は遺跡を当時の姿に復元した「史跡公園」とそのガイダンス施設「史跡古津八幡山 弥生の丘展示館」からなる。

平成28年度には史跡の保存・活用の指針となる保存活用計画を策定した〔相田・金田ほか2017〕。平成30年度は前年度に設置した「古津八幡山遺跡保存活用計画等推進委員会」と、その下部組織としての「古津八幡山遺跡調査指導部会」によって保存活用計画を推進した。この詳細についてはIV 3に記載している。

史跡古津八幡山遺跡および整備の概要、古津八幡山遺跡歴史の広場の詳細な施設情報については、『年報』第1号に記載されている〔渡邊2014c〕。また、これまでの経過も『年報』第1～6号のとおりである。



史跡古津八幡山遺跡（北から）

### 1 資料の公開・展示

#### (1) 概要

弥生の丘展示館は、展示室や体験学習室が主な施設で、古津八幡山遺跡に関わる展示を行っている。

**常設展** 展示室には古津八幡山遺跡から出土した旧石器時代から平安時代の土器や石器などを500点以上展示するほか、弥生時代のムラの様子を縮尺300分の1の復元ジオラマ模型で再現している。また、遺跡への親近感や理解が深まるように、考古イラストレーターの早川和子氏による時代ごとの復元画を展示ケースの壁面全面に展示している。そのほか、ガイダンスシアターでは65インチの大形モニターで、古津八幡山遺跡の概要やこれまでの調査成果などを映像で見ることができる。

**企画展** 古津八幡山遺跡歴史の広場の全面供用開始を記念して、平成27年度から企画展を開催している。展示室の中央部分に展示ボードと展示ケースを設置し、企画展コーナーとして利用している。平成30年度は3回の企画展のほかに、第2回目となったフォトコンテストの受賞作品展を開催した。各企画展の一覧は表1のとおりであり、各展示詳細についてはIV 1 (2)～(5)に記載する。

また、各企画展では関連した講演会や講座を開催しているが、企画展会場である弥生の丘展示館には、講座などが行える大人数の収容空間がない。そのため、各講演会・講座は、西区木場の文化財センターで行っている。

なお、各講演会・講座の当日資料は新潟市のホームページで公開しているほか、内容とアンケート調査の結果をまとめた記録集を作成して、市内の図書館や3回全てに参加した人へ配布した。（小林美土里）

表1 平成30年度弥生の丘展示館企画展一覧

年度毎の番号	企画展名	会期	企画担当	来館者数(人)	関連講演会・イベント			
					演目 イベント名	開催日	講師	参加者数 (人)
1	古代の祭祀	2018/4/24(火) ～7/29(日)	相田泰臣	16,093	律令祭祀の基礎知識 越後平野における古代の祭祀関連遺跡とその様相	2018/5/27(日)	金田拓也(歴史文化課)、 相田泰臣	38
					展示解説①	2018/6/23(土)	相田泰臣	5
					展示解説②	2018/7/8(日)		8
2	豪族居館-王の暮らす屋敷-	2018/8/7(火) ～12/2(日)	相田泰臣	15,113	古墳時代の集落と豪族居館-東日本を中心に-	2018/10/14(日)	菊地芳朗氏(福島大学行政政策学類教授)	41
					展示解説	2018/11/10(土)	相田泰臣	9
3	鐵-弥生・古墳時代の鉄器-	2018/12/11(火) ～2019/4/14(日)	渡邊朋和	9,724	弥生の「鉄」がたたく日本海沿岸流域の交流	2019/2/10(日)	林大智氏 (石川県埋蔵文化財センター専門員)	91
					展示解説①	2018/12/23(日)		5
					展示解説②	2019/2/17(日)	渡邊朋和	17
					展示解説③	2019/3/17(日)		6



## (2) 企画展1 「古代の祭祀」

会 期 平成30年4月24日(火)～7月29日(日)

担 当 相田泰臣

入館者数 16,093人

**展示概要** 飛鳥時代の7世紀は、東アジア諸国との緊張関係を背景に古代国家の枠組みが急速に整っていった時代といえる。地方は「国」や「評」といった行政単位に編成され、地方豪族の多くは官人となっていった。祭祀においても、701年に成立した「大宝令」で、公的・国家的な祭祀についての規定が示され、飛鳥時代から平安時代を中心に行われた古代律令祭祀の形態が整備されたと考えられている。

本企画展では、いわゆる古代律令祭祀が完成していく過渡期の飛鳥時代を前後する時期、古墳時代から平安時代を対象に、越後平野の主な祭祀関連遺跡や遺物を紹介・展示しながら、時代による祭祀具の変化や、同じ時代でも遺跡や遺構によって祭祀具が異なる背景などについて考えた。

### 展示構成

- 1) 古代の祭祀(律令祭祀)の概要
- 2) 越後平野における律令祭祀前夜
- 3) 越後平野における古代祭祀関連遺跡
- 4) 越後平野における古代祭祀の様相

**主要展示** 2)越後平野における律令祭祀前夜では、越後平野における古墳時代の祭祀関連遺跡や祭祀関連遺物について展示・解説を行った。

3) 越後平野における古代祭祀関連遺跡では、新潟市の大沢谷内遺跡と、田上町の行屋崎遺跡について、祭祀関連遺物などの比較を行った。また、新潟市の緒立C遺跡と的場遺跡における水辺の祭祀の状況を確認したほか、緒立C遺跡や胎内市の船戸桜田遺跡で出土した人面墨書土器、さらには大沢谷内遺跡での井戸祭祀や的場遺跡での地鎮祭祀についても展示・解説を行った。

4) 越後平野における古代祭祀の様相では、上記以外の遺跡も含めて比較・検討を行った。同じ時期の公的機関が関与する遺跡であっても、祭祀遺物の種類や多寡に違いが見られることから、遺跡の役割や機能、そのほか様々な要因によって祭祀のあり方が異なっていたことが推測された。

**関連講座** 企画展の関連講座を開催した。

演 目 律令祭祀の基礎知識、越後平野における古代の祭祀関連遺跡とその様相

講 師 金田拓也(歴史文化課)、相田泰臣

日 時 平成30年5月27日(日)

午後1時30分～3時30分

参加者数 38人

会 場 文化財センター研修室

展示解説 展示担当による展示解説を2回開催した。

日 時 平成30年6月23日(土)・7月8日(日)

午後1時30分～

参加者数 5人(6/23)・8人(7/8)

**まとめ** 今回の企画展では、官衙関連遺跡など主要な遺跡を中心に比較を行った。官衙関連遺跡以外の一般集落における祭祀の様相や祭祀遺物などについても、総合的にもう少し深く比較・検討を行えば良かったと考える。(相田泰臣)



展示風景(展示室)



関連講座風景



展示解説風景(展示室)

### (3) 企画展2 「豪族居館—王の暮らす屋敷—」

会 期 平成30年8月7日(火)～12月2日(日)

担 当 相田泰臣

入館者数 15,113人

**展示概要** 1981年に群馬県の三ツ寺I遺跡で見つかった大形の竪穴住居や、それを囲う柵列・堀などを伴う集落は、一般集落との隔絶性から「首長居館」・「豪族居宅」・「首長居宅」・「豪族居館」(以下、豪族居館)などと呼ばれ広く認知されてきた。豪族居館の事例は各地で増加しているが、一方で事例が増加するにつれて、その規模や内容などが非常に多様であることも明らかになってきている。

地域の古墳時代像を明らかにしていくためには、古墳に加え、古墳をつくった豪族の屋敷である豪族居館、さらには一般集落の動向や様相について検討していく必要がある。しかし、豪族居館や集落で全面的な発掘調査が行われている事例は少なく、豪族居館の実態や古墳との関係などを明らかにし、当時の古墳時代像を復元していく作業は今後の大きな課題となっている。

新潟市内には県内最大の古津八幡山古墳をはじめ、これまでに8基の古墳が確認されている。これら古墳をつくった豪族の居館について確実なものはまだ見つからないが、舟戸遺跡(秋葉区)や御井戸遺跡(西蒲区)など、いくつかの遺跡が候補として挙げられる。本企画展では、東日本の主な豪族居館やこれまでの調査・研究成果などを概観するとともに、市内の豪族居館候補の遺跡について紹介・展示した。

#### 展示構成

- 1) 豪族居館の概要
- 2) 各地の豪族居館の事例
- 3) 多様な豪族居館像
- 4) 新潟市内の集落と古墳

**主要展示** 2) 各地の豪族居館の事例では、豪族居館の調査・研究の嚆矢となった群馬県の三ツ寺I遺跡や、福島県の古屋敷遺跡などについて、出土遺物の展示とともに紹介した。

4) 新潟市内の集落と古墳では、古津八幡山古墳、山谷古墳をつくった豪族の居館となる可能性がある舟戸遺跡、御井戸遺跡について展示・紹介した。

展示をとおして、地域性や首長・豪族の身分や役割、遺跡の性格、時代などによって、豪族居館が非常に多様であることを確認するとともに、今後市内でも豪族居館が発見される可能性の高いことが認識された。

**関連講演会** 企画展の関連講演会を開催した。

演 目 古墳時代の集落と豪族居館

—東日本を中心に—

講 師 菊地芳朗氏(福島大学行政政策学類教授)

日 時 平成30年10月14日(日)

午後1時30分～3時30分

会 場 文化財センター研修室

参加者数 41人

**展示解説** 展示担当による展示解説を開催した。

日 時 平成30年11月10日(土) 午後1時30分～

参加者数 9人

**まとめ** 古墳自体は注目されがちであるが、古墳をつくった豪族の屋敷(豪族居館)の存在をある程度周知できた。講演会は広い視野で分かりやすくご講演いただき、参加者からは大変好評であった。(相田泰臣)



展示風景(展示室)



関連講演会風景



展示解説風景(展示室)

#### (4) 企画展3 「鐵—弥生・古墳時代の鉄器—」

会 期 平成30年12月11日(火)～

平成31年4月14日(日)

担 当 渡邊朋和

入館者数 9,724人

**展示概要** 古津八幡山遺跡からは鉄器が3点出土している。鉄剣(方形周溝墓)、鉄鎌(焼失住居)、刀もしくは剣(古津八幡山古墳盛土)である。3点と少ないが、発掘調査で出土する石器が少ないこと、鉄器用に使用されたと推定される砥石が多数出土していることなどから、当時使われていた道具の主体は鉄器だったと考えられる。

古津八幡山遺跡がある金津丘陵一帯は古代から中世前期にかけて鉄素材の一大生産地になるが、それ以前の弥生時代に初めて鉄器が用いられるようになった意義は大きい。

企画展では古津八幡山遺跡と同時代の新潟県内の弥生時代から古墳時代前期の遺跡から出土した金属器を集成し、その中から主要な遺物を展示し、当時古津八幡山遺跡でも使用されていた可能性のある鉄器を紹介した。

また、県内からは朝鮮半島産とされる三条市経塚山遺跡の板状鉄斧、長岡市姥ヶ入南遺跡の袋状鉄斧があり、それらが日本海を介してもたらされたことを、長野県木島平村根塚遺跡の鉄剣レプリカ3点、柏崎市開運橋遺跡の北部九州系土器などで説明した。

**展示構成** 日本における鉄製錬は、岡山県総社市千引かなくろ谷遺跡など6世紀中頃から後半にならないと行われなかったため、弥生時代や古墳時代前期の鉄器・鉄素材は全て大陸からもたらされたと考えられる。新潟県内では、弥生時代中期の鉄器は発見されていないが、石川県小松市八日市地方遺跡では弥生時代中期の舶載袋状鑄造鉄斧用の木の柄が多数見ついている。舶載鑄造鉄斧は、中国の戦国時代の終わり頃に「燕」の国で作られたものが朝鮮半島を経由して日本にもたらされたと考えられている。また、その破損品も再加工・再利用されて、日本では様々な利器として使われた。弥生時代の鉄器の起源が朝鮮半島にあり、新潟県内へは北部九州などを經由して、日本海を介してもたらされた。そして、弥生時代開始期には鉄器がなく、現状では前期の終わり頃か中期の初め頃の鉄器が国内における最古と考えられている。

**主要展示** 県内の弥生時代から古墳時代前期の鉄器43点(経塚山遺跡板状鉄斧・姥ヶ入南遺跡袋状鉄斧の2点の舶載鉄器を含む)、根塚遺跡渦巻文鉄剣レプリカ等3点、開運橋遺跡北部九州系壺形土器、韓国出土の渦巻文鉄剣の実物大パネルなど。集成した資料は30遺跡79点(青銅器

16点含む)で、このうち43点を借用して展示した。

また、国内で数例しか確認されていない古墳時代前期の長岡市五千石遺跡鍛冶炉の切り取り標本、蒲鉾形羽口を展示した。

**展示解説** 展示担当による展示解説を3回開催した。

日 時 平成30年12月23日(日)・

平成31年2月17日(日)・3月17日(日)

午後1時30分～

参加者数 5人(12/23)・17人(2/17)・6人(3/17)

日本海経由で朝鮮半島から鉄器が伝わったことを説明したところ、時代を越えて日本海の物流が重要であることに関心が持たれた。

**関連講演会** 企画展の関連講演会を開催した。

演 目 弥生の「鉄」がつなぐ日本海沿岸流域の交流

講 師 林 大智氏(石川県埋蔵文化財センター専門員)

日 時 平成31年2月10日(日)

午後1時30分～3時30分

会 場 文化財センター研修室

参加者数 91人

講師は北陸地域を中心に弥生時代の鉄器研究を行っている若手研究者の一人で、小松市八日市地方遺跡の「柄付き鉄製鉋」を発見した調査担当者でもある。

弥生時代の鉄器の基礎知識と製作技術、北陸の鉄器の普及とその特徴、新潟県域の鉄器の普及と高地性集落、鉄と玉、日本海沿岸域の鉄をめぐる地域間交流について、近年の弥生時代鉄器研究の最新情報も入れて、一般市民にもわかりやすい講演だった。

**ま と め** 県内で出土している舶載鉄器2点(経塚山遺跡板状鉄斧・姥ヶ入南遺跡袋状鉄斧)・開運橋遺跡北部九州系壺形土器・根塚遺跡渦巻文鉄剣とともに、韓国出土の渦巻文装飾のある鉄器の実物大パネルを展示することによって、日本海を介して朝鮮半島から鉄器が伝わったことが理解できたのではないかと考えている。

(渡邊朋和)



展示風景(展示室)



#### (5) 第2回フォトコンテスト展

会 期 平成30年4月24日(火)～6月3日(日)

担 当 牧野耕作

展 示 概 要 古津八幡山遺跡の魅力を再発見し、遺跡を広く知ってもらう目的で、前年に引き続き第2回フォトコンテストを実施した。

80作品の応募があり、その中から専門の審査員による選考によって入賞5点と、入選10点の計15点の受賞作品を決定した。受賞した全作品は、弥生の丘展示館体験学習室の壁面に展示した。



展示風景 (体験学習室)



グランプリ  
「月照の古津八幡山遺跡」(撮影者: 樋口廣治氏)



古津八幡山遺跡賞  
「燻蒸維持」(撮影者: 小山 覚氏)



弥生の丘展示館賞  
「悠久の光」(撮影者: 是永 進氏)



新潟市文化財センター長賞  
「時空を超えて」(撮影者: seiji氏)



フジカラー賞  
「タイムマシン」(撮影者: 大澤朋恵氏)

ま と め 日常では見ることができない、あるいは新たな視点での古津八幡山遺跡の風景は、非常に新鮮であった。展示をご覧いただいた方は、遺跡の新たな魅力に出会えたのではないかと思います。今後は別の会場出張展示を行うなどして、より多くの方が古津八幡山遺跡を知り、また遺跡の魅力を再発見するきっかけになるように活用していきたい。(相田泰臣)

## 2 教育普及活動

### (1) 体験学習

弥生の丘展示館では、個人が来館すればいつでも体験できる事前申込み不要の体験学習メニューを月ごとに決めている(表2・3)。これは、季節やこれまでの状況から、年度ごとに変えている。

平成30年度の体験学習の参加者数は、個人4,281人(前年度比65人増)、団体3,341人(同251人増)、全体7,622人(同316人増)であり、前年度よりも個人・団体ともに参加者数が増加した。団体の体験学習参加者が大きく増加しており、弥生の丘展示館を見学して体験学習も行う団体が増えてきているといえる。

団体利用は、概ね10人以上の場合に事前の申し込みをお願いしている(表4・5)。平成30年度は団体利用件数57件(前年度比28件減)、利用人数2,094人(同322人減)であった。団体分類別でみると、小学校の利用は平成29年度より減少した(前年度比団体利用件数2件減、利用人数194人減)。中学校の利用もわずかに減少した(前年度比団体利用件数2件減、利用人数12人減)。小学校に関しては、体験学習の時間までとれないという理由などから広場のみを利用する団体もあり、今後検討していく必要がある。

### (2) イベントなど

平成30年度も引き続きイベントや体験学習、企画展の情報などをまとめた年間スケジュールを作成し、配布した。また、新潟県教育庁文化行政課が年2回発行している『まいぶんナビ』に、企画展やイベントなどの情報を提供し掲載してもらっている。

イベントは、市報や新潟市の公式ホームページなどで広報し、参加者を事前に募集して月に2回から3回実施している(表6)。許容人数の関係から、20人以下と少人数のイベントが多いが、「弥生時代の姿を考える」や「弥生の水田再現」は恒例のイベントとなり、複数回参加されている方が目立つ。昨年度から始めた「アンギン」づくりも好評で、材料のカラムシ収穫から編みまで複数回の日程で行った。また、「子持ち勾玉づくり」は企画したものの、参加者がなく行わなかった。

当日受付のものでは、6月に新潟県立植物園をメイン会場として行う「第17回にいつ花ふるフェスタ」の協賛イベントとして、「花と遺跡のふるさとフェスタ」を開催し、複数の体験学習を行った。当日は、史跡公園へ足を運ぶ人を増やす試みとしてスタンプラリーも行い、体験学習参加者など延べ人数が1,196人(前年度比443人増)と好評だった。10月には、新潟県立植物園で植物園が主催する「秋の植物園祭り」や、秋葉区役所主催の「アキ

ハアウトドアスポーツフェスタ」と同日開催で、新潟県埋蔵文化財センターと連携した「まいぶん祭り」を開催した。当日は、台風のため外で行うイベントは全て中止した。台風の影響もあり、参加者数134人(前年度比861人減)と少なかった。

さらに、平成29年度に続き「第3回古津八幡山遺跡フォトコンテスト」を開催し、70作品(前年度比10作品減)の応募があった。どれも遺跡の様々な表情がみられる作品ばかりであった。厳正な審査で15点の受賞作品を決定した。古津八幡山遺跡の広報を目的に始めたこのイベントは、十分な成果があったことから今回で終了することにした。

### (3) 入館者数

平成30年度の弥生の丘展示館入館者数(表7)は、個人40,263人(前年度比8,220人増)、団体2,094人(同322人減)、全体42,357人(同7,898人増)であった。前年度よりも入館者数は増加したが、団体の入館者数は減少してしまった。入館者数の増減は、従前の傾向では隣接する新潟市新潟美術館で開催される展覧会の影響が非常に大きい。特に親子連れを対象とした展覧会の場合、弥生の丘展示館の入館者数も増加する傾向にある。

一方で、冬季(12~3月)の入館者は8,804人(前年度比3,593人増)であった。例年よりも人数は大きく増えているが、夏季に比べるとやはり少ない。今後も継続して冬季の入館者数が増加するようなイベントを考えていく必要がある。

史跡公園への来場者数は、弥生の丘展示館の入館者数よりも多くなった。今後は、史跡公園の利用者に対し弥生の丘展示館へ入館を促すアプローチをしていく必要がある。(小林美土里)



「弥生の水田再現4」(稲刈り)

表2 平成30年度弥生の丘展示館体験学習（事前申込み不要）一覧

無料/有料	メニュー	料金(円)	所要時間(分)
無料	火起こし体験	—	15
	弓矢体験	—	10
	石斧体験	—	10
	クラフトづくり	—	無制限
	土器パズル	—	10
	ぬりえ	—	10
有料	土偶・土笛・土鈴づくり	100	30～60
	土器づくり	200	60～120
	勾玉・管玉づくり	200	60
	鹿角ペンダントづくり	200	60
	鹿角（先端）ペンダントづくり	500	60
	銅鏡づくり	500	60
	銅鐸づくり	1,000	30
	アンギン編み（小）	300	120以上
アンギン編み（大）	500	120以上	

表3 平成30年度弥生の丘展示館体験学習（事前申込み不要）参加者数

月	体験学習メニュー		参加者数(人)				
	屋内体験 (有料)	野外体験 (無料)	個人	団体	合計	1日 平均	累計 (開館から)
4	土器・土偶・土笛・土鈴づくり	石斧体験	202	123	325	12.5	47,806
5	勾玉・管玉・鹿角ペンダントづくり	弓矢体験	767	691	1,458	52.1	49,264
6	土器・土偶・土笛・土鈴づくり	火起こし体験	122	535	657	25.3	49,921
7	铸造体験（銅鐸・銅鏡）、勾玉・管玉・鹿角ペンダントづくり	弓矢体験	469	680	1,149	44.2	51,070
8	勾玉・管玉・鹿角ペンダントづくり	火起こし体験	957	326	1,283	45.8	52,353
9	铸造体験（銅鐸・銅鏡）、勾玉・管玉・鹿角ペンダントづくり	石斧体験	362	545	907	34.9	53,260
10	土器・土偶・土笛・土鈴づくり	弓矢体験	303	209	512	19.7	53,772
11	铸造体験（銅鐸・銅鏡）、勾玉・管玉・鹿角ペンダントづくり	石斧体験	240	199	439	16.9	54,211
12	铸造体験（銅鐸・銅鏡）、勾玉・管玉・鹿角ペンダントづくり	火起こし体験	149	0	149	6.5	54,360
1	铸造体験（銅鐸・銅鏡）、勾玉・管玉・鹿角ペンダントづくり	里山のクラフトづくり	223	0	223	8.9	54,583
2	アンギン編み、勾玉・管玉・鹿角ペンダントづくり	里山のクラフトづくり	181	11	192	8.0	54,775
3	アンギン編み、勾玉・管玉・鹿角ペンダントづくり	火起こし体験	306	22	328	12.1	55,103
合計/平均			4,281	3,341	7,622	24.5	

表4 平成30年度弥生の丘展示館団体利用一覧

小・中学校・その他学校

来館日	団体名	人数(人)
2018/4/13(金)	桜ヶ丘小学校(中央区)	広場のみ
2018/4/19(木)	木戸小学校(東区)	広場のみ
2018/4/20(金)	金津中学校(秋葉区)	18
2018/4/24(火)	関屋中学校(中央区)	10
2018/4/26(木)	根岸小学校(南区)	37
2018/5/1(火)	岩室小学校(西蒲区)	32
2018/5/2(水)	笹口小学校(中央区)	43
2018/5/8(火)	羽生田小学校(田上町)	42
2018/5/10(木)	新潟大学教育学部附属新潟小学校(中央区)	17
2018/5/11(金)	亀田東小学校(江南区)	136
2018/6/22(金)	阿賀小学校(秋葉区)	45
2018/9/4(火)	松浜小学校(北区)	96
2018/9/12(水)	立仏小学校(西区)	55
2018/9/14(金)	大野小学校(西区)	57
2018/9/14(金)	吉田特別支援学校(燕市)	5
2018/9/18(火)	女池小学校(中央区)	広場のみ
2018/9/20(木)	小合東小学校(秋葉区)	13
2018/9/21(金)	巻南小学校(西蒲区)	66
2018/9/28(金)	東青山小学校(西区)	86
2018/10/12(金)	五十嵐小学校(西区)	121
2018/10/17(木)	早通小学校(江南区)	30
2018/10/18(木)	五十嵐中学校(西区)	33
2018/11/6(火)	小須戸小学校(秋葉区)	41
2018/11/8(木)	新津第一小学校特別支援学級(秋葉区)	21
2018/11/9(金)	和納小学校(西蒲区)	38
2018/11/13(火)	万代長嶺小学校(中央区)	64
合計		1,106

小・中学校以外

来館日	団体名	人数(人)
2018/4/19(木)	新発田市埋蔵文化財整理室作業員	9
2018/5/14(月)	坂井輪公民館サークル「さわらび」	13
2018/5/17(木)	全日本年金者組合新潟県本部女性部	80
2018/5/18(金)	軽ウォーキングの会	10
2018/6/9(土)	ツルマキグループ(保育園関係)	15
2018/6/9(土)	五泉市立村松小学校5年生PTA行事	104
2018/6/10(日)	五泉市立大蒲原小学校PTA学年行事	34
2018/6/15(金)	軽ウォーキングの会	10
2018/6/15(金)	NPO法人アキハロハスAkiha森のようちえん	35
2018/6/17(日)	新潟ロイヤルライオンズクラブ	45
2018/7/26(木)	つがわ児童クラブ	50
2018/7/28(土)	秋葉3丁目PTA	23
2018/7/28(土)	「水と土の芸術祭2018子供プロジェクト」秋葉区地域課	19
2018/7/28(土)	松浜小学校PTA	80
2018/7/29(日)	中之口六門子供会	31
2018/7/31(火)	みかわ児童クラブ	63
2018/8/4(土)	イオンチアーズクラブ	14
2018/8/7(火)	動く市政教室「新潟の歴史ミステリーツアー」	33
2018/8/9(木)	放課後里山学校	12
2018/8/9(木)	動く市政教室「新潟の歴史ミステリーツアー」	16
2018/8/19(日)	ボーイスカウト阿賀野第一団	18
2018/8/21(火)	ひでや・かみかわ児童クラブ	40
2018/9/9(日)	西安博物院随員等	5
2018/9/15(土)	秋葉区自治協議会「あきは子ども大学」	32
2018/9/15(土)	「越の国の縄文遺跡を訪ねて」	41
2018/10/19(金)	動く市政教室「企画展で学ぶ古墳時代の王の屋敷」	17
2018/10/21(日)	新潟ロイヤルライオンズクラブ	45
2018/10/21(日)	動く市政教室「企画展で学ぶ古墳時代の王の屋敷」	15
2018/11/1(木)	西安博物院随員等	6
2018/11/4(日)	秋葉区健康ウォーキング	広場のみ
2018/11/6(火)	総務省新潟地区行政相談委員協議会	6
2018/11/15(木)	みどり幼稚園	36
2018/11/17(土)	吹上・釜蓋遺跡応援団	9
2019/2/6(水)	新潟グルク	11
2019/3/27(水)	放課後里山学校	11
合計		988



表5 平成30年度弥生の丘展示館分類別団体利用数

分類名	団体利用数(件)	人数
保育施設・幼稚園	2	71
小学校	19	1,040
中学校	3	61
その他学校	1	5
動く市制教室	4	81
市関係	1	19
行政・議会関係	3	17
自治会・町内会など地域コミュニティ関係	11	480
各種サークルなど	9	179
企業企画ツアーなど	1	41
その他	3	100
合計	57	2,094

表6 平成30年度弥生の丘展示館イベント・体験学習（事前募集）・公開講座一覧

開催日	内 容	人数
2018/4/29 (日)	弥生時代の姿を考える植生編1 (春)	9
2018/5/13 (日)	弥生の水田再現1 (田起こし・田植え)	20
2018/5/20 (日)	弥生時代の姿を考える昆虫編1 (採集)	8
2018/6/3 (日)	花と遺跡のふるさとフェスタ	1,196
2018/6/17 (日)	弥生の水田再現2 (草取り・雑穀植え付け)	16
2018/6/24 (日)	弥生時代の姿を考える昆虫編2 (展翅)	24
2018/7/1 (日)	弥生時代の姿を考える植生編2 (初夏)	17
2018/7/15 (日)	弥生の水田再現3 (草取り)	12
2018/7/22 (日)	アングイン1 (カラムシ収穫・お引き)	10
2018/7/29 (日)	発掘体験	5
2018/8/5 (日)	弥生時代の姿を考える昆虫編3 (ラベル書き)	22
2018/9/2 (日)	アングイン2 (糸撚り)	10
2018/9/16 (日)	弥生の水田再現4 (稲刈り)	18
2018/10/7 (日)	まいぶん祭り	134
2018/10/14 (日)	弥生食体験ドングリを食べよう1 (採集)	6
2018/10/21 (日)	弥生時代の姿を考える植生編3 (秋)	10
2018/11/4 (日)	弥生の水田再現5 (脱穀・粃摺り・試食)	20
2018/11/11 (日)	弥生食体験ドングリを食べよう2 (穀取り)	6
2018/11/25 (日)	稲藁リースづくり	14
2018/12/2 (日)	土器カレンダーづくり	14
2018/12/9 (日)	弥生食体験ドングリを食べよう3 (試食)	7
2018/12/23 (日)	アングイン3 (編み)	6
2019/1/6 (日)	弥生の餅つき	397
2019/2/3 (日)	弥生時代の姿を考える動物編	5
2019/2/17 (日)	ミニチュア土器づくり	13
2019/3/10 (日)	子持勾玉づくり1	0
2019/3/17 (日)	子持勾玉づくり2	0
合 計		1,999

表7 平成30年度弥生の丘展示館入館者数

月	開館 日数	来館者数(人)				累計 (開館から)
		個人	団体	全体	1日平均	
4	26	3,978	74	4,052	155.8	261,740
5	28	7,588	373	7,961	284.3	269,701
6	26	3,579	288	3,867	148.7	273,568
7	26	2,271	266	2,537	97.6	276,105
8	28	4,097	133	4,230	151.1	280,335
9	26	3,586	415	4,001	153.9	284,336
10	26	3,453	302	3,755	144.4	288,091
11	26	2,929	221	3,150	121.2	291,241
12	23	1,377	0	1,377	59.9	292,618
1	25	2,191	0	2,191	87.6	294,809
2	24	1,572	11	1,583	66.0	296,392
3	27	3,642	11	3,653	135.3	300,045
合計/平均	311	40,263	2,094	42,357	136.2	

### 3 古津八幡山遺跡保存活用計画の推進

#### (1) はじめに

平成28年度に策定した『国史跡 古津八幡山遺跡保存活用計画』〔相田・金田ほか2017〕（以下、保存活用計画）などを推進していくため、平成30年度は「古津八幡山遺跡保存活用計画等推進委員会」（以下、推進委員会）を1回、さらに古津八幡山遺跡の確認調査に関する指導や助言を受けるため「古津八幡山遺跡調査指導部会」（以下、調査指導部会）を2回開催した。経過などは表8・9のとおりである。

#### (2) 平成30年度古津八幡山遺跡確認調査について

保存活用計画に沿って史跡古津八幡山遺跡をより適切に保存・活用していくため、史跡内外の遺跡の状況を把握することを目的とした確認調査を昨年度に引き続いて行った（第21次調査）。調査地は、昨年度と同様に古津八幡山遺跡北東域の史跡指定地外で、標高約50mの遺跡最高所から北東へ一段下がった丘陵中腹域、標高約25mの平坦面及び緩斜面域に位置する。

調査期間は途中の中断を含め平成30年5月30日から11月2日で、調査面積は約195㎡である。確認調査の結果、本遺跡で初めて掘立柱建物1棟の配置を確認したほか、前年度の調査で見つかった大形竪穴住居の形状や規模などが明らかになった。なお、今年度確認した遺構数は、竪穴住居1棟、掘立柱建物1棟、土坑1基、溝55条、ピット180基、性格不明遺構3基で、出土遺物は縄文土器、弥生土器のほか、鉄器、石器、礫などがある。

①掘立柱建物（SB1） 母屋部分は1間×3間で、梁行約4.5m、桁行約6.2mの独立棟持柱建物と考えられる。周辺ではほかにも多数の柱穴が確認されており、複数棟の掘立柱建物の存在が推測される。この掘立柱建物を構成する柱穴からの遺物の出土は少ないが、一部柱穴からは弥生時代の土器片が出土している。

②竪穴住居（SI1） 壁溝の外側で一辺約9.5mを測る大形の竪穴住居で、平面形はやや胴の張る隅丸形状を呈する。また、壁溝が2条切り合いをもって確認されたことから建て替えを行っており、建て替え前の平面形は不整の楕円形と推測される。

当遺跡でこれまでに確認されている60棟の竪穴住居の中で最大規模となる。出土土器から新潟シンポジウム編年〔日本考古学協会新潟大会実行委員会1993〕の4期（弥生時代終末期）の住居と考えられる。また、この大形竪穴住居と一部重複する竪穴住居（SI465）も確認された。SI465は一辺約4mの隅丸方形プランと推測される。SI1を壊してつくられていることから、SI1よりも新しく

古津八幡山遺跡における最終段階の建物と考えられる。

#### (3) おわりに

令和元年度も大形竪穴住居およびその周辺域において継続して確認調査を行う予定である。（相田泰臣）

表8 古津八幡山遺跡保存活用計画等推進委員会の経過

開催日	開催数 (通算)	協議・検討事項
2019/3/13	第3回	平成30・31年度の保存管理関係、整備関係、活用関係、運営・連携体制関係について

表9 古津八幡山遺跡調査指導部会の経過

開催日	開催数 (通算)	協議・検討事項
2018/8/30	第4回	確認調査の現地指導
2019/3/13	第5回	表8と同じ



掘立柱建物（SB1）調査風景



掘立柱建物（SB1）柱穴の断面



竪穴住居（SI1・SI465）全景

## V 研究活動－資料紹介・研究ノートなど－

### 1 新潟市西区六地山遺跡出土弥生土器の再検討

#### (1) はじめに

2017年1月4日～3月26日、史跡古津八幡山 弥生の丘展示館企画展4「邪馬台国の時代4 古津八幡山の頃の信濃川左岸の世界－六地山遺跡里帰り展－」で信濃川左岸の遺跡から出土した弥生時代中期後半から後期の遺物とともに、新潟市西区の六地山遺跡出土遺物を展示した。現在六地山遺跡出土資料は、大半が長岡市立科学博物館所蔵になっているので、サブタイトルして「六地山遺跡里帰り展」とした。

六地山遺跡は古津八幡山遺跡と同じ弥生時代後期の遺跡である。丘陵上に立地する古津八幡山遺跡に対し、海岸砂丘上に立地する遺跡として、古津八幡山遺跡を理解する上で看過できない重要な遺跡の一つである。

六地山遺跡出土資料は、1956年発掘調査資料（長岡市立科学博物館所蔵）・真島衛氏採集資料（真島家所蔵）・金塚友之丞氏採集資料（新潟市歴史博物館所蔵）が主なもので、この他、新潟市教育委員会が確認調査を行った資料がある〔甘粕・小野ほか1986〕が、資料の大半は長岡市立科学博物館所蔵資料が占めている（注1）。

企画展のために、長岡市立科学博物館から六地山遺跡出土品を借用し、2016年4月～2017年6月にかけて接合・実測・集計などの再整理作業を行った。限られた期間内の作業だったために不十分ではあったが、接合作業によって新たに器形が復元されたものも少なくない。また、真島衛氏採集資料と金塚友之丞氏採集資料中に、今まで知られていなかった続縄文土器を確認することができた。

長岡市立科学博物館所蔵資料は、新潟市史編さんの際にも借用され、『新潟市史 資料編1 原始古代中世』に実測図等が報告されている〔新潟市史編さん原始古代中世史部会編1994〕（注2）。現在、出土遺物は同館の伝統的な木箱に入れられており、遺跡名・出土地点を示す紙ラベルが貼られている。借用時には木箱内に新潟市史編さん時のメモ書きが幾つか残されていた。なお、資料返却時には、借用時の旧状に復するように木箱に戻し、接合したものや同一個体と考えられる個体はビニール袋に入れて最も個体数の多い木箱に戻すようにした。接合などで木箱に入らなくなった遺物は、プラスチック製コンテナに収納して返却した。また、遺物を借用する際に、発掘調査時の測量図面等の記録類の所在を照会したが確認

することはできなかった。写真はフィルムからデジタル化したデータの提供を頂いた。この他に、故関雅之氏からも青焼きの現況測量図、発掘調査写真を提供して頂いた。図3はそれらを基に作成したものである（注3）。

今回、六地山遺跡出土土器の図化作業を行い再報告する目的は、新潟市域における弥生時代後期の社会を解明するうえで重要な資料であること、そして、前述したように国史跡古津八幡山遺跡の動態を考察するうえでも、六地山遺跡そのものの評価をする必要があると考えたからである。後に詳しく記すが、六地山遺跡の所属時期は従来、北陸系土器と東北系土器は別時期で、前者が後期前半、後者は後期後半とされてきたが、今回の再検討によって両者は同一時期で後期前半に所属させるべきであると認識するに至った。天王山遺跡天王山式期以前である。天王山遺跡とはほぼ同じ頃に古津八幡山遺跡の高地性環濠集落も成立する激動の時期直前の頃である。

#### (2) 六地山遺跡の概要（図1～図5）

六地山遺跡は新潟市西区曾和・内野戸中才・内野湯端・内野早角・田島に所在する。JR越後線内野駅から1.2kmほど南にあり、周囲を低湿地に囲まれた砂丘上（新砂丘Ⅱ-1）に立地する。現在は海岸線まで直線距離で約2km程であるが、当時は新砂丘Ⅲの形成途上と推測されるから、海岸線までの距離はもっと近かったと考えられる。また、日本海に近いだけではなく、西川（信濃西川）の河口・河道にも近い交通の要衝であったと推察される。周辺の代表的な遺跡として、砂丘上に立地する緒立遺跡（縄文晩期、弥生前期～中期初頭、古墳早期、古代）と四十石遺跡（縄文、弥生、古墳早期・前期、古代）がある。本遺跡とは時代が異なるが、両遺跡からは各地域からもたらされたと考えられる遺物が出土しており、物流や交易に関係する遺跡であったと推察される。この六地山遺跡の立地条件は遺跡の性格を理解する上で重要であることを強調しておきたい。

1956年の発掘調査は寺村光晴氏が『上代文化』第30輯に「越後六地山遺跡」として報告されているので〔寺村1960〕、これによって発掘調査当時の遺跡の状況を簡単に記しておこう。

六地山遺跡は弥彦山・角田山が一望できる場所にあり、1944年頃までは松林であったが、戦時中の食糧増産のために開墾され畑地となった。遺跡がある砂丘は平野部に突出しているため季節風による風侵が甚だしく、さらに砂丘の中央を南北に幅3mの農道が造成されてからは採砂場となり、遺跡は湮滅寸前の状態であったとい



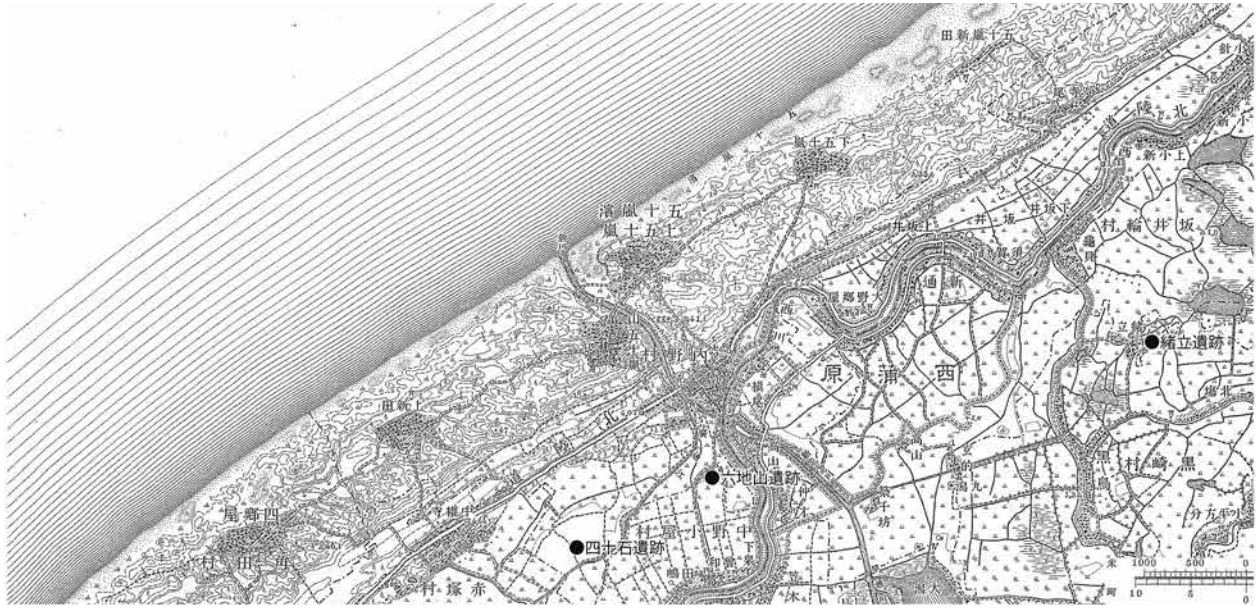
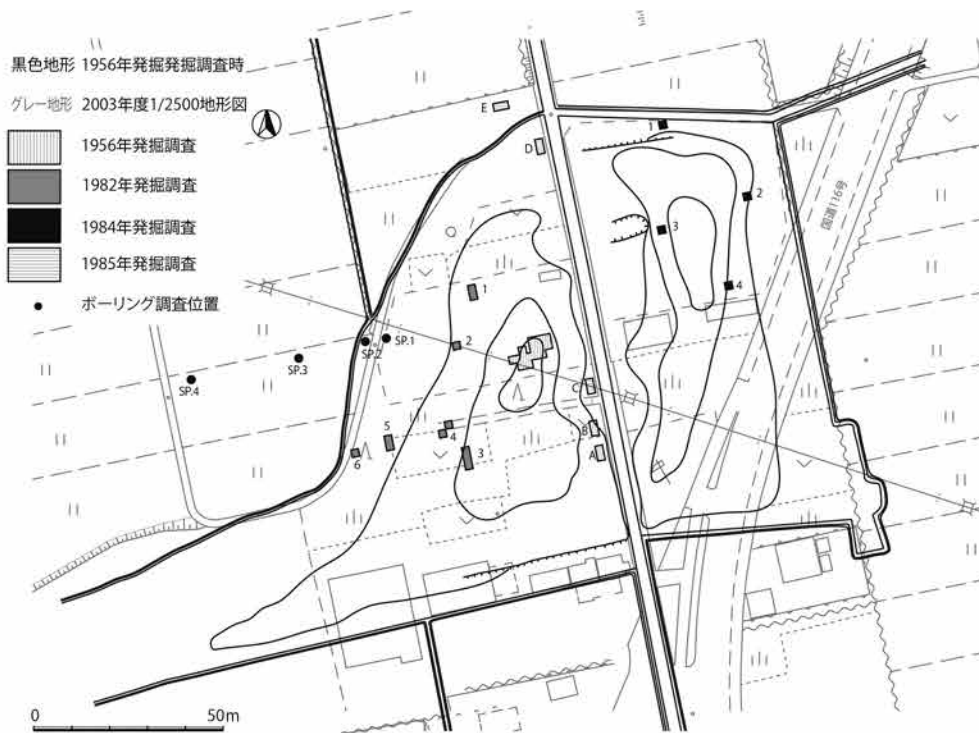


図1 六地山遺跡位置図 (1911年測図、1914年製版 内野1/5→1/7.5万)



図2 六地山遺跡周辺の空中写真 (1948年米軍撮影)



寺村 1960・関雅之氏提供現況  
測量図 1956・新潟市史 1994  
より作成

図3 六地山遺跡発掘調査位置図

う。開墾時に石鏝が多数出土し、「作業中に人骨・蔵骨器・直刀等が道路北側から発見され」とされているが、直刀は、当時もその所在は不明だったようである(注4)。

1955年に、弥彦神社(弥彦山信仰)の研究のために西蒲原郡内の遺跡踏査をしていた真島衛氏が、六地山遺跡を訪れたところ、「刷毛目のある弥生式土器」と共にそれまでに知られていない「縄文土器とは明らかに異なる縄文のある土器」があることに注目した。その後、平野部にある弥生時代の集落を解明することと、遺跡の湮滅を防ぐことを目的として発掘調査が計画された(注5)。

発掘調査は真島氏が経費を負担し、長岡市立科学博物館の中村孝三郎氏らによって行われた(注6)。調査は畑の休閑期を待って、1956年12月10日から14日の5日間行われた。発掘調査写真を見ると白く雪が積もっており、故関雅之氏によれば季節風も強く、とても寒かったらしい。発掘調査には真島氏・中村氏のほか、寺村氏・関氏、地質調査担当として津田禾粒氏らが参加した。

発掘調査面積は、2×2mの調査区で14か所、面積56㎡であった。報告された調査区の図面によれば、1～11・13区は2×2m、12区のみが2×4mとなっている。「2×10mの第1溝を東西に切り」(1～5区)、「その西北(東北)に接して6×4mの第2溝を設定」(6・7・10～12区)された。

基本層序は、上から、表土層約15cm、黒褐色の腐植砂層約60cm(遺物包含層)、褐色の純砂層(無遺物層)であった。「腐植砂層は砂丘頂部に厚く、中腹より末端にかけて漸次薄くなり、丘裾部では全くみられな」〔寺村1960〕かった。

当時の写真を見ると、まだ小高く砂丘列が残っていたことがわかる。砂丘北東端で水田面との標高差約3mの小高いところが遺跡の中心であった。発掘調査によって平箱11箱の土器片や石の剥片、全体が復元できる土器12点が出土した。

遺跡及び周辺では、1956年以降の開発等で砂丘上にある遺跡中心部は削られ、建物や資材置き場ができ、遺跡東側には国道116号が通ったために、現在では旧状を殆ど留めていない。六地山遺跡や周辺では、これまでに10回以上の試掘確認調査が行われており、砂丘上は削平され旧地形を保っていないが、部分的に遺物包含層が遺存している箇所も確認されている。

1982年の遺跡分布調査では、発掘調査が行われた遺跡北東から南西方向に長さ約950mの範囲に遺跡が広がっていることが確認されている〔甘粕・小野ほか1986〕。また、遺跡が立地する砂丘列は、もともとは北東側で標高が高く、砂丘列の幅も160m程と広がったが、南西に行くに

つれ低くなり、幅も10m程に狭くなっていたことや、ボーリング調査や確認調査の成果により、西側や北側の水田面下から埋没した砂丘や弥生時代後期の遺物包含層である黒褐色砂層が良好な状態で遺存していることが判明している。また、水田部分では3～4mの深度まで遺物包含層が確認されているが、さらに深い場所まで広がる可能性が指摘されている。六地山遺跡からはこれまでの調査で弥生時代後期を中心として、奈良・平安時代、中世の遺物も出土している。また、1956年の遺跡発掘調査は、新潟市域で最初に行われた事例としても特筆される。

### (3) 1956年発掘調査出土の弥生土器

(図6～16、表1～3)

再整理では接合作業と併行して、遺物の注記を基に調査区別の集計を行った(表1)。注記の「R」は六地山、Rに続く数字は調査区、「S」は1～3までしかないので層位と判断した。1が表土層、褐色の純砂層は無遺物層なので、2・3は「腐植砂層を上下二層に分け」た〔寺村1960〕とする記述に対応するものであろう。裾部にあたるR4・R5にS3がみられないこともセクション図と対応する。また、R10にしかない「no」は番号を付けて個別に取り上げたもの、「マ」は真島、「表」は表採であろう。

この集計作業によって気づいた点を簡単に記しておく(表1)。土器小計をみるとわかるように、1・2・13区で多く、これらの調査区の1・2層からは土師器や中世のかわらけも多く出土しており、報告に書かれているように既にかかなりの攪乱が進んでいたものと推察される。表採点数が多いこともそのことを裏付けている。「縄文のある土器は下層に多いが、刷毛目の土器と混在していたことが注目された。」「〔寺村1960〕とする傾向は集計結果からはうかがえなかった。しかし、報告に記載があり図示されている剥片が10区に集中する点は集計からも確認された。R10S3から74点と最も多く出土しており、黒褐色砂層(S3)はそれ程攪乱を受けていないように見受けられる。

弥生土器のほかに石器や剥片、古代の須恵器・土師器や中世の遺物、鉄器・鉄滓等も多数出土している。156点もの剥片や7点の石鏝・管玉があったが時間的な制約から図化しなかった。また、「六地山遺跡の発掘では、中層から原形不鮮明な鉄滓片が十数点検出されている。この地点は土器包含の原層序に攪乱がなく、残滓鉄片は後期弥生式土器に附随したものとみられる。」「〔中村1966〕とされる鉄器?もあったが、同様に実測をしていない(図25)。これまで、新潟県内の弥生時代鉄器集成リストに入れられることのない資料なので、もし記述のとおり弥生時代の鉄器とすれば重要であり、今後精査が必要であ



表1 調査区別の遺物集計表

調査区	弥生時代					石鏡	弥生時代				古代				中世			古代か中世		時代不明	
	ハケメ等	縄文	柳描	その他	土器小計		剥片	管玉 未成品	勾玉	須恵	土師	珠洲	かわらけ	瀬戸	中世陶器	砥石	鉄滓等	礫	軽石		
R 1 S 1	131	11	2		144		1		2	20	2	8									
R 1 S 2	442	96	1	5	544		5			33		15						4	7		
R 1 S 3	99	20			119		1				1							2			
R 2 S 1	161	24			185		3		2	104		19						1	2		
R 2 S 2	267	52			319		3		1	25		8						2	2		
R 2 S 3	88	22			110				1	4								1			
R 3	69	7	1		77				1									4			
R 3 S 2	133	54			187		1		1	1								5	1		
R 3 S 3	4				4													1			
R 3・4 S2かS3	21	2			23																
R 3・4 S 2	13	7			20																
R 3・4 S 3	23	4			27					1											
R 4 S 1	51	9			60														4		
R 4 S 2	105	30			135					1											
R 5 S 1	44	8			52		1											1	2		
R 5 S 2		1			1																
R 8 S 1	71	9			80		1		1	3		3						1	4		
R 9 S 1	33	1	1		35														1		
R8S1かR9S1	30	2			32					1											
R 10 S 1	117	37		1	155		9			1		3						1	6		
R 10 S 2	132	19			151		19			1									3		
R 10 S 2no2	3	1			4		2														
R 10 S 2no3	31	1			32		1														
R 10 S 2n3	2				2		1														
R 10 S 3	31	4	1		36		74			1								3	3		
R 10 S 3n3	1				1																
R 10 下 no1	28	1			29																
R 10 下 n1	15	1			16		6														
R 10 下 no2	15	23			38		1														
R 10 下 n2	13	1			14		7														
R 11 S 1	109	26			135		8		9	6				1				1	4		
R 11 S 2	99	34			133		3			2									2		
R 11 S 3	1				1																
R 12 S 1	16	2			18		1		8	11		4						1			
R 12 S 2	87	19			106		1		1			8						1	4		
R 12 S 3	8				8																
R 13	269	68	1		338		4		3	7									15		
表探 六地山	551	63			614		3		28	32	2	3	1	12	1			4	28		
マ	4	5	1		10																
注記なし	55	28	2		85		1		1	1								5	3		
合計	3,372	692	10	6	4,080	1	156	1	1	59	254	5	71	1	13	1		25	97		

表2 東北系土器と北陸系土器の点数

系統		点数
東北系	口縁部	84
	底部	12
	体部	596
	合計	692
器種	甕	67
	壺	3
	その他	3
縄文種類	縄文	457
	無節R	179
	無節R	3
	附加条1種 +L	1
	附加条1種 +R	8
	附加条2種 +L	0
	附加条2種 +R	18
捺系文	絡条体L	13
	絡条体R	9
系統		点数
北陸系	口縁部	238
	底部	71
	体部	3,063
	合計	3,372
器種	甕	201
	壺	20
	高杯	12
	器台	7
	鉢	15

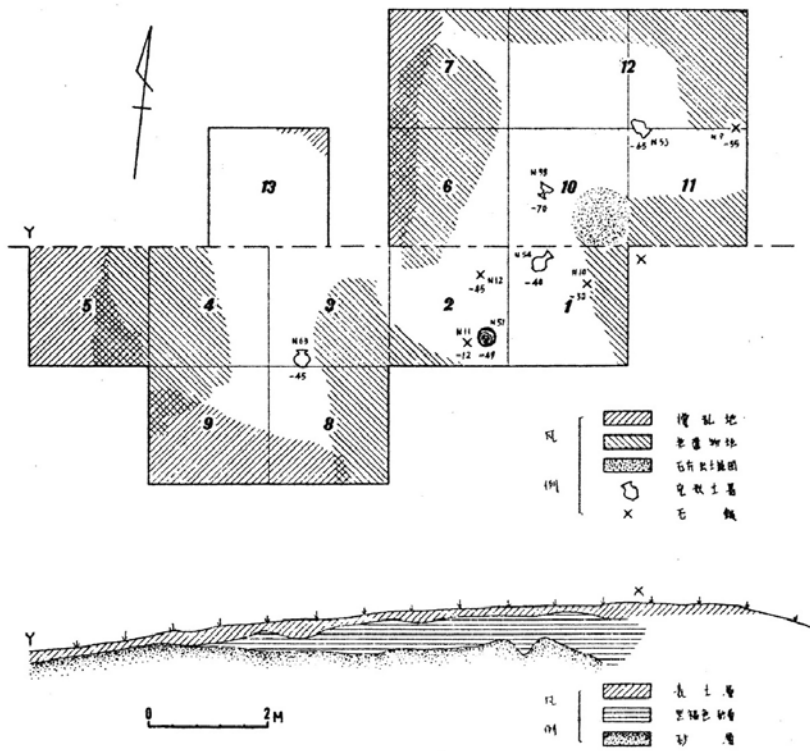


図4 六地山遺跡調査区設定図 (寺村1960に拠る)





7 : No.1口縁部、8 : No.3とNo.296、10 : No.147か？

図5 1956年発掘調査写真（1～9：長岡市立科学博物館提供、10・11：関雅之氏提供）

ろう。ここでは、実測作業を行った弥生土器に限って報告することとした。『新潟市史 資料編1 原始古代中世』[1994]との対応は表3に示した。

**弥生土器の概要** 図版は、A東北系列、B折衷系列、Cその他系列、D北陸系列の順で報告し、前2者は器形のわかるものを先に図示した。各系列の詳細は後述する。

まず、弥生土器全体の量比をみておこう。集計作業時点ではA・B・C・Dの区分を明確にしていなかったので細別は明らかではないが、縄文が施文される土器（A東北系列）692点、ハケメ・ナデ・ミガキ等で縄文のない土器（D北陸系列+B折衷系列+Cその他の系列）3,372点で、両者の比率は17%：83%となる（表2）。北陸系が多く、東北系土器が少ないという結果は、天王山式系土器分布の外殻圏としての地理的特徴を示していると言えよう。

古津八幡山遺跡では出土点数が膨大なため、破片1点ずつの集計を行っていないものの、報告遺物ではA群北陸系36%、B群東北系46%、C群在地折衷系18%の比率であったが、これは東北系土器を多めに図化報告したから、実態としては約40%：40%：20%と推定している〔渡邊2001〕。古津八幡山遺跡は4期ないし5期に細分される長期に継続する遺跡なので一概には比較できないが、概ね東北系40%：北陸系+折衷系60%となるから、六地山遺跡と古津八幡山遺跡の系統別の比率は大きく異なる。六地山遺跡に比べ古津八幡山遺跡では東北系土器の比率が高いと言える（注7）。

また、A東北系列の縄文原体を1段目のLとR（以下、山内清男氏の表記に従って㊦・㊧とする〔山内1979〕）で集計すると㊦が471点、㊧が217点で、比率では68%：32%となる。古津八幡山遺跡では㊦と㊧の比率は30%：70%なので、両者の比率は逆転していると言える。

遺物報告番号の下に併記した記号は土器に記された注記である。複数破片が接合する個体は大破片、破片数の多い順に記した。なお、完形土器は底部に書かれた注記が摩滅して判読できなくなったものが多いが、図面・写真から147が11・12区間、280が1区、296が10区と推察される。296は3と共に出土したと記録されており〔寺村1960〕、出土状況の写真も残されている（図5）。

**A東北系列（図6-1～図10-140）**

全体の器形のわかるものを先に図示し、さらにヘラ描沈線文を持つもの、持たないもの、さらにそれぞれ1段L（㊦）、1段R（㊧）、地文のないもの（無地文）の順で図示している。

**器形** 器種は甕が主体で壺（3・5など）もある。甕と壺の区分は曖昧で、4・143・147などは広口壺として括ることができる。脚部が1点ある（138）。また、赤彩さ

表3 新潟市史対応表

報告番号	市史		報告番号	市史		報告番号	市史	
	図版	番号		図版	番号		図版	番号
1	40	159	111	38	115	221	35	15
2	40	157・158	112	39	139	222	36	28
3	40	168	113	39	143	223	35	8
4	40	156	114			224		
5	40	181	115			225	35	12
6	40	163	116	41	189	226	36	31
7	40	162	117			227	36	27
8	40	165	118			228	36	26
9			119			229	37	69
10	40	167	120			230		
11	41	192	121	39	127	231	35	11
12	39	135	122	39	126	232	37	72
13	40	160	123	36	38	233	36	29
14			124			234	36	30
15	41	193	125			235	37	76
16	40	161	126			236	35	13
17			127			237	35	14
18	40	164	128	39	155	238	36	25
19	39	131	129			239	35	23
20	41	191	130			240		
21	39	130	131			241	35	22
22	39	140	132	39	151	242	36	37
23	39	137	133			243	35	7
24	40	179	134			244	36	33
25	40	180	135			245	36	32
26	40	166	136			246		
27	40	177	137	39	150	247		
28	40	174	138	41	204	248	35	21
29			139	41	198	249		
30			140	41	197	250	35	20
31	40	173	141	255	11	251		
32	40	178	142	36	46	252	35	19
33	40	171	143	37	80	253		
34	40	170	144	35	6	254	35	24
35	41	195	145	35	5	255		
36			146	36	34	256		
37	40	169	147	37	70	257		
38	40	172	148	39	142	258		
39	40	175	149	39	141	259		
40			150			260	36	39
41			151	37	79	261		
42			152			262		
43			153			263		
44			154	36	36	264		
45	40	182	155			265	36	47
46	40	183	156			266	36	51
47	38	123	157			267	36	57
48	38	122	158	36	41	268	36	48
49	38	120	159	40	188	269	36	52
50	39	136	160			270	36	49
51	39	138	161			271	36	50
52			162			272	36	55
53			163			273	36	54
54	39	128	164			274	37	75
55			165			275		
56			166			276		
57			167	36	45	277		
58			168			278	37	74
59			169			279	37	66
60	38	118	170			280	37	68
61			171			281	37	78
62			172			282		
63			173			283		
64			174	38	109	284		
65	41	190	175	36	42	285		
66	39	134	176	36	43	286		
67	39	129	177	36	40	287		
68			178	36	44	288		
69	39	133	179			289	37	77
70	39	124	180			290	36	58
71			181			291	37	82
72			182	40	187	292	38	101
73			183	36	64	293	36	35
74			184	36	62	294		
75	38	117	185	36	60	295	38	98・99
76	39	132	186	36	59	296	38	102
77	39	125	187			297	38	100
78			188			298		
79			189	36	65	299		
80	39	147・149	190	36	63	300		
81	39	146	191	40	184	301	38	105
82	39	148	192	36	61	302	37	73
83			193	41	196	303	37	81
84			194	40	185	304	37	71
85	39	154	195	40	186	305	38	104
86			196			306	38	111
87			197			307	38	108
88			198			308		
89			199			309	38	106
90	39	145	200			310	38	110
91			201	40	176	311	38	107
92	39	152	202			312	37	95
93			203			313	37	96
94			204	41	194	314	37	86
95			205			315	37	92
96			206	35	4	316	37	84
97			207	35	1・2	317	37	93
98	39	153	208	35	9	318		
99			209	35	3	319	37	88
100			210			320	37	91
101			211	35	10	321	37	89
102	41	201	212			322	37	90
103	41	200	213	36	53	323	37	87
104	38	113	214			324	37	85
105			215	35	17	325	37	94
106			216			326	41	203
107	38	121	217			327		
108			218	38	103	328	37	97
109	38	112	219			329	37	83
110	38	114・116	220	35	18			

V 研究活動—資料紹介—  
研究ノートなど—



れた壺が1点あるが少ない(11)。口縁部は、天王山式土器の特徴とされる内湾したり(4)、肥厚したりするもの(1・2)もあるが明確ではなく、くの字状の頸部から肥厚せずに伸びる甕が多い(47・48、104～107・109)。これらの例は北陸系との折衷土器とする見解もあろうが中期的な器形とみることもできる。110・111は両者の中間的な例。沈線文様のない粗製土器には口縁部と頸部との境が屈曲したり、明瞭な段を設けたりするものも多い。

**文様帯・文様** 従来から指摘されているように、刺突列や指頭押圧はあるが(10・11・19・20～23)、天王山式土器の特徴である交互刺突文は1点もない。沈線文様のある個体そのものも少なく、縄文のみのいわゆる粗製土器が多い。1以外には明確な磨消縄文はない。これらの諸要素が、狭義の天王山式(天王山遺跡天王山式)よりも新しい根拠とされてきたのである。

天王山式土器の文様帯は鈴木正博氏によってⅠ・Ⅱa・Ⅱ・Ⅲ文様帯からなるとされている〔鈴木1976〕。狭義の天王山式に属さない本遺跡の土器群をこの文様帯で説明するのは本来的には適さないのだが、別の名称で説明すると煩雑になるので、便宜的にこの文様帯に従って説明しよう。

口縁部Ⅰ文様帯には上向きの弧線文(10・13・15・16・24)、鋸歯文(2・7・14・26・76・77・132・133～138)がある。15は上向きだけではなく下向きの連弧文も入れる(注8)。1は文様帯下端が下向き連弧状になるもので、交点に棒状施文具で刺突を入れている。天王山式土器の特徴の一つとされる口縁部に突起が付くものや、波状口縁になる例はあるが少ない(2・4・5・10・26・65)。日本海側で多い口縁部の縦の刻み目はなく、端部に方向を変えて入れられる「ハ」の字状の刻み目列は2にその可能性があるだけである。内面施文には、刺突列と平行沈線が併用されるもの(13)、刺突列(15)、縄文施文(48・65・69・109・110・117・122)がある。

ヘラ描沈線文を入れる個体数が少なく、Ⅱ・Ⅱa文様帯の構図は明確ではない。間延びした連弧文(27・28)はあるが、重菱形文は1点もない。なお、頸部Ⅱa文様帯を無文とする例は多い。

体部Ⅲ文様帯上端には鋸歯文(2)、上向きの連弧文(3～5)がある。天王山式に一般的な下向き連弧文(34・37)はあるが少ない。先端の広い浅い沈線による2条・3条の上向き連弧文が定量あるのが本遺跡の特徴である。

**施文法** 縄文は㊦と㊧があるが、前述したように両者の比率は7:3で㊦が多い。細い原体よりは、太い単節の原体が多い。RL原体は斜位押圧により条が縦走する例が定量ある(1・47・66・80・81・91)。LRは原則とし

て横位押圧による斜縄文で、横走縄文は希少(37)。撚糸文(単軸絡条体第1類)はL(76・77・93～95)、R(2・20・118・131～138)と判断したが、93～95は細い原体RLの縦走縄文、131・132は附加条第1種かもしれない。23も附加条第1種で軸縄にRを一本絡げたもの。附加条第2種が3点あり、何れもLRにRを絡げている(48・107・108)(注9)。

縄文原体の側面押圧がみられる(1・4)。1はRL縄文を肥厚させた口縁部Ⅰ文様帯の下端に沿って弧状に押圧し、頸部Ⅱ文様帯上端に1条、下端に2条押圧する。4は口縁端部と文様帯の区画にLR縄文の側面押圧を入れ、Ⅱa・Ⅱ・Ⅲ文様帯を区画する。なお、同一個体に㊦と㊧を併用するものはみられない。

Ⅱa文様帯直下、Ⅲ文様帯上端(石川は「Ⅲa」文様帯とする〔石川2001〕)はRL原体を斜位押圧することにより条が横走する例(1・47・80～82・85・86)が、斜走する例(84・87～89)よりも多いのが特徴(注10)。横走縄文は底部下端にもみられる(100～103)。また、この一群のⅢ文様帯はRLの斜位押圧により条が縦走するのが一般的だが(47・80・81・91・92)、太い縄文は带状にならず(47・85)、細い縄文(81・91・92)が带状になるようだ。斜位押圧は㊦原体にはみられない施文法であり、Ⅲ文様帯上端や底部下端以外では縄文が羽状になることはない。太い縄文が用いられたからか、粘土の乾燥が進まないタイミングで施文されたからか、縄文が深くしつかりと付いている個体が目立つように思われる。後に触れるが、これらの一群は山内清男氏が指摘しているように〔山内1964・1979〕、本遺跡の東北系列の系統を考える上で極めて重要な要素である。

一方で㊦原体にしかないものとして無節縄文(38・104～106・109・114)と附加条第2種(48・107・108)がある。縄文とハケメが併用される例もみられる(31・75・88・96・98・128)。80はハケメというよりも条痕に近い施文具で頸部に縦ハケを入れるが、頸部の縦ハケは確認調査資料の図22-1・図23-1にも特徴的にみられる。

沈線文は太く深いもの他に、浅くて2本単位かと思われる例が目立つ(4・13・16・24・25・46)。2・3は3本同時ではないが3本の沈線を引く。

①ヘラ描沈線文のある一群(1～46) 1はRL、2はR撚糸文、3・4はLR、5は無地文である。地文は、口縁部は㊦(6～14・19)・㊧(15～18・20～23)・無地文(24～26)、体部は㊦(27～35)、㊧(36～39)、無地文(40～46)である。16・24・25・48は2本描沈線文。10・11・12・19～23はⅠ文様帯下端に刺突列を入れる。器種には壺・甕があるが、壺が主体となる。



代表的なものだけに説明を加えよう。

1は口径約30cmの大形の甕。本遺跡ではほぼ全形がわかる唯一の精製土器である。肥厚したI文様帯は下端部を下向きの連弧状とし、全面にRL横走縄文を施文後、下端部には形状に併せて連弧状に側面押圧1条を入れる。そして下端頂部には棒状施文具で下から上へ刺突を入れる。頸部II a文様帯は縦走縄文を施文後、I文様帯肥厚部直下(II a文様帯上端)に連弧状の側面押圧を1条、さらに文様帯下端に2条の側面押圧を入れる。II文様帯は浅い沈線で双頭渦文と台形文に由来する文様(仮称円台形連結文)を入れ、縄文が充填される。復元された部分が多いが、6単位に復元されている。その下には2条の平行沈線を入れ、III文様帯は最上部のみ横走縄文、体部は帯状の縦走縄文となっている。原体はRLであるが1段の縄の太さが異なり、細・太2種類が用いられる。II文様帯に入れられた文様は、秋田県はりま館遺跡など(図26-46)、II a文様帯に重菱形文を入れる土器のII文様帯の様々な構図の一つとして入れられる円台形連結文に由来する。円台形連結文は、円形と台形が組み合わされた文様で砂山遺跡の壺形土器の肩部に入れられた構図(図26-7)なども同系統であるが、1の構図は円形と台形に上下に分離してできたものと考えられる。

2は肥厚したI文様帯、無文のII a文様帯、III文様帯からなる甕。地文に絡条体Rを斜位に施文する。I・III文様帯には3本の沈線で振幅の大・小の鋸歯文を入れる。口縁部には突起が付き、口縁端部にはキザミを入れる。

3はLR地文のIII文様帯に3本の上向き連弧文を入れる壺。連弧文の施文方向は左から右、施文順位は右から左。その上に2条の平行沈線を入れるが、II文様帯に沈線文様を持たない。体部下半はヘラナデ。

4は3・5と同じ文様帯構成を持つ甕もしくは広口壺。やや内湾する口縁部に4か所の突起を持つが、1か所のみ山形、他の3か所は山形の頂部を刻む。I文様帯下端、II a・II・III文様帯間にはLR側面押圧を入れる。III文様帯上端には先端が2本(上が広く、下が狭い)になった施文具で上向き連弧文を入れ、その下にはLRの斜縄文を施文する。

5は無地文でIII文様帯に先端の平たい施文具で上向き連弧文を入れる壺。3に似る器形で、文様帯間を2条の沈線で画する。

3~5はヘラ描沈線文を持つとは言え、II a文様帯を無文とし、III文様帯上端に上向き連弧文を入れるだけの半精製土器とでも言うべき例。3・5は壺、4も同じ文様帯構成なので甕とするよりは広口壺とするべきであろう。なお、35は小形壺である。

②沈線文様のない一群(47~140) 前述したように㊦・㊧の順で図示した。㊦(47・49~103)、㊧(48・104~140)である。単節縄文以外では、76・77・93~95が絡条体L、104~106・109が無節R、48・107・108がLR+R附加条第2種、118・132~138が絡条体Rである。109はLRとRを併用している。器種には甕・壺があり、台部が1点ある。60・80・81や90など頸部がすぼまるものは壺になろう。66~68は広口壺の口縁部であろう。

甕・広口壺の口縁部は無段・有段のものがあり、その順で図示した。口縁部を有段としない無段の例が多いのも本遺跡の特徴と言える。㊦は無段(47・49~64)、有段(65~79)、㊧は無段(48・104~111・114)、有段(112・113・115~123)である。口縁部が内湾するものは有段のものが多く、伸長するものは無段のものが多く。平口縁が一般的だが、小波状となる例(50)もある。頸部は原則として無文であるが、無文としない48は口縁部と体部で施文方向を変えている。口縁部内面にも縄文を施文するのは48・65・69・109・110・122である。

47・48は縄文原体は異なるが、口縁端部を強くなでて平坦にし、内側につまみ出す点が酷似する。109も口頸部を横方向にナデ、口縁端部をやや厚くしている。RLのみIII文様帯上端(III a文様帯)に横位もしくは斜縄文を施文する例があることは前述した。また、口縁部I文様帯に縄文を縦走させる例はRLに限られる(47・59・66)。

#### B折衷系列(図10-141~図11-182)

口縁部の横ナデが不明瞭なもの、北陸系の器形でありながら、縄文を施文する例(148~150)を本群とした。器種には甕・壺がある。

縄文施文土器以外の器面調整はハケメかナデが基本。141・142は口縁部内外面を横ハケで調整する例。143・147・151は内湾する口縁部と筒状の頸部を有する広口壺。器面調整も細かいハケメ・ナデで共通している。143は肥厚有段口縁に、中央にキザミを入れた突起と片口が1か所ずつ残る。有段口縁下端には棒状施文具による刺突列を入れる。151は内湾肥厚する有段口縁端部と肩部にヘラキザミ(刺突列)を入れる。外面縦ハケ、内面は横ハケである。肩部のヘラキザミは甕には一般的だが、壺では稀。折衷土器故であろう。147は内湾する口縁部に筒状の頸部を持つ。口縁部の横ナデが不明瞭で、口縁部が平坦ではないこと、さらに143同様に筒状に直立する頸部を天王山式系の影響と考えた。

144~146は口縁部の横ナデが不明瞭で、口縁部に縦のキザミを入れたり、肩部に刺突列を入れたりする。肩部の刺突列は北陸系土器にも見られるが、口縁部に縦のキ

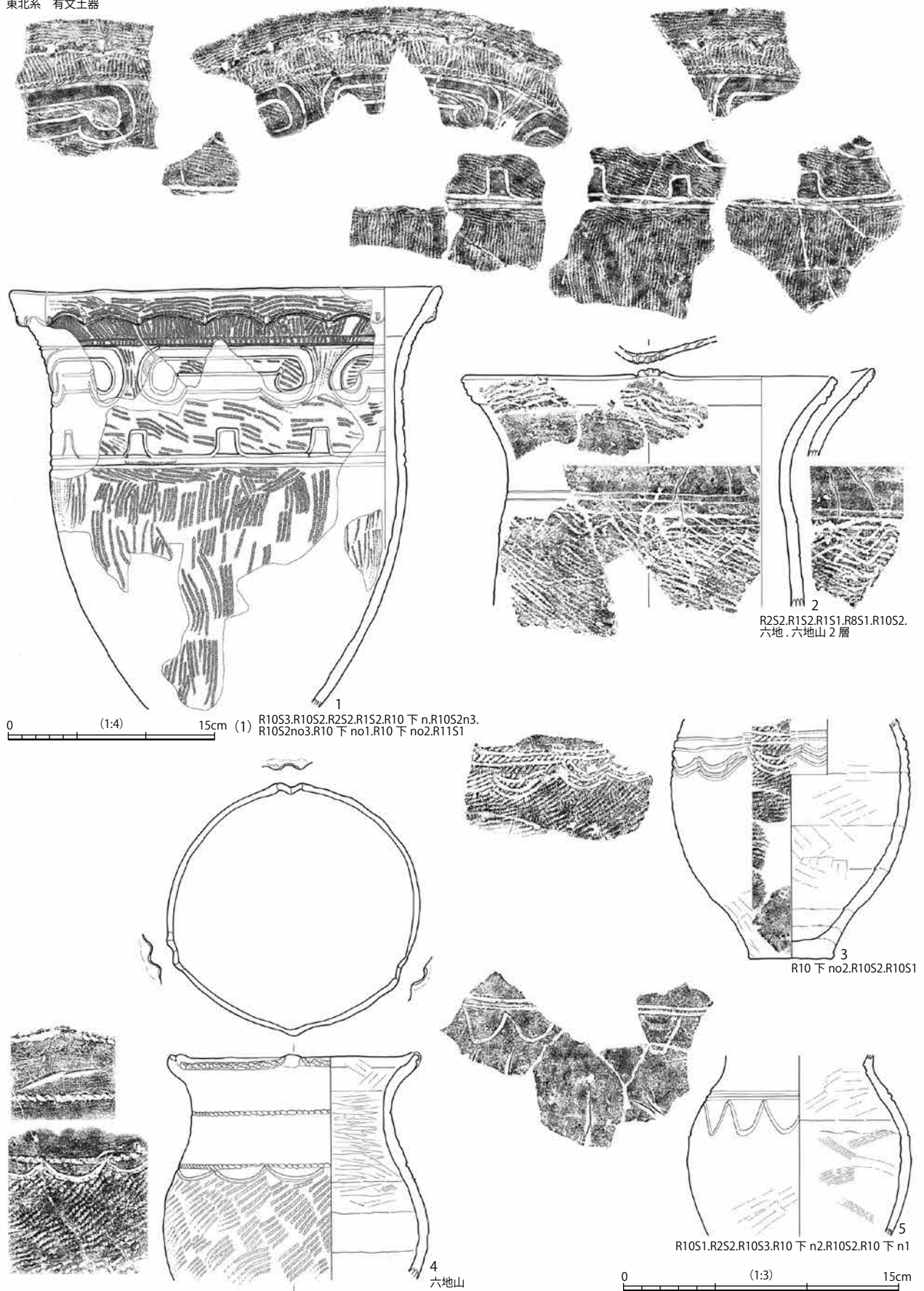
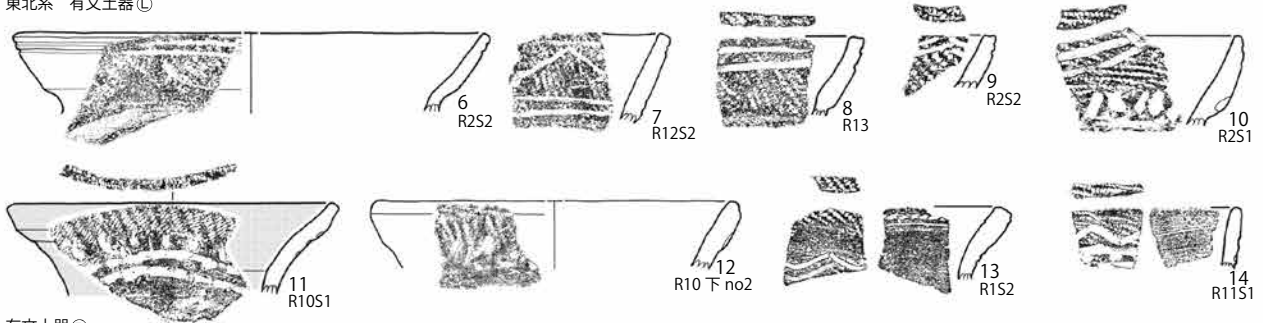


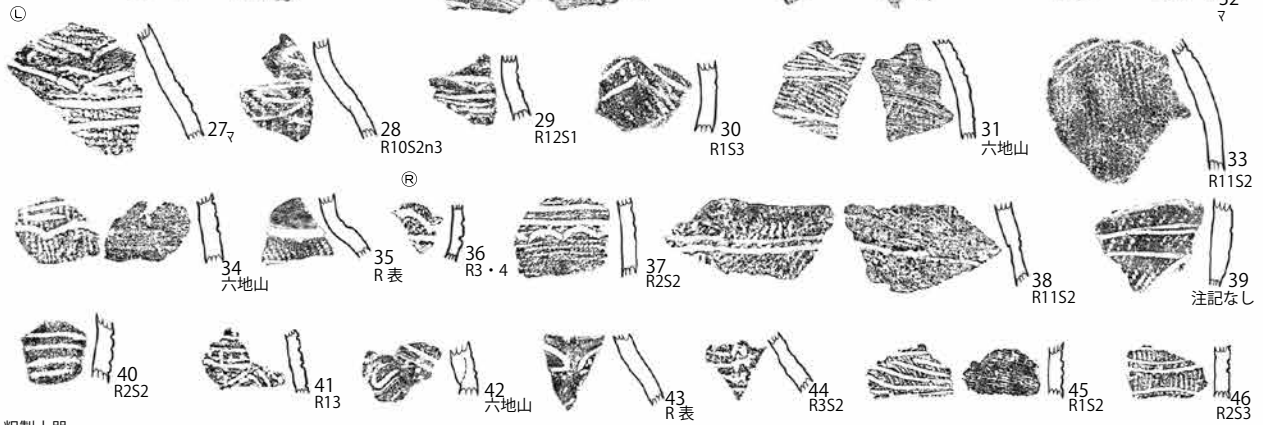
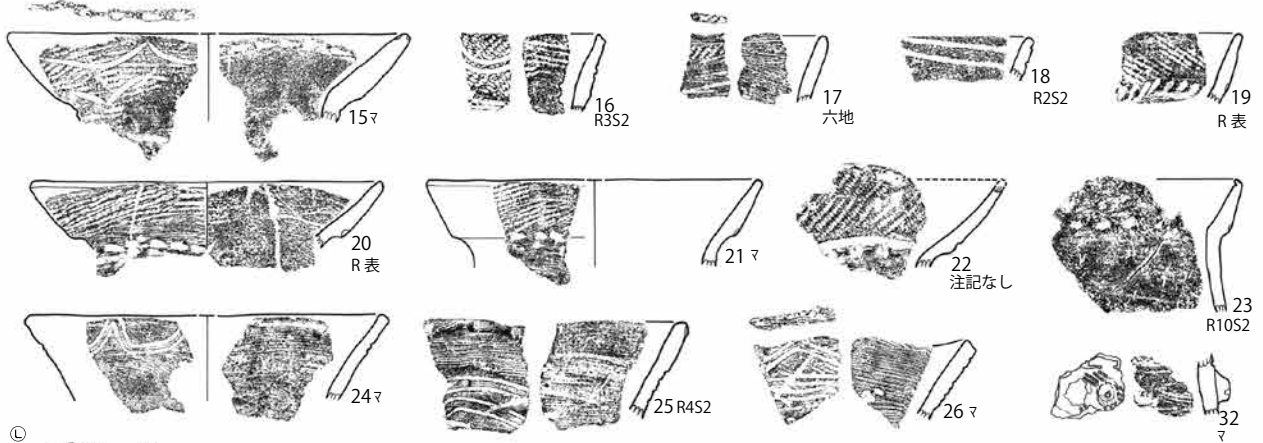
図6 六地山遺跡遺物実測図 (1956年発掘調査資料1)



東北系 有文土器 ㊟



有文土器 ㊟



粗製土器

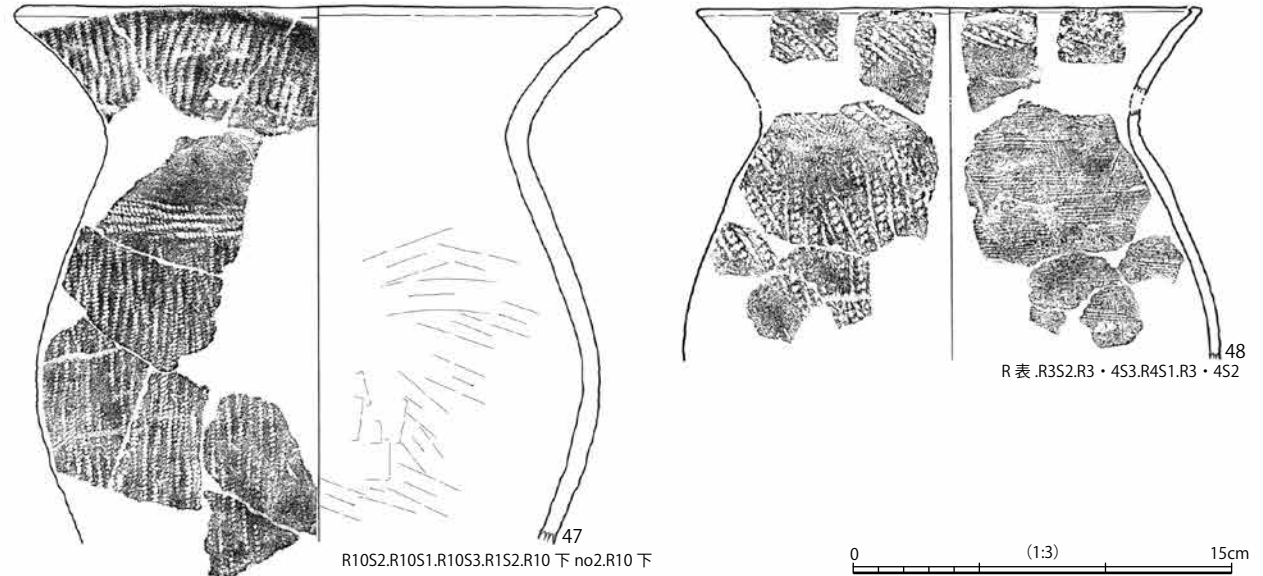


図7 六地山遺跡遺物実測図 (1956年発掘調査資料2)



東北系 粗製土器①

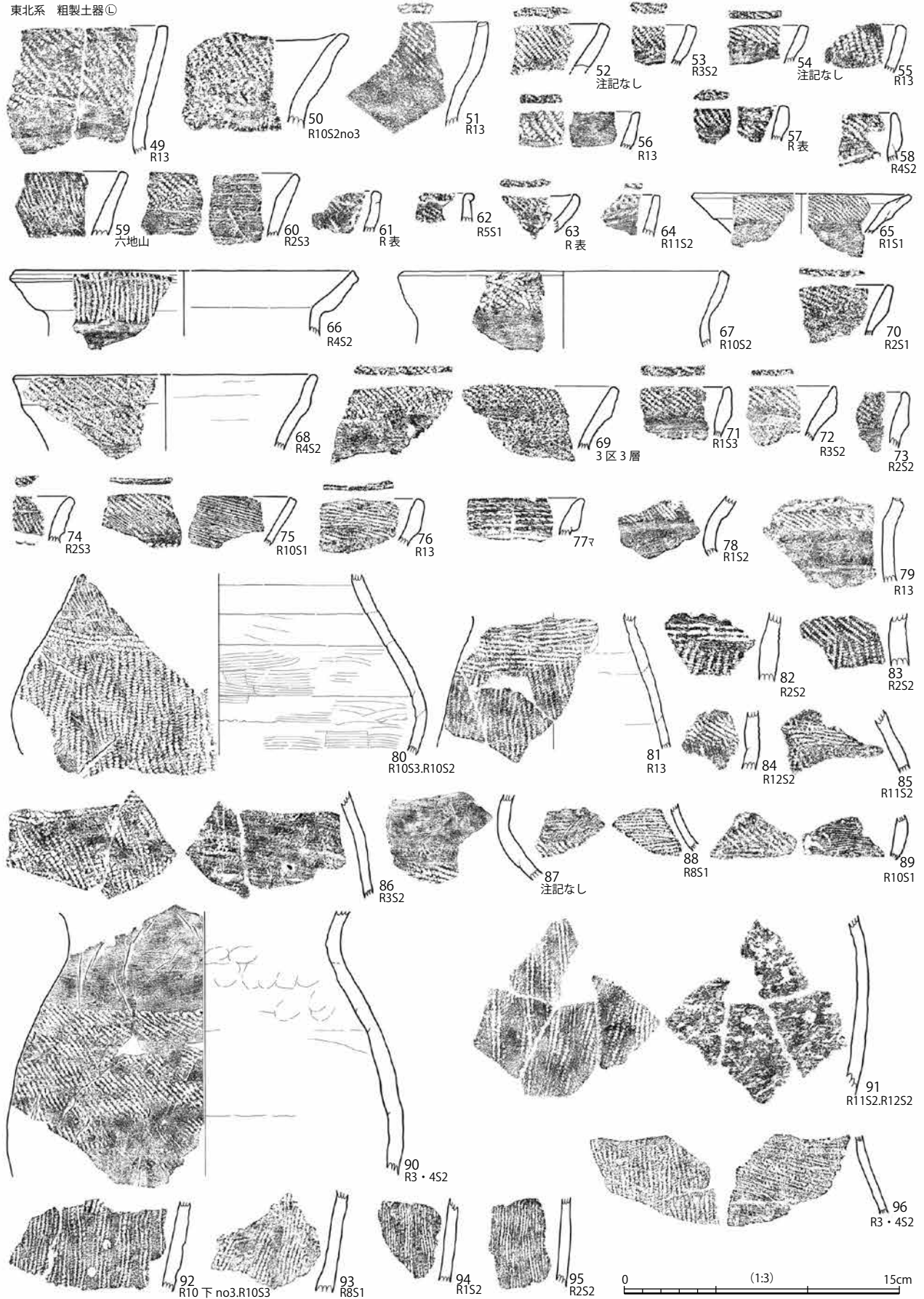
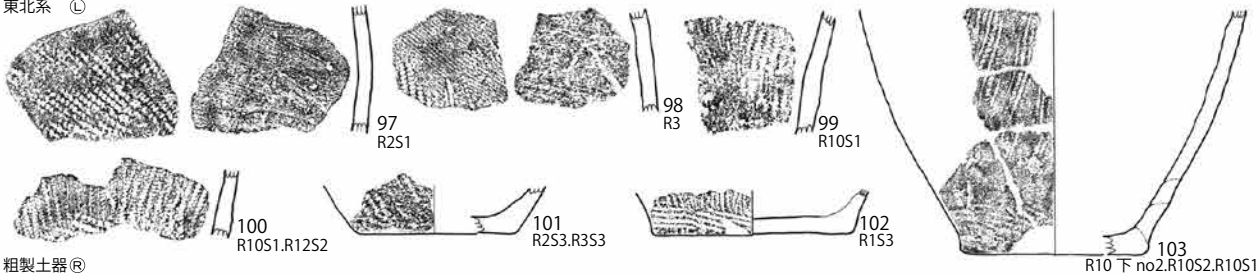


図8 六地山遺跡遺物実測図 (1956年発掘調査資料3)



東北系 ㊤



粗製土器 ㊤

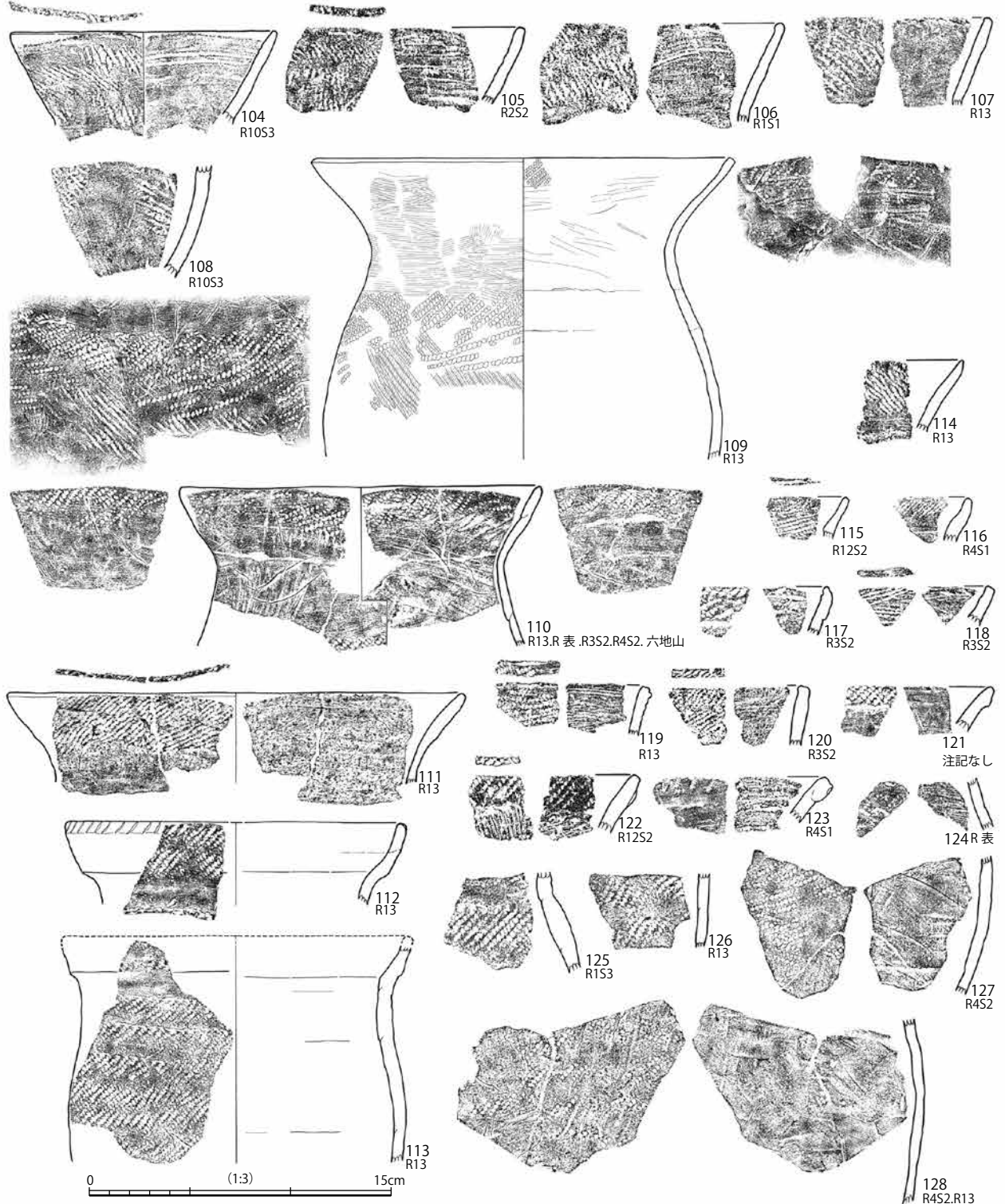
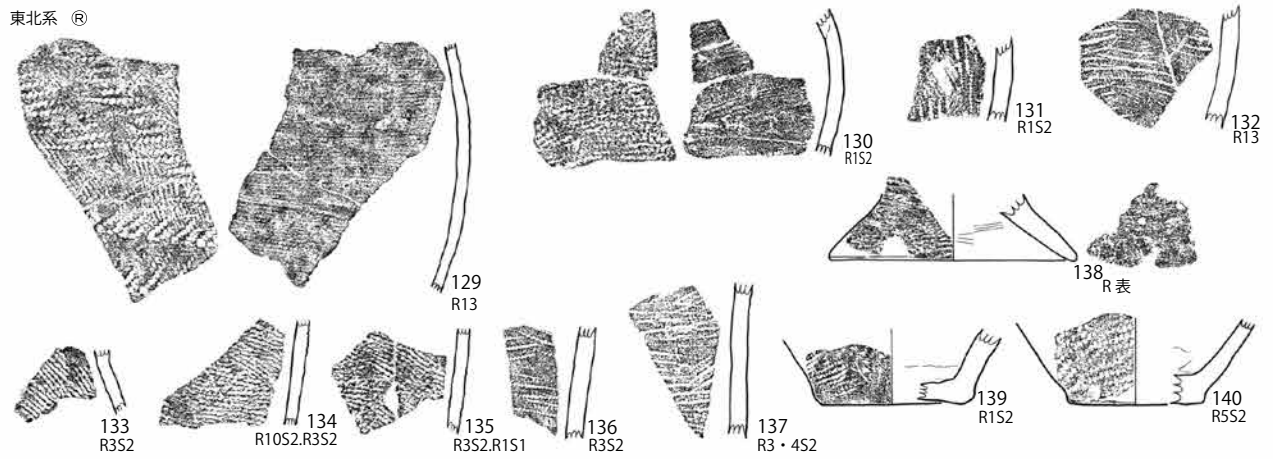


図9 六地山遺跡遺物実測図 (1956年発掘調査資料4)

東北系 ㊟



折衷系

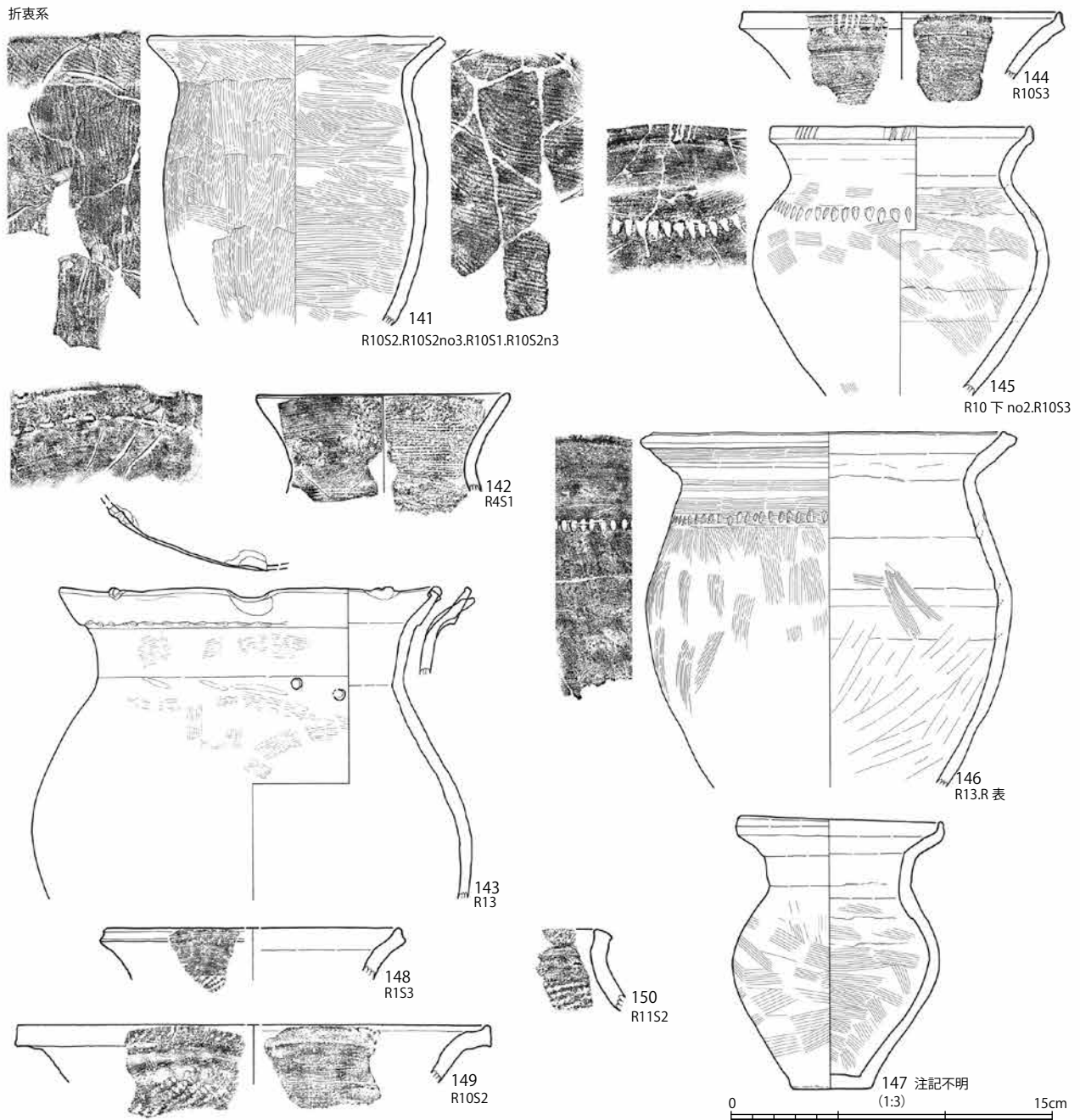


図10 六地山遺跡遺物実測図 (1956年発掘調査資料5)



折表系

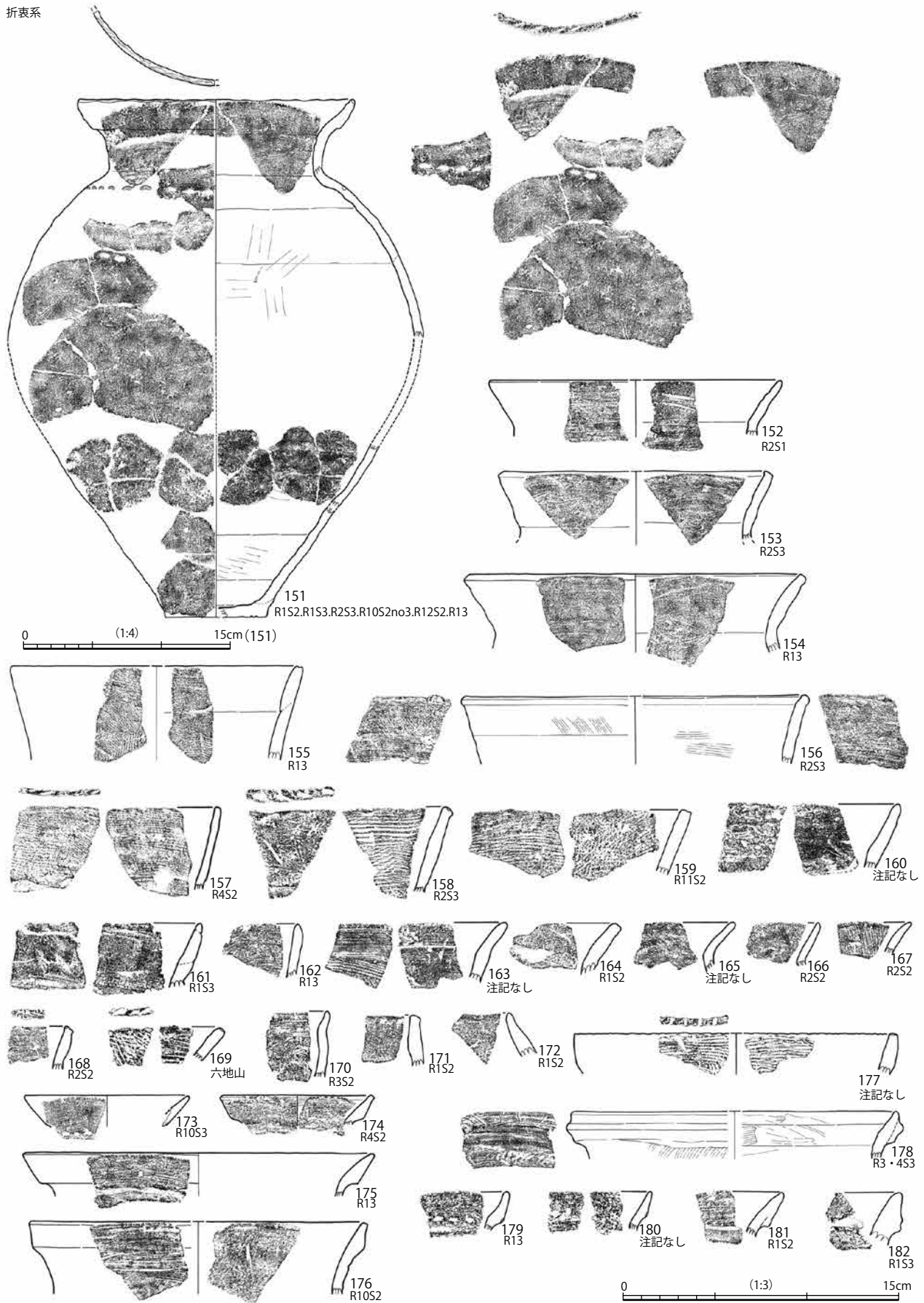


図11 六地山遺跡遺物実測図 (1956年発掘調査資料6)

V 研究活動—資料紹介—  
研究ノートなど—

ザミを部分的に入れる例はないことから折衷系列とした。144・145は口縁端部をつまみ上げ、口縁部形態は後述するD北陸系列①いわゆる付加状口縁甕の口縁部形態に類似するが、有段部に4・5本の鋭い施文具で縦のキザミを部分的に入れている。146は口縁端部を内傾させるもので、体部中位に最大径を持つ例。後述するD北陸系列⑤頸部がくの字状に括れる甕とした239と器形が類似する。口縁部の横ナデが不明確であること、器面調整から本群とした。

148～150は口縁端部がナデにより面を持ち、形状は後述するD北陸系列⑤頸部がくの字状に括れる甕とした例の口縁部形態に類似する。いずれも、LR斜縄文を施文し、148・149はハケメと併用される。

口縁部が無段で肥厚しないもの(152～172)。調整はハケメ・ナデなどで一定ではない。端部にキザミ・刺突を入れるもの(157・158・168・169)、面を持つもの(153～156・159・164)などがあるが、小破片が多い。

口縁部が有段で肥厚するもの(173～182)であるが、様々なものを含んでいる。173・174は小形の壺であろう。173・179は口縁部下端に刺突列を入れる。

#### C その他系列 (図12-183～205)

系統が不明確なものを一括した。

①ハケ・櫛状施文具で直線文・刺突列点文を入れるもの(183～186・189～192) 183は内外面に粗い横位のハケメを入れた後、頸部に刺突列と5条程度の直線文を入れる。甕か広口壺。184は5～6条の波状文、185・186は体部上半に波状文を入れたもの。185は4条の直線文と波状文を入れる。186は2本描波状文で櫛ではない、在地的なものか。189は刺突列点文、190は肩部に6条程の直線文と刺突列点文を入れる甕で、内面ナデ調整。近江系として良い例であろう。

②2本描施文具で直線文・鋸歯文を入れるもの(187・188) 図6-2に近いものであろう。

③同心円文を入れるもの(193) 壺体部上半に幅の狭い沈線で同心円文を入れる。体部上半に同心円文を2重ないし3重に描き、その上には同心円文に沿って下向きの連弧文を2条入れる。内面調整に指頭押圧などが観察されるので、最上部で直径10cm未満の壺であろう。

④先端が2つに割れた幅広の施文具で、刺突列点文・波状文を入れるもの(194～200) 195～200は同一個体で、器種は広口壺か甕と推察される。色調が違うので194は同一個体であると断定できないが、施文具はよく似ている。同一個体ならばもう少し肩が張るのかもしれない。

他系統

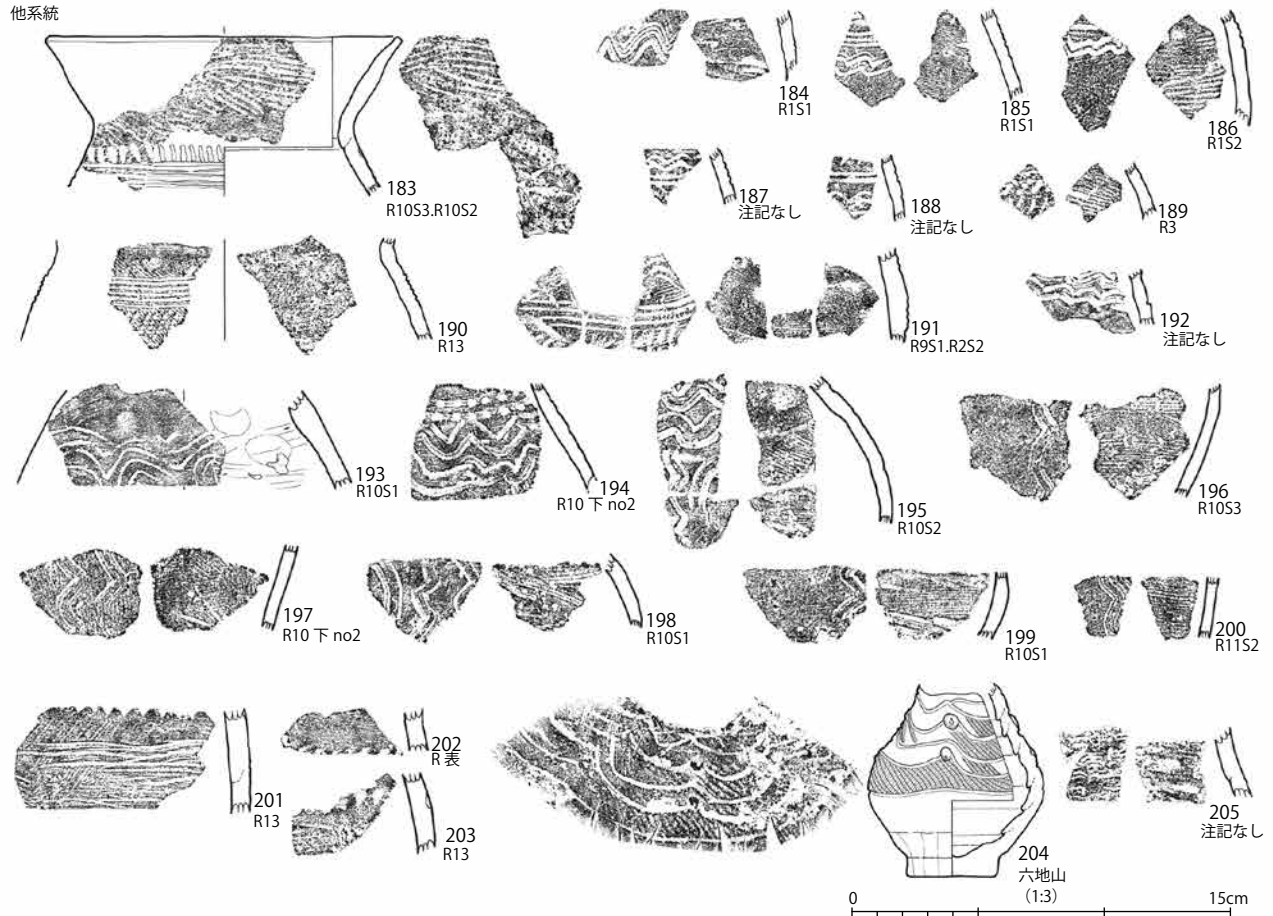


図12 六地山遺跡遺物実測図 (1956年発掘調査資料7)



194・195は肩部には横位に波状文、肩部以下には縦位に波状文を入れる。波状文は弧線状で、上向き・下向きの連弧文を交互に入れているようにもみえる。縦位の波状文も弧線文の組み合わせのようにみえる部分がある。194は最上部に同じ施文具2本で横位の刺突列を入れる肩部破片。197・200は直線的な破片で体部下半の破片である。垂下する波状文は鋸歯文とみれば、青森県大石平遺跡・石動遺跡・富山県下老子笹川遺跡など天王山式以前にみることができる。

⑤その他(201～203) 同一個体で201は横位の条線上に横位に刺突列を入れる。202は破片下端に横位の刺突列があるもの。

⑥小形壺(204) 頸部から上を欠損するが、その他は完形の現存高7cm程の小形壺。体部最大径に横位の沈線文を入れ、その上半を文様帯とし、体部下半は無文としている。文様は崩れた上向きの連弧状の沈線を4単位に、4条程入れ、連弧文の頂点2か所に刺突のある円形浮文を貼付する。文様帯部分には沈線施文後に、無節Rを横位に充填する。細頸壺になりそうな器形、上向き弧線文や刺突のある浮文などから推察すると、施文具は異なるが、油田Y期土器〔中村2011〕などに関係するものか。同様な小形土器は福島県和泉遺跡や能登遺跡にもみられるので当該期のものと考えられる。出土地区は不明。

⑦振幅の小さな多条の波状文を入れるもの(205) 箱清水式か。

#### D 北陸系列(図13-206～図16-329)

甕(206～273)、壺(274～291)、高杯・器台(292～311)、底部(312～329)がある。

本遺跡の甕は口縁部下端及び有段部にヘラ・ハケによるキザミ・刺突列を入れるものが多いことが特徴として指摘できる。

#### 甕(206～273)

①いわゆる付加状口縁甕(206～220・223) 206・207は口縁部が断面三角形で内傾し、擬凹線文・凹線文を入れる。共に再整理によって破片が接合し、口径の復元、体部内面の調整がわかるようになった。断面形態は207が208に比べシャープな作りになっている。207は体部内面を薄くケズリ調整するが、206は屈曲部まで、207はハケメの後にヘラケズリするが、屈曲部までは削らない。207は戸水B式、206は猫橋式に位置づけられる。208～211等も口縁部が断面三角形で内傾ないし直立する例。208・211・212は口縁部下端にヘラキザミを入れる。内面を削るものは206・207以外には少ない。B折衷系列とした144・145・148・149等の器形は近い。

②有段口縁甕(221・222・224～231) 有段部が無文のもの

のよりもヘラ状施文具のキザミや刺突列を入れる例が多い。キザミにも様々な種類があり、B折衷系列に入れるべきものもあるかもしれないが、区別がつかない。

③有段口縁擬凹線甕(232～234) 外傾するもの(232・233)、直立気味に立ち上がるものがある(234)。232・233は端部を丸くおさめる。234は小破片で端部は欠損するが比較的厚みがある。232は胎土が精良なので、壺か器台の可能性もある。本遺跡の有段口縁甕で口縁部が伸長するものは少ない。

④いわゆる近江系受口状甕(235～238) 235・236は形態が237に似るのでここに入れたが、頸部がすぼまるので壺とすべきかもしれない。238は端部に面を持ち有段部下端にはキザミを入れ、内面は体部下半を削る。

⑤頸部がくの字状に括れる甕(239～264) 端部をつまみ上げ、①付加状口縁甕との区別が曖昧なものも含む。口縁端部が面取りされるものは、内傾するもの(239～245)、直立するもの(252～254)、その中間的なもの(246～251)がある。口縁端部が丸く面取りされていないものもあるが(251・255～262)、口径が小さいものが多い。

265～273は肩部のヘラキザミがある例で、施文具には様々なものがみられる。239の器形はB折衷系列146に類似する。

#### 壺(274～291)

頸部がすぼまる器形を壺としたが、器形がわかるものが少ない。器形がわかるものとしては広口長頸壺(279・280)、広口短頸壺(278)がある。口縁部形態は有段口縁・無段口縁があるが、有段口縁が多い。278は内外面ミガキで赤彩された例。289は口縁有段部の内外面に櫛描波状文を入れ頸部に三角形突帯を付ける。櫛描波状文の原体は多条で細かい。281も頸部に突帯を付け、ヘラキザミを加える。290は肩部にヘラキザミを入れるが壺としては希少な例。B折衷系列とすべきかもしれない。291は有段二重口縁で内面にも段を持つ。器壁が厚く大形のもの。274～277は②有段口縁甕との分別が難しい。

#### 高杯・器台等(292～311)

口縁部が有段で外傾する高杯(292～300)。有段部が強く外傾し伸びるようなものはみられない。

296の小形高杯は全形がうかがえる唯一の例。器高6.3cmのミニチュア土器である。杯部は有段で直線的に立ち上がり、棒状脚に無段の裾部が付く。端部は一か所のみ縦のキザミが8条程度付けられ、杯部の屈曲部、脚端部にもヘラキザミを入れている。さらに、杯有段部以外には縦ハケを残す稀有な例。縦のキザミはB折衷系列とした甕144・145と同じ手法なので、B折衷系列に区分すべきかもしれない。



北陸系 甕

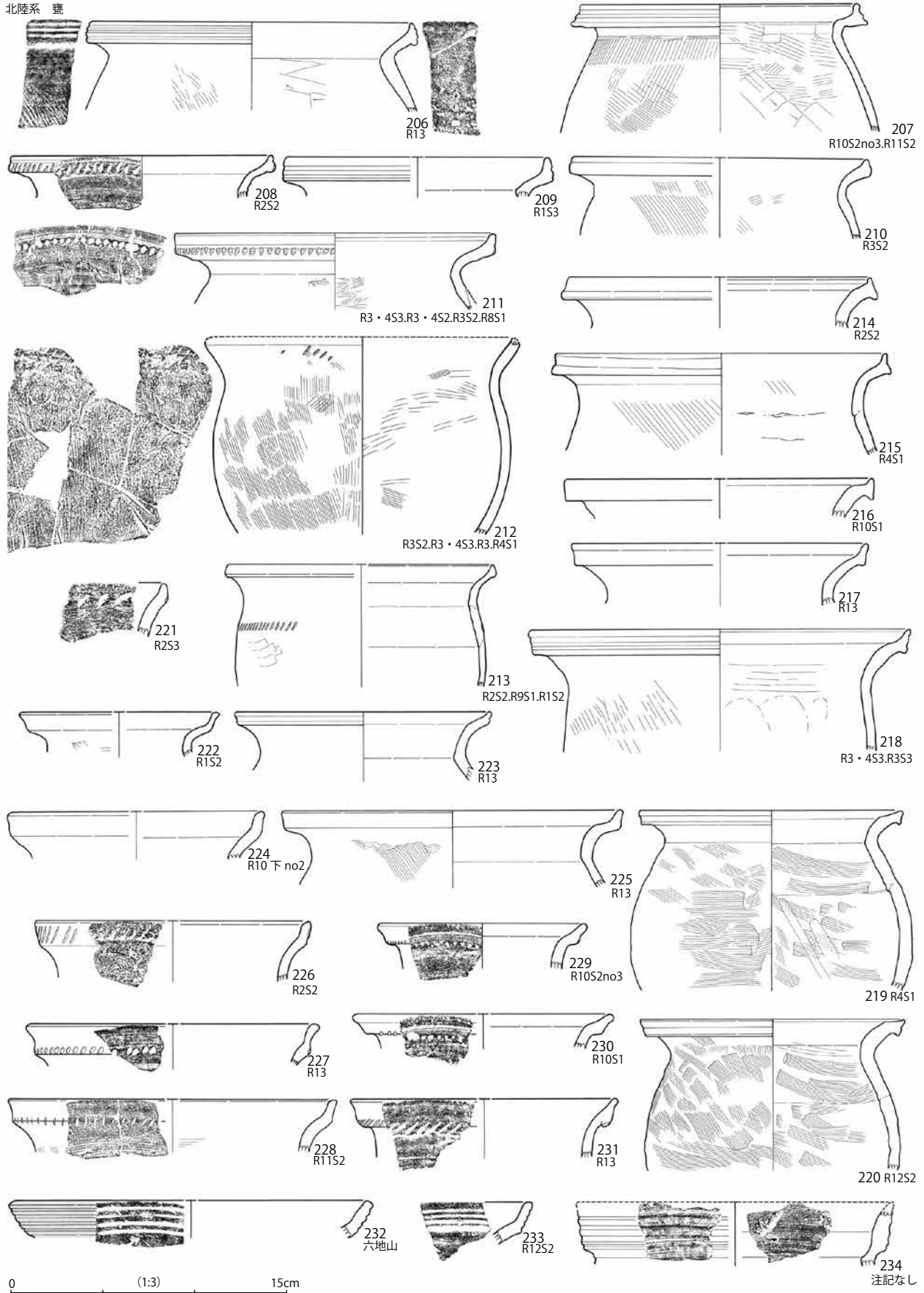


図13 六地山遺跡遺物実測図 (1956年発掘調査資料8)

北陸系 甕

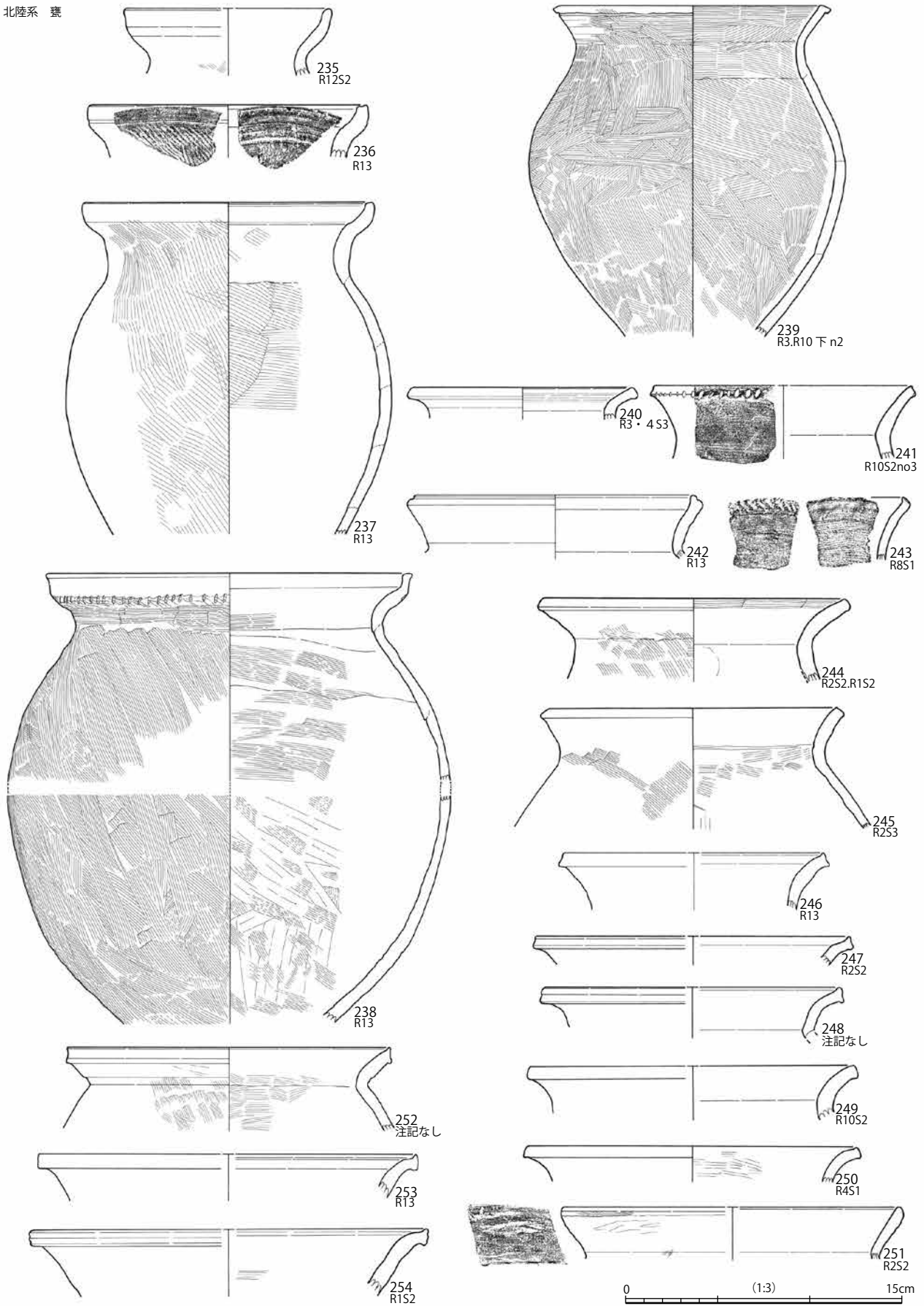
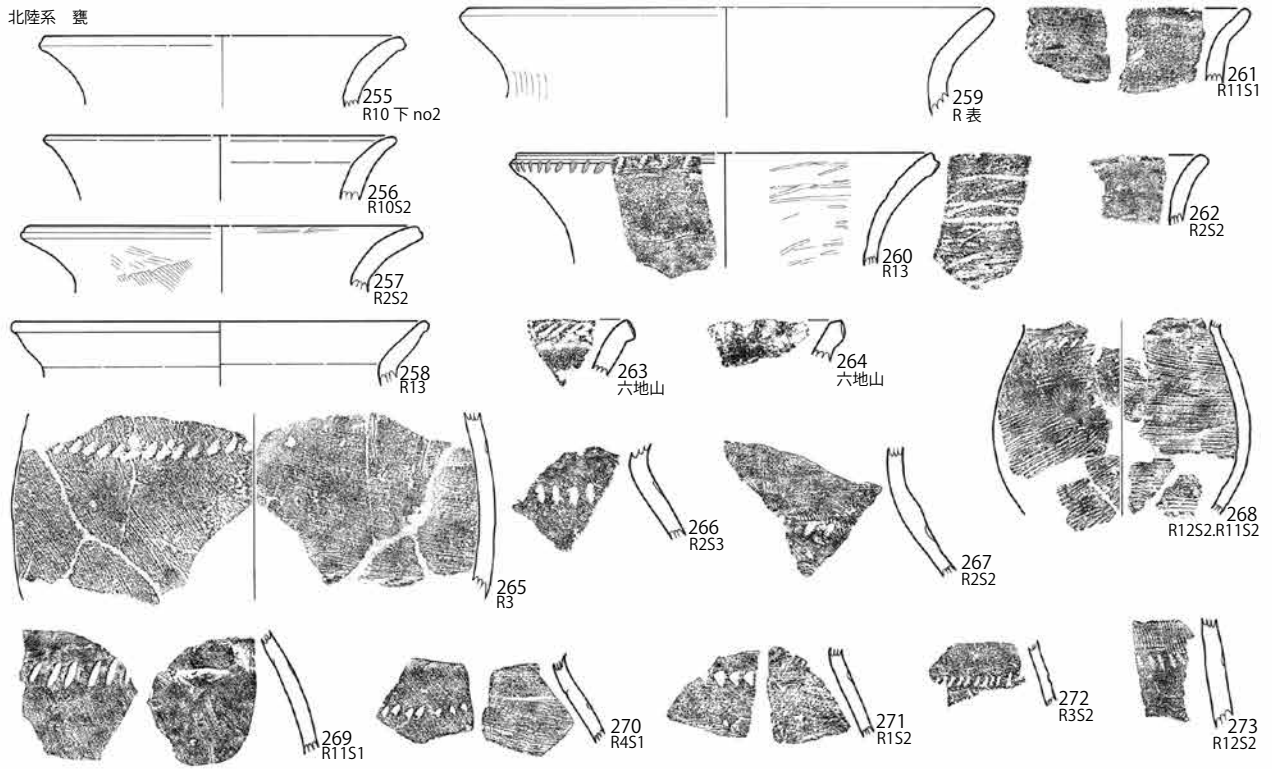


図14 六地山遺跡遺物実測図 (1956年発掘調査資料9)

V 研究活動—資料紹介—  
研究ノートなど—



北陸系 甕



北陸系 壺

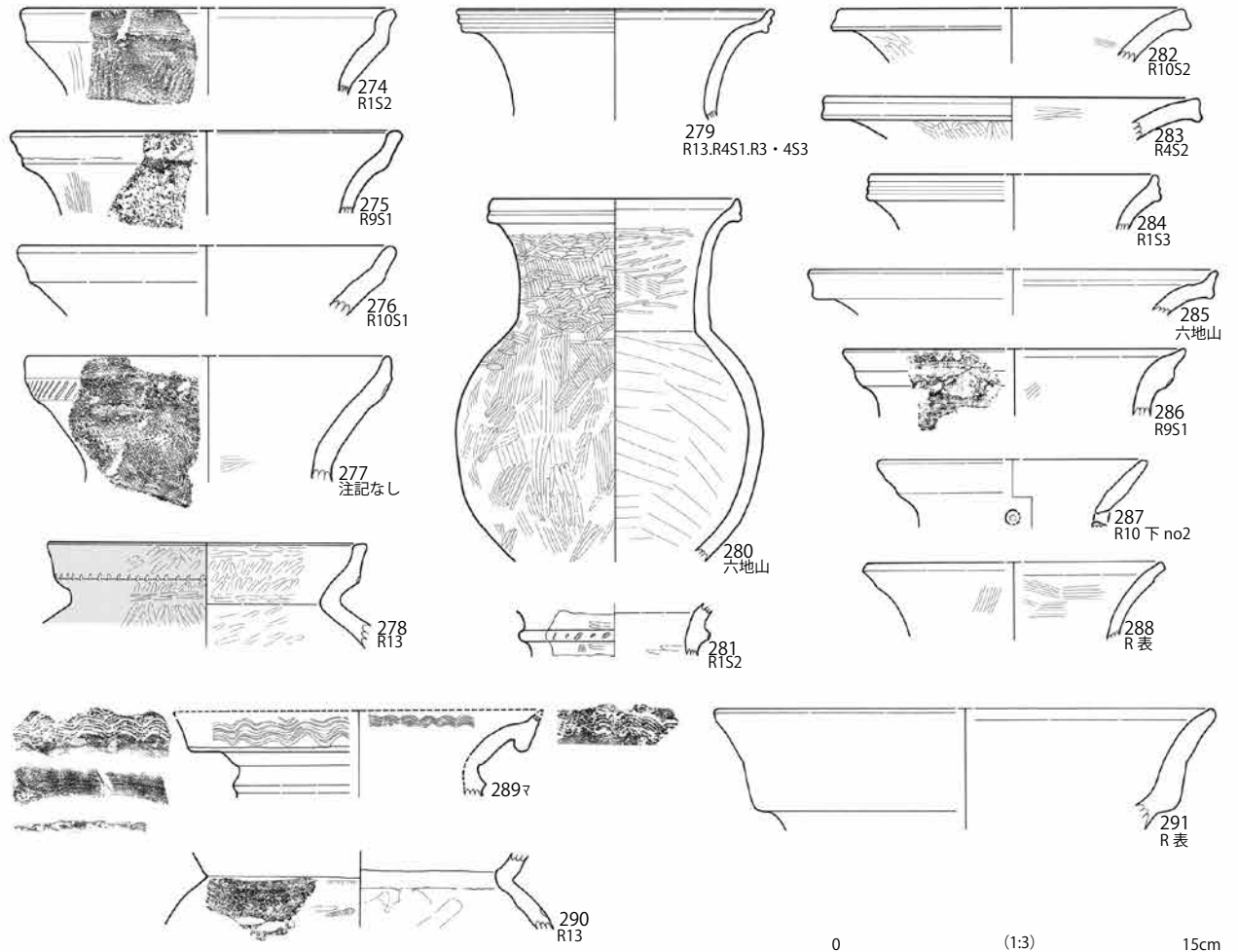


図15 六地山遺跡遺物実測図 (1956年発掘調査資料10)



北陸系 高杯・器台

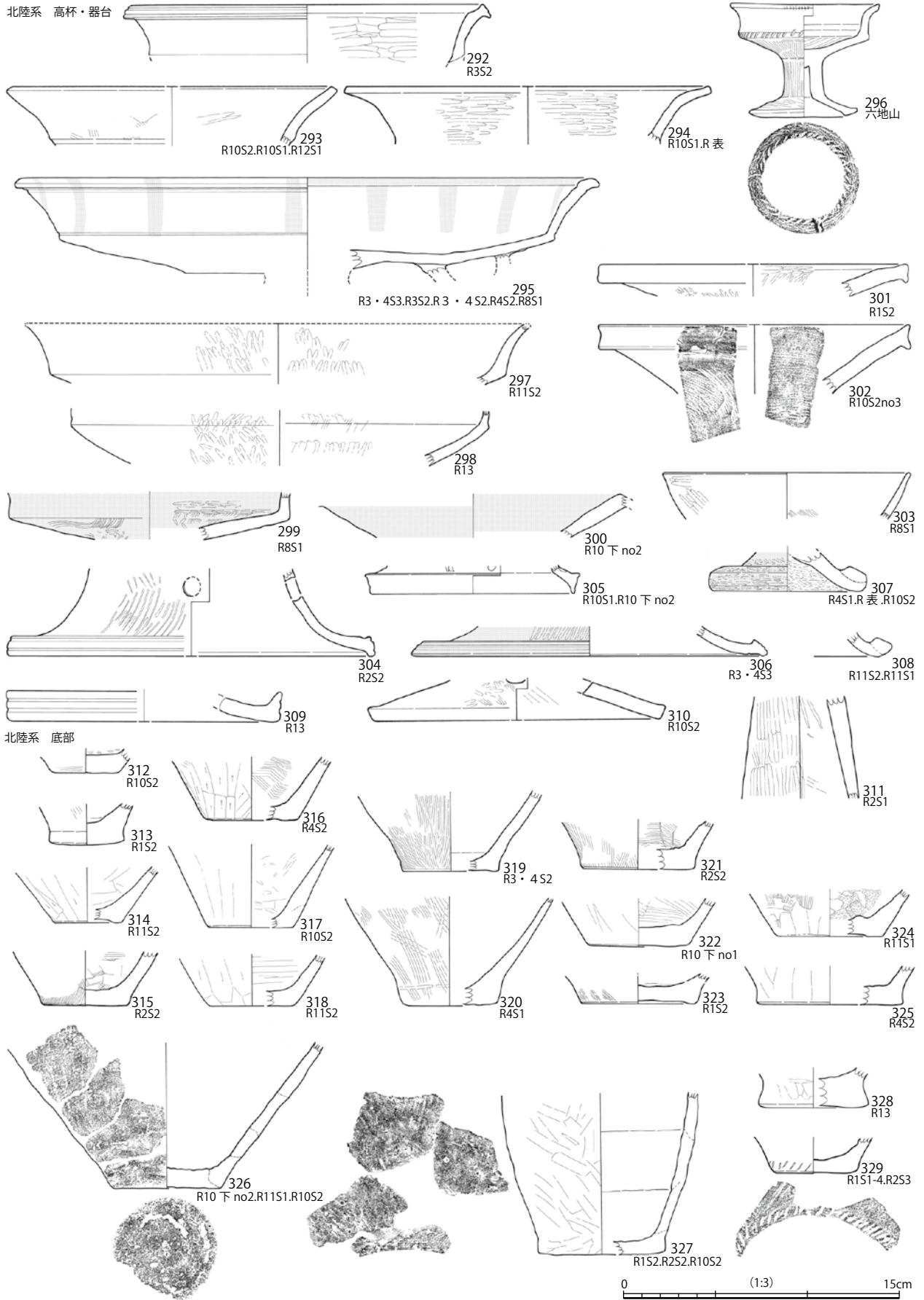


図16 六地山遺跡遺物実測図 (1956年発掘調査資料11)

V 研究活動—資料紹介—  
研究ノートなど—

292～294も296に類似する形態で口径20cm未満の杯部、292は断面三角形の端部に擬凹線を入れる。299は内外面赤彩された高杯杯部で屈曲部が直立する例。屈曲部が外に張り出さないことから、石川県中能登町大槻3号墳出土高杯〔谷内尾1982〕に近い形態になろう。295は口径30cm以上の大形高杯で、杯部に環状把手の痕がある。また、杯部内外面に横帯・縦帯の赤彩がみられる。

受部が無段の器台(301・302)。302は外面にハケメを残す。310のような脚部が想定される。

裾部が有段の脚部(304～309)。304～306は器台、308は高杯脚部になろう。307は内外面ミガキで、外面を赤彩する小形で器壁の厚いもの。脚部内面を磨く事例は稀であるが、B折衷系列の可能性も考えて脚部とした。また、309は摩耗していて器面調整がわからない。脚部と考えて図示したが天地逆の可能性もある。311は棒状脚。303は杯部か鉢かわからない。1956年発掘調査資料には明確な有段口縁鉢や蓋はないようだ。

312～329は底部。312～325はD北陸系列、326・327・329はB折衷系列であろう。329は底部外周にヘラキザミを入れている。

D北陸系列とした土器群の編年的位置についてここでまとめておこう。本遺跡出土土器の特徴としては、田嶋編年の2-1期(法仏式)に位置づけられる古津八幡山遺跡SX1004〔渡邊2001〕のように口縁部が伸長するものはないと断言できる〔楠1996〕。時期的に2期以降に下る可能性があるものとして、擬凹線が入る234があるが、

有段部の厚みがあるので2期以降に下げる必要はないと思われる。1956年発掘調査資料では壺形土器の291が唯一2期以降の可能性のある資料であろう。県内で1期の明確な資料としては糸魚川市後生山遺跡3号住居など少なく、下越では長岡市五千石遺跡などが知られるだけであるが、本資料を、従来の編年観でみると、田嶋氏の2期よりも古いV-2～3期(猫橋式)以前を主体とする時期と考えられる。県内では類例に乏しい時期であり比較することが難しいが、V-3期と考える古津八幡山遺跡第13次調査7 TSD03 S 10〔渡邊2004〕と同時期か、それよりも古い戸水B式(207)も含むから、V-1期～V-3期を主体とする時期と考えておきたい。

#### (4) 上原甲子郎氏資料及びその他の資料

(図17-1～26)

『弥生式土器集成本編2』〔上原・磯崎1968〕と、概ね同じ上原氏提供資料を載せる『内野町誌』〔武田ほか1960〕、及び現在所在が不明の資料を掲載する『NKH』Vol.2-No.4〔中村1960〕から組み替えて転載した。A東北系列(1～17・26)、Cその他系列(22～24)、D北陸系列(18～21)である。

A東北系列の1～9は㊦、10～11・14・15・16は㊲で、6・15は結節縄文、16は絡条体を施文する。結節縄文は発掘資料では希少な例である。12・13はハケメ地文か。発掘資料と比較すると有文精製土器が多いが選んで掲載したからであろう。3はRLの横走縄文・縦走縄文を地文に、2本沈線で上向きの連弧文を入れており、両者の

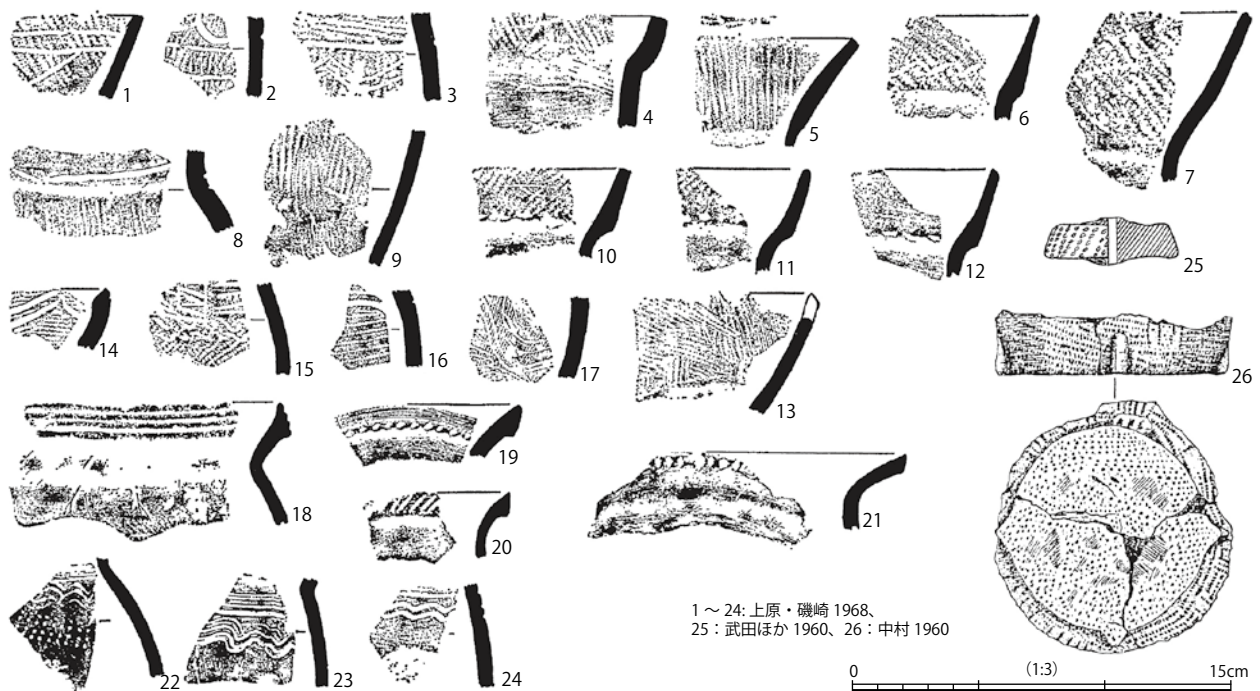


図17 六地山遺跡出土遺物(既報告資料)

同時性を示す重要な資料。口縁部を肥厚させる例も多く載せるが、4のように内湾するものから6・7のように長く伸びる例までである。ハケメ地文の12は肥厚部下端に横位の沈線を引き、縦のキザミを入れるもので、岩手県兎Ⅱ遺跡などに類例があるものであろう。L R縄文を入れる10も同じ技法か。13は内湾する口縁部で頂部にキザミを入れた突起を付ける。本遺跡では平縁が多く、波状口縁や突起を付ける例は少ない。図6-4や図10-143のような突起であろうか。縄文が施文されないのでB折衷系列とすべきかもしれない。

26は底部に4か所の突起を付けR L縄文を施文するものであるが、現在所在がわからない。記載がなく推測の域を出ないが、垂下する沈線文が引かれ、底部に縄文が施文されているようにみえる。

D北陸系列の18はやや内傾する断面三角形の口縁部に3条の擬凹線文を入れている。図13-206と酷似するが、くびれの角度が異なるから別個体か。20・21のキザミ・刺突列はB折衷系列に分類すべきかもしれない。Cその他系列とした22は4条の櫛描直線文・波状文・刺突列点文、23は4条櫛描直線文・波状文を入れる例で、近江系の可能性がある。24は2本描波状文を入れ、その上に直線文を入れる例であるが在地化したものであろう。施文工具は図12-185・186に近い。

25は土製紡錘車。横位に櫛状施文工具による刺突列を入れた例と推察される。「土製品には紡錘車が二例あり、内一個には土器と同様の縄文が施してある」〔上原1954〕とした紡錘車に該当する可能もあるが、そうであればR L縄文の縦位施文ということになる。

#### (5) 真島衛氏採集資料 (図18-1 ~ 34)

「六地山 1960 8/2」と書かれた紙箱に入っており、ほぼ全ての土器片には朱墨で「六地山」と注記されている。1956年の発掘調査以前から表面採集に訪れていたと推察されるが、それらの資料は前述したように現在長岡市立科学博物館所蔵資料の「マ」と注記された資料が該当するのであろう。なお、真島氏資料中には石鏃等の石器は見つけられなかった。A東北系列(1~16・19~29)、B折衷系列(32・33)、Cその他系列(17・18・34)、D北陸系列(30・31)である。

A東北系列の1~5は沈線のある精製土器で5が㊸であるほかは㊹。1は波状口縁、3・4は壺である。縄文のみの個体は6~19が㊹、20~29が㊸である。21は口縁端部にのみL Rを施文する。24・29は絡条体R、内面にも縄文を入れる25はL R+R附加条第2種である。D北陸系列の30・31は甕と壺。B折衷系列の32・33は口縁部の横ナデが不明瞭な例。Cその他系列の17・18は続縄

文土器もしくはその模倣品、底部にR L横走縄文を施文した19もその可能性がある。34は2本描施文工具で弧線文とコンパス状の波状文を入れる。

真島氏資料は発掘調査資料と同様に㊹が多い。また、発掘調査資料と明らかに同一個体とわかるものがあり、25は図7-48、34は図12-195~200と同一個体と考えられる。

#### (6) 金塚友之丞氏採集資料 (図19-1 ~ 30)

現在、新潟市歴史博物館が所蔵している資料である。「昭和28年から29年にかけて精密に六字山を踏査した」〔金塚1956〕と記載があるので、その頃に採集したものであろう。

A東北系列(1~13・18~24)、B折衷系列(25~28)、Cその他系列(14~17・29・30)である。

A東北系列の1~7は沈線文様のあるもので、1・2は㊹、6・7は㊸。7は2本描の細い沈線で上向きの連弧文を書いているがⅢ文様帯上端であろう。8~13(㊹)・18~24(㊸)は縄文のみのもの。㊹は縦走縄文が目立つが、11は節が細長いので0段多条の可能性もある。19・20は同一個体でハケメと絡条体Rを併用する。図7-47や48のような甕形になるものであろう。21は絡条体か附加条。23は結節があるもので本遺跡では希少例。

B折衷系列の25・26は内外面横ハケで口縁端部を平らにする。28は波状口縁の端部にヘラキザミを入れる例。

Cその他系列の14・15は続縄文土器で、14は幅2mm、15は幅1.5mmの沈線に沿ってR L縄文を横走施文する。帯縄文は節が細かい0段多条で、縄文と沈線の切合い関係は沈線が後である。内面は黒色を呈し丁寧なヘラナデ。同一個体の可能性が高い。16・17も沈線に沿ってR L縄文を施文しており模倣品と考えた。29は2本描波状文、30は肥厚する口縁部に鋸歯文を入れる。

金塚資料及び真島資料中に続縄文土器及びその可能性がある資料が確認された。隆帯を持たず、沈線に沿って縄文を施文する手法は「帯縄文系」後北C1式に相当しよう〔大坂・福田2005〕(注11)。本資料によって『NKH』Vol.2-No.4〔中村1960〕で報告され、現在は所在が確認されない「底部破片ではあるが底部角に四箇(中1欠)の突起を附している。」土器(図17-26)も併せて評価をすることが可能になったと言える。端的に言えば、日本海を介して東北北部や北海道との流通をうかがうことができる直接資料として重要と考えられる。

#### (7) 1982年発掘調査資料 (図20-1 ~ 47)

『六地山遺跡-1982年発掘調査を中心に-』〔甘粕・小野ほか1986〕から弥生土器を再実測した。A東北系列(1~10)、D北陸系列(11~47)である。



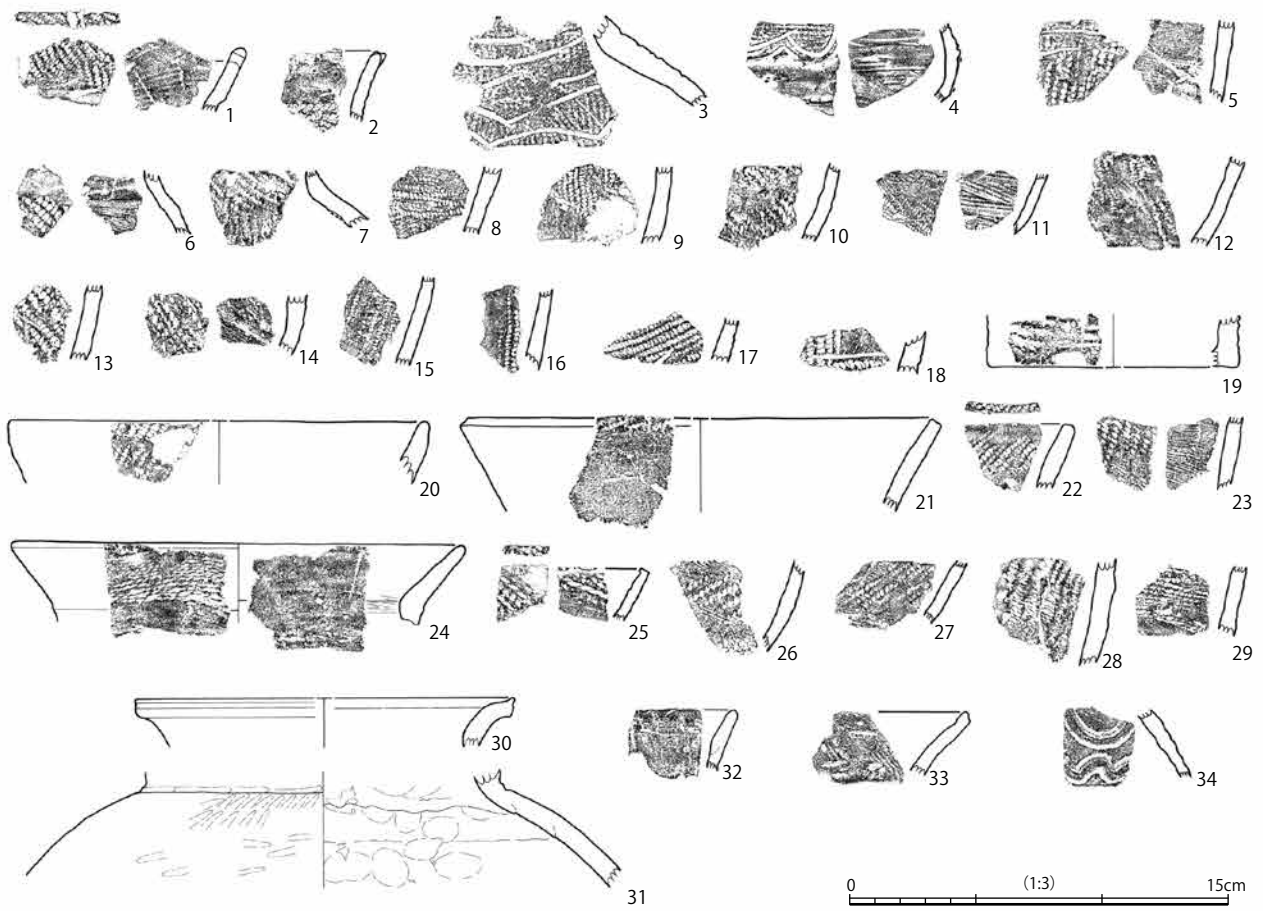


図18 六地山遺跡遺物実測図（真島衛氏採集資料）

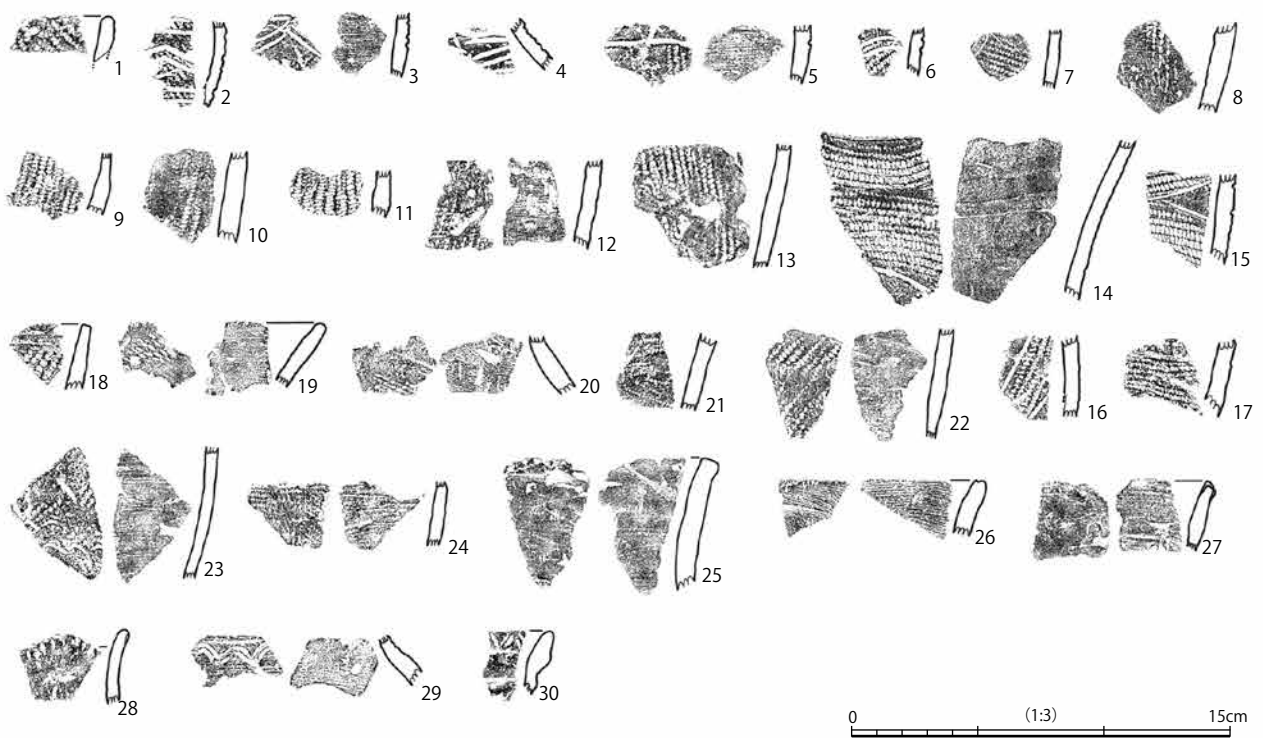


図19 六地山遺跡遺物実測図（金塚友之丞氏採集資料）

A東北系列の1～3は㊶、6～10は㊸で6は絡条体R、10はLR横走縄文である。1は肥厚有段口縁部に上向き連弧文、4はハケメ地文に上向き連弧文、5は2本描施文具で平行沈線文と鋸歯文を入れる。図12-187・188に類似するものであろう。

D北陸系列の11～28・33～37は甕、29～32は壺、38～41は高杯・器台、42～47は底部である。23～26はくの字状口縁の甕。壺の29・30は口縁部にヘラキザミを入れる例。31は有段口縁、32は無頸壺である。

36・37の肩部のキザミは爪状・長いヘラ状施文具で、D北陸系列ではみないので、B折衷系列とすべきかもしれない。

#### (8) 2006年確認調査資料 (図21-1～17)

調査地区は1956年発掘調査地点の東側で、概ね1984年発掘調査の1・2・3・4トレンチに囲まれた範囲である(図3)。確認調査により1～12トレンチの面積約222㎡から出土した。この区域は遺物包含層が残っていたことから現状保存の取り扱いとなった。出土遺物は、A東北系列(1～7)、Cその他系列(8)、D北陸系列(9～17)がある。

A東北系列の1はハケメ地文、2～6は㊶、7は㊸である。1は肥厚した口縁部を外側へ伸長させる。口縁部は平坦ではなく緩やかな小波状を呈し、器形は図6-1と類似する甕もしくは広口壺になるものと思われる。外面の肥厚した有段部及び内面は横ハケ、頸部は縦ハケを地文とする。頸部の縦ハケは図23-1も同様。I文様帯には幅4mm程の2本描施文具で上向き連弧文もしくは波状文、同じ施文具で文様帯下端には右上から左下に刺突列を入れている。II a文様帯にも同一の施文具で上向き連弧文を描き、下端にはハの字状の交互刺突文を入れる。2は内湾する口縁部に縦走縄文を入れる例で、端部にも施文される。3は肩部に斜縄文を入れるもの。斜縄文の上には縄文施文後になで消された痕跡がみえる。4は0段多条、6は細い原体が使われている。

Cその他系列の8は2本描施文具で波状文を2条入れるが、上向き・下向きの崩れた連弧文を入れているようにもみえる。図12-194～200と類似する例。

D北陸系列の9は有段口縁甕で頸部が直立する例で、口縁部が強く内湾し、有段部下端を垂下させる。10はくの字状口縁の甕で端部に面を持つものである。11・12は壺。12は大形、11は内外面赤彩された小形のもの。13～15は高杯・器台である。15は赤彩される。16・17は底部である。

#### (9) 2007年確認調査資料 (図22-1～6)

調査地区は1984年の1トレンチ北側の水田部分であ

る。土地区画整理事業に伴う確認調査で水田下1.7～2.5mの黒褐色砂層から出土した。D北陸系列の2は有段口縁の広口長頸壺。3はくの字状口縁の甕で端部に面を持たないものである。5は無段の器台受部、6は有段口縁の鉢。内外面ハケメ調整でミガキ調整されないのは珍しい。

#### (10) 2014年確認調査資料 (図23-1～19)

調査地区は1956年発掘調査地区の10m程南側にあたる。文化財センター年報で既に報告済みの資料を再編した〔渡邊2016〕。A東北系列(1～12)、B折衷系列(13・14)、Cその他系列(15)、D北陸系列(16～19)がある。

A東北系列の1～10は㊶、11・12は㊸である。2～7は同一個体と考えられる。9はハケメ地文にRL、10は附加条もしくは1段で太さの違う縄を用いている。11は絡条体Rである。

1は広口壺か甕。口縁部I文様帯は肥厚し、RL地文に2本単位の沈線で下向き連弧文、頸部II a文様帯は縦ハケを地文とし、文様帯上端に上向き連弧文、下端は2本の沈線で下向き連弧文を入れる。内面は横ハケである。頸部の縦ハケはI文様帯まで入れられていないので、調整ではなく、地文として入れられたものと考えられる。図21-1も同様であろう。2～7は口縁部を肥厚させず、幾分内湾させ、頸部を無文とする粗製土器。体部上半には斜縄文を入れる。図9-110・111のような甕形になろう。

B折衷系列とした13・14はヨコナデの不明瞭な例である。Cその他系列の15は先端の平らな原体で体部上半に2本描鋸歯文を入れた例で、図12-185・186と類似するもの。内外面の調整はナデ。D北陸系列の16は甕、18・19は底部、17は高杯か器台の脚部である。

#### (11) まとめ

これまでに六地山遺跡で出土した土器について報告したが、弥生土器の系譜と時期を考える際に参考になるので、1956年の発掘調査で出土した剥片と、関係すると思われる小形土器について簡単に記しておきたい。

剥片(図25) 六地山遺跡では1956年の発掘調査で156点もの剥片が出土している。肉眼観察では石材は流紋岩もしくは頁岩と推察される。最も多く出土しているのは10区で、同じ調査区からは小形高杯も出土している。これらの剥片は弥生土器の出自を考える上で重要であると考え、管見ではあるが類似する事例を紹介しておきたい。

・新潟市秋葉区居村遺跡D地点〔渡邊・立木ほか2001〕 八幡山遺跡の隣接する丘陵上の遺跡。2基の土坑から弥生時代終末期の土器とともに23点の剥片等が出土した。石材は凝灰岩13点、珪質凝灰岩7点等。共伴した弥生土器

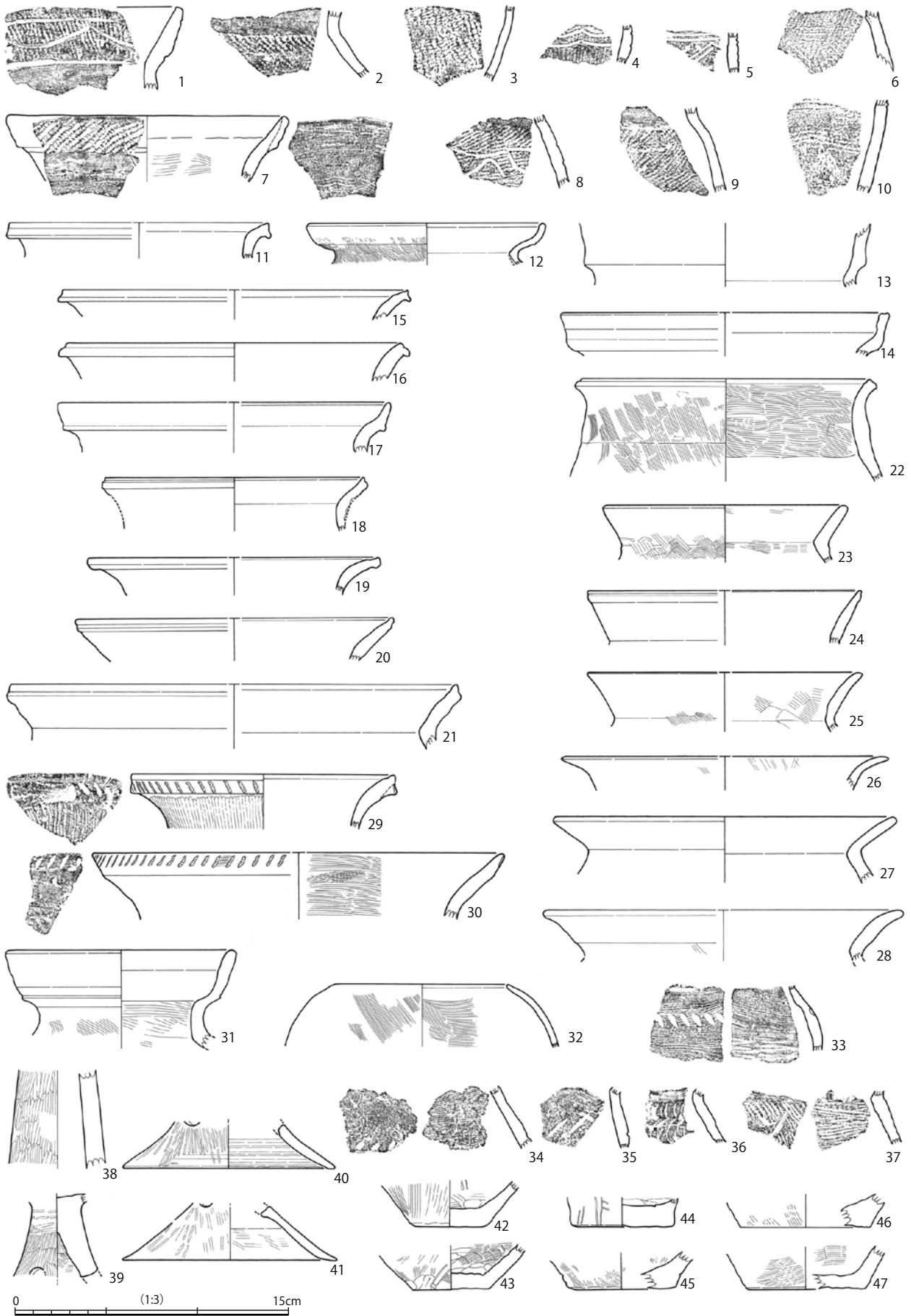


図20 六地山遺跡出土遺物 (1982年発掘資料)



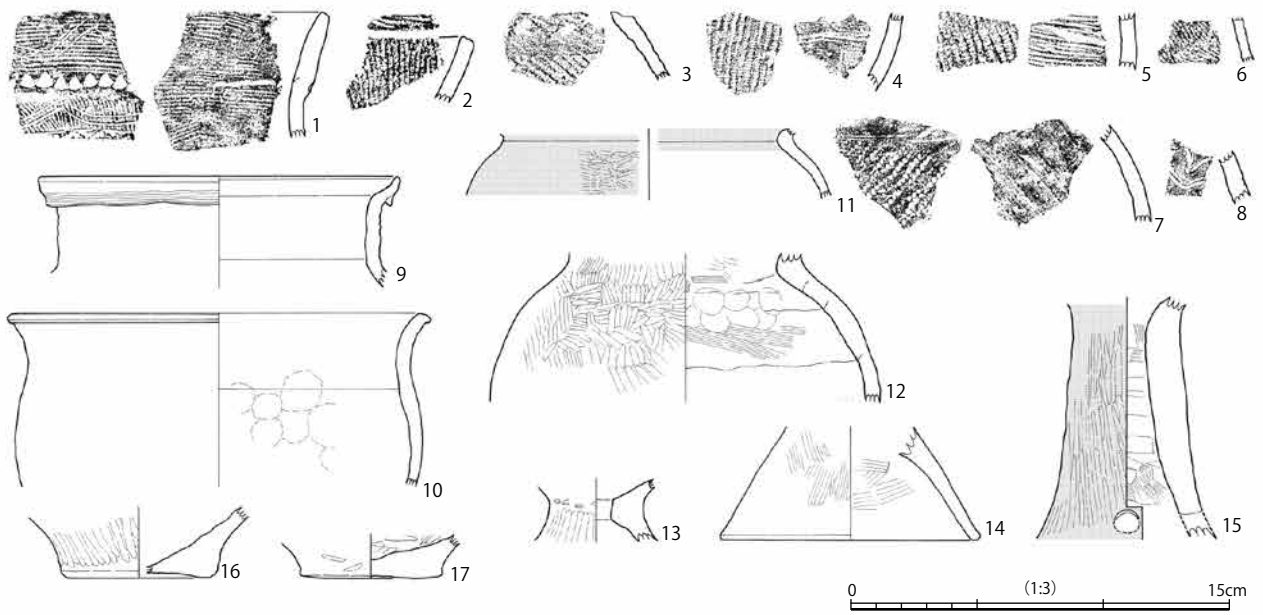


図21 六地山遺跡出土遺物 (2006年度発掘資料)

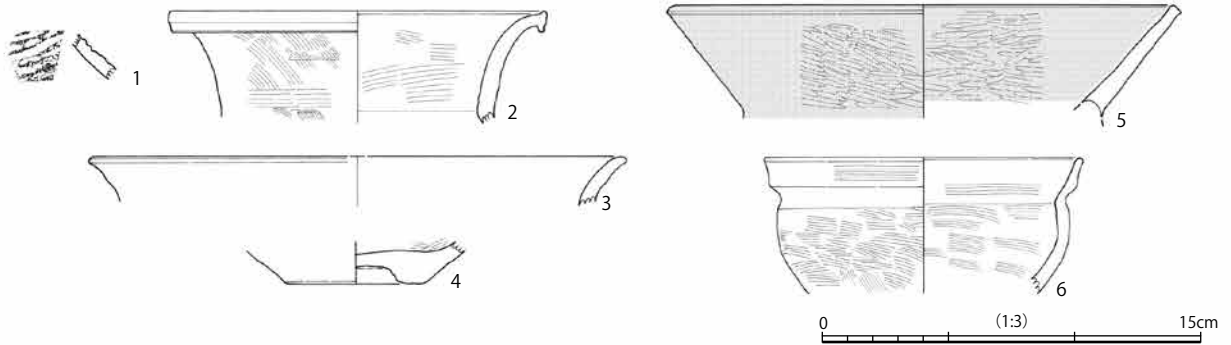


図22 六地山遺跡出土遺物 (2007年度発掘資料)

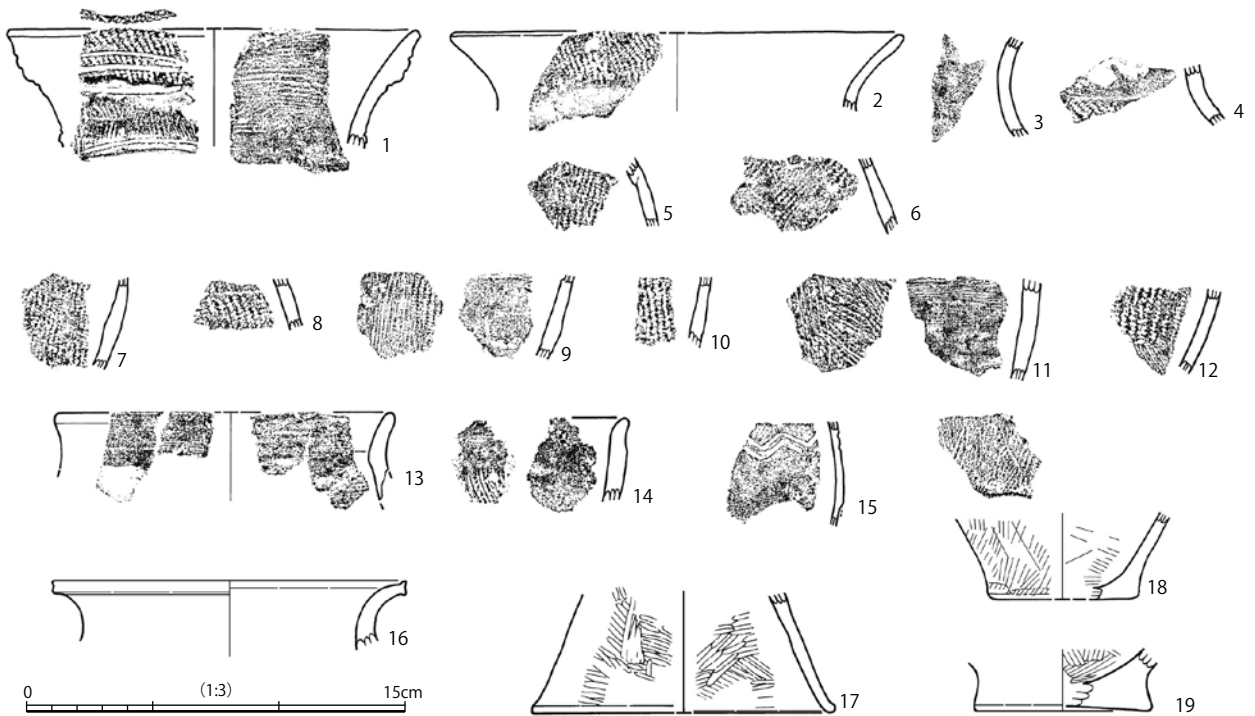


図23 六地山遺跡出土遺物 (2014年度発掘資料)

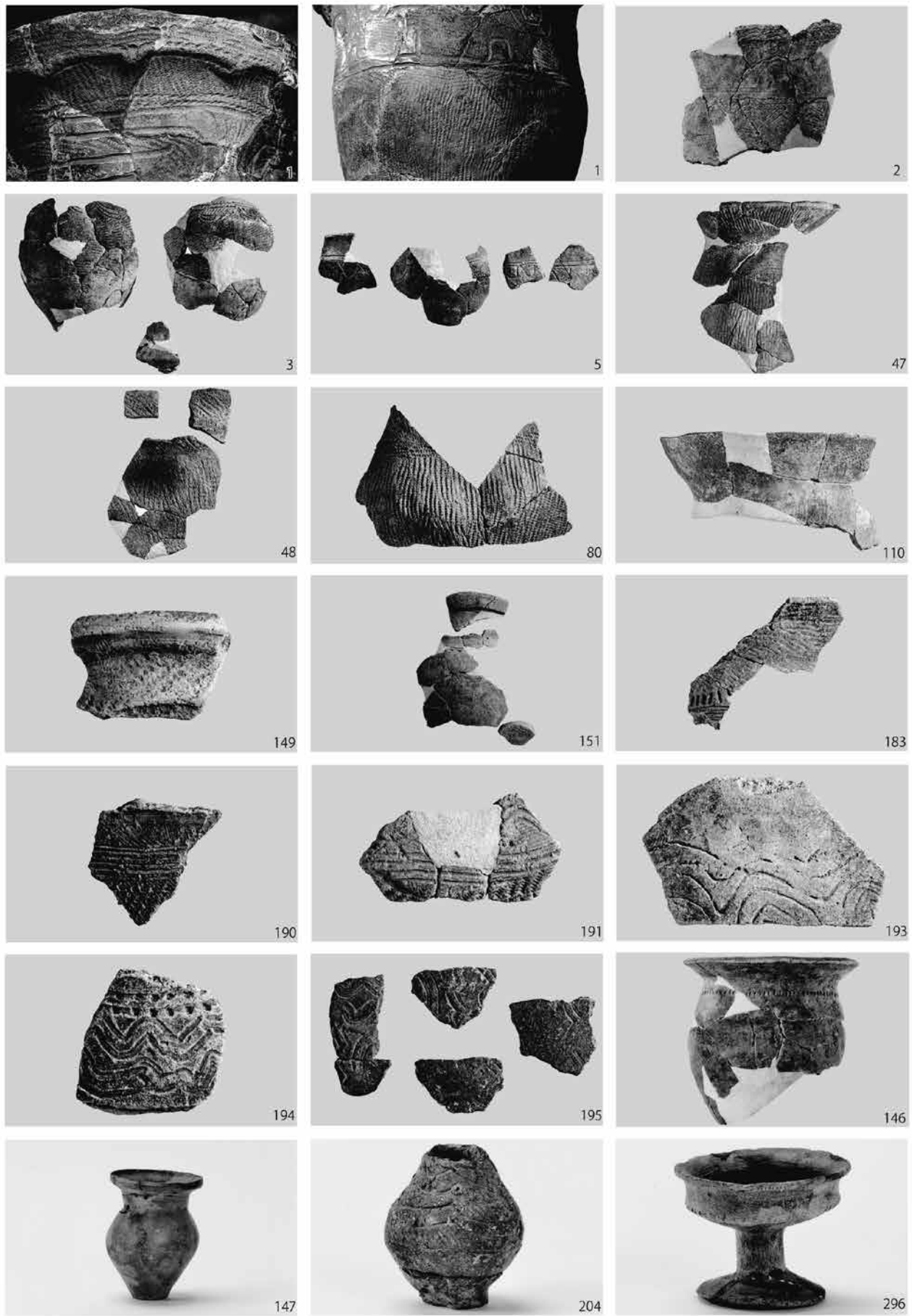


図24 六地山遺跡出土弥生土器写真（1956年発掘調査資料）



図25 六地山遺跡出土遺物写真 (1:石器、2:剥片R10S2出土、3:鉄器・鉄滓)

は㉑21点、㉒3点で、横位羽状縄文、縦走縄文など新潟県内では希少な北方的な例が多い。

・新潟市西蒲区南赤坂遺跡〔前山・相田2002〕 上段テラス下土坑群から緑色凝灰岩製の剥片・チップが1,365点出土しているが、これらは玉造工程に関わるものと考えられている。遺跡からは古墳時代前期の土師器と後北C2-D式が定量出土しているが、玉造に関わったのは地元集団と考えられている。

・青森県むつ市外崎沢(1)遺跡〔高橋・葛西1979〕 埋まりきらない堅穴住居に弥生土器の破片とともに「割石」354点が廃棄されていた。63%が瑪瑙で「石そのものが割られること事態に石器としての用をなしていたものと考えられる。」とされている。弥生土器は中期終末の念仏間式から後期初頭にかけてのもの。

・青森県東津軽郡外ヶ浜町宇鉄Ⅱ遺跡〔岩本ほか1979〕 中期併行の弥生土器(宇鉄Ⅱ式・田舎館式)・恵山式とともに、頁岩598、瑪瑙153、黒曜石12、その他14、合計777点の剥片が出土している。15-21Gでは瑪瑙の剥片51点がまとめて出土している。土坑墓かと推察される土坑も20基弱検出されているが、土坑内ではなく包含層出土が多い。

・北海道せたな町瀬棚南川遺跡〔高橋ほか1976〕 墓坑と認識される土坑等の遺構から、剥片・削片558点が出土している。恵山式に伴っており続縄文期に属する。18号墓壙のように石鏃が36本も出土している土坑もある。

・岩手県滝沢市大石渡V遺跡〔井上ほか2008〕 東向き緩斜面の約45mの範囲にある焼土41基や周辺から後北C2-D式・塩釜式・赤穴式土器と共に黒曜石製ラウンドス

クレーパー7点、剥片146点などが出土している。

小形土器 六地山遺跡では図7-35、図11-173・174、図12-204等の小形土器が出土している。器種は壺と高杯で多系統のものである。新潟県内では六地山遺跡よりは時期的に古いが中期後半の阿賀野市狐塚遺跡で土坑から多系統の小形土器が多数出土している〔佐藤ほか2009〕。土坑は墓坑と考えられる。また、村上市道端遺跡でも土坑から小形壺が出土している〔前川ほか2006〕。その他、岩手県二戸郡一戸町上野B遺跡〔高田1984〕、福島県会津若松市和泉遺跡〔木本ほか1991〕などに類例がある。前者は中期終末、後者は後期前葉である。

六地山遺跡の場合も小形土器や剥片は土坑・墓坑に伴った可能性を考慮する必要があるように思われる。まとめて剥片の出土する事例は東北北部や北海道で多いようだ。採集資料であるが、多量の石鏃等も墓地と関係している可能性がある。

六地山式土器の編年的位置 ハケメ調整を主とする一群と縄文を主体とする一群が時期的に同じなのか別なのかが問題とされてきたが、〔新潟市1994〕では、出土状態から明確に分離できないこと、両群で共通する形態の甕(図10-149・150)が存在すること、同じ胎土のものが存在することを理由に両者を同時期とし、〔中村1983〕・〔坂井1985〕を引用し、後期前半から中頃としている。しかし、天王山式との編年的な前後関係についての記述はなかった。

それでは次に、弥生時代の研究者が「六地山式土器」をどのように考えていたのかみてみよう。まず、「天王山式土器」との比較を行おう。

天王山式土器の特徴は石川日出志氏によって次のよう



にまとめられている〔石川1990〕。まず山内清男氏によって、①口縁部突起の発達、②交互の刺突、③縦走する縄文が指摘された。そして、中村五郎氏によって、④体部文様帯下端の下向き弧線文・連弧文、⑤横走する縄文、⑥R L縄文が多い、⑦文様帯下端の鋸歯文（④の一部）、⑧底部への施文、⑨片口の存在、⑩半球形の口縁部、⑪口縁部の連弧文、⑫無文の頸部、⑬壺胴部の同心円文・渦巻文が追加され、さらに、佐藤信行氏によって⑭体部文様帯の磨消縄文の発達も特徴の一つとされた。

この「天王山式」の特徴を六地山遺跡でみてみよう。存否多寡を記すと以下ようになる。①あるが少ない、②ない、③多い、④あるが少ない、⑤あるが少ない、⑥多い、⑦あるが少ない、⑧ほぼない、⑨ある、⑩ある、⑪多いが文様帯として確立されているかは疑問、⑫同心円文はあるが（193）、系統が異なる、⑬あるが少ない。

「天王山式」の最大の特徴とされる交互の刺突（交互刺突文）がなく、その他の特徴も「天王山式」と異なることは明らかである。一方で、縦走縄文が多いことは六地山遺跡でも特徴として上げることができる。

次に、六地山遺跡出土の弥生土器が、研究史上どのように扱われてきたか簡単にみておきたい。

まず、山内清男氏が「宮城県の崎山冢式、福島県の天王山式等は弥生式の後期と考えられている。なお、新潟県、富山県、石川県の弥生式のある種のものに伴って同様の縦の縄文が少数伴出し、全く異物の如き感を与えている。これらは北方系の特徴として考慮する必要がある。」〔山内1964〕（注12）とし、遺跡名を限定していないがR L縦走縄文に着目したことを重要視しておきたい。この記述は新潟県内では六地山遺跡や砂山遺跡を念頭においた記述と考えられる。

次に、天王山式土器に関して多くの論考がある中村五郎氏が六地山遺跡について言及されている部分を要約しておこう。中村氏は、〔中村1983〕で、山草荷2式→下谷地→砂山（天王山式）→六地山式とし、六地山式を天王山式の次に位置づけ、編年表では福島県の踏瀬大山と併行させている。また、畿内第V様式の壺形土器Aに近似する壺、杯部の口縁や立ち上がりが直立にちかい高杯を含む六地山式を西ノ辻I式との関係から畿内第V様式でも古い段階とする。六地山遺跡資料の中に交互刺突文がないことから天王山式よりも新しいと位置づけ、東北系・北陸系土器を同一時期のものとして、編年的位置を決めた。六地山遺跡を畿内第V様式古段階に位置づけたことは、それ以前とする狭義の天王山式土器（天王山遺跡の天王山式）をIV様式併行とする根拠の一つとなった。中村氏は1989年にあった「天王山式期をめぐっての検討会」で

も同様の発言をしている〔弥生時代研究会編1990〕（注13）。

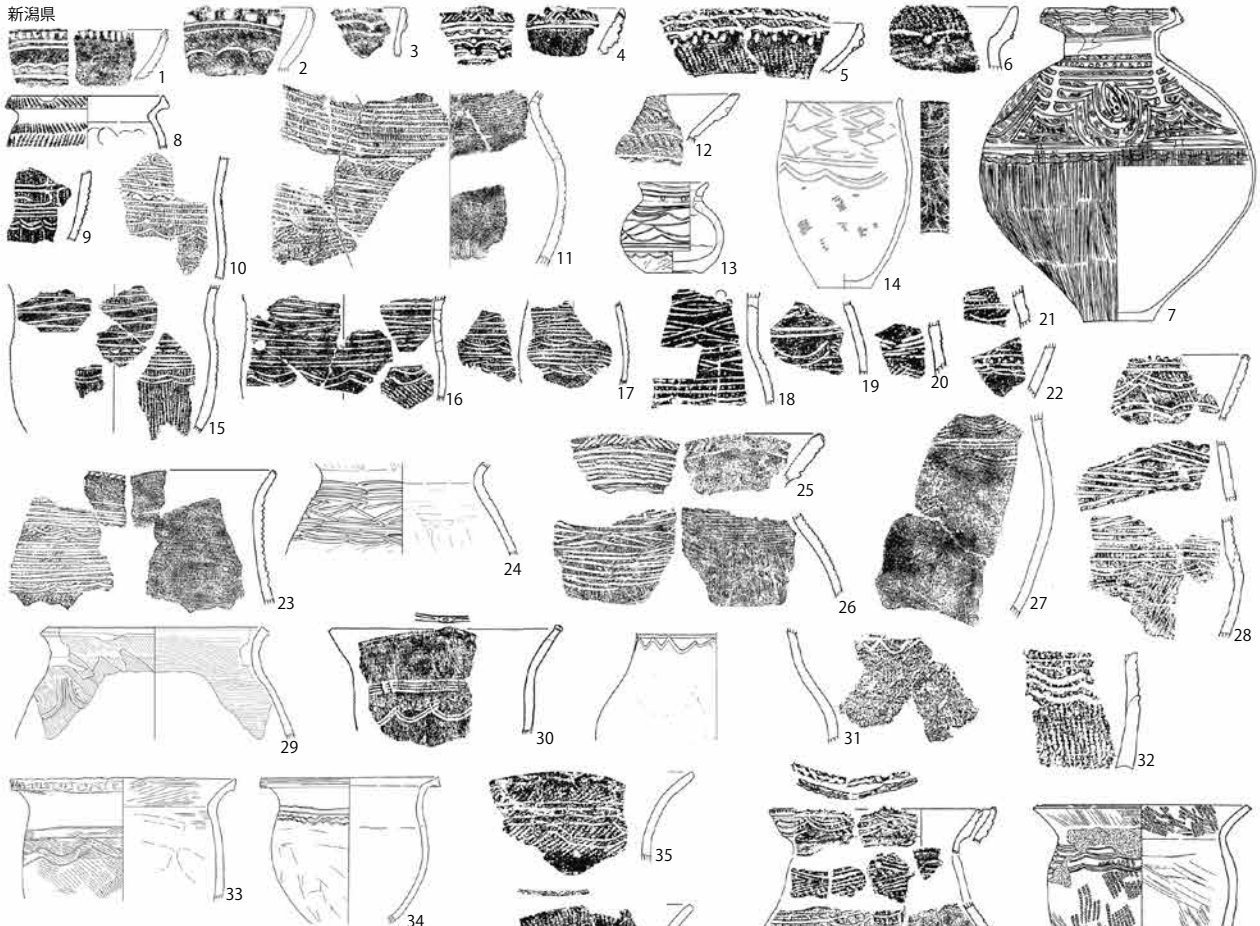
その後、中村氏は新資料の増加によって、中期後半から天王山式期にかけての編年を細分し、福島県会津美里町油田遺跡出土資料から油田Y期を設定し、御山村下期→油田Y期→天王山式とした〔中村2009・2010・2011〕。油田Y期土器は、2本組の平行沈線で文様を描くことが特徴であるとし、新発田市王子山遺跡で2本1組の施文具による沈線が多く、磨消縄文技法がないことから、油田Y期から天王山式土器への過渡的特色としている。また富山県頭川遺跡にも2本1組の沈線が一定量あるとしている。そして、「福島県でも踏瀬大山式土器は天王山式土器から大きく後退し、ぎやくに新採用器種のめざましい進出がある。天王山型式群から福島県内では踏瀬大山式、新潟県内では六地山式が離脱した」〔中村2010〕とし、従来同様に天王山式→六地山式との編年観を示している。天王山遺跡中期説の根拠の一つとしている開津台畑遺跡についての言及はなかった。模式的に記すと下記のようになる。

#### 天王山式型式群

御山村下期 → 油田Y期 → 天王山式 → 踏瀬大山式  
 王子山遺跡 六地山式  
 頭川遺跡  
 西ノ辻I式  
 IV様式末 第V様式初頭

次に石川日出志氏である。氏は六地山遺跡の天王山式系土器には確実な交互刺突文は1例もなく、縄文側面押圧がみられること、口縁部のI文様帯は下端の区画さえない縄文のみの例が多く、頸部文様帯も簡略化しており、「屋敷段階かそれ以降のものが中心になるように思われる。」とし、中村氏同様に狭義の天王山式よりも新しく位置づけた〔石川1990・2000〕。そして、多量にある北陸系土器については、中村氏や坂井秀弥氏が指摘するように〔坂井1985〕、V期前半が主体だが、法仏段階まで下る資料も少数みられるということを根拠に、法仏期の土器にこそ伴うのではないかと考えた。天王山式を後期初頭（前半）とする石川氏にとって、天王山式よりも新しく位置づける六地山遺跡の天王山式系土器に後期初頭（前半）の北陸系土器が共伴することは考えられなかったであろう。しかし、石川氏が法仏I式に近接する甕とした〔石川1990〕、〔寺村1960〕の図4-41は、本報告の図13-206であり、この甕は現在では猫橋式に位置づけられると考えられるので、石川氏のこの説明には問題があると言わざるを得ない。それと縄文原体側面押圧を新し

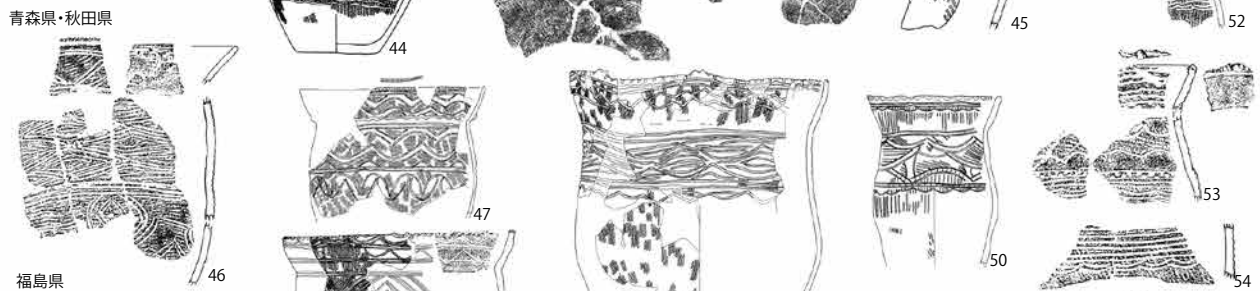
新潟県



富山県



青森県・秋田県



福島県

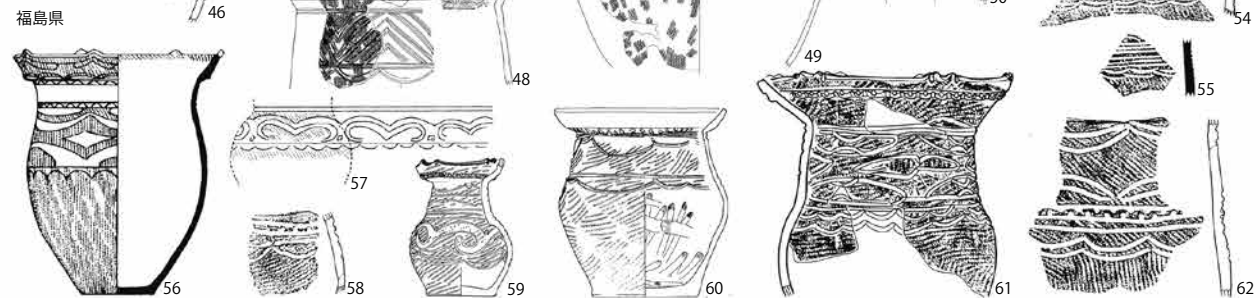


図26 六地山遺跡に関する土器（Ⅰ文様帯の下向き連弧文、Ⅲ文様帯の上向き連弧文、折衷土器等 縮尺不同）

V 研究活動—資料紹介—  
研究ノートなど—



いと決めつけたことに問題があった。

石川氏と中村氏はともに六地山遺跡の天王山式系土器を狭義の天王山式よりも新しく位置づける点では一致するが、北陸系土器を共伴とみなすか、みなさないかという点で大きな見解の相違があった。いずれにせよ、六地山遺跡の中に交互刺突文がないことが、天王山式よりも新しく考える根拠になったことは間違いないであろう。

筆者は古津八幡山遺跡出土土器を5期に区分する中で、六地山遺跡の一部を1期新段階に位置づけ、編年表では「六地山の一部」を天王山遺跡天王山式よりも1段階新しい段階とした〔渡邊2001〕。そして、注では「発掘調査資料は八幡山1期・2期に限定されると考えている。猫橋式と、北陸系の器形に縄文を施文した折衷土器が出土しており、両者の並行関係を示している。」と説明した。中村氏や石川氏同様に天王山遺跡天王山式よりも新しいと考えながら、一緒に出土している北陸系土器、そして後期前半の北陸系土器の器形に縄文を施文した砂山遺跡や六地山遺跡の折衷土器の成因に苦慮した。石川氏が言うように東北系と北陸系土器が別時期なら、これらの折衷土器が作られるに至った理由が説明できなかったのである。編年表の「六地山の一部」は北陸系土器とこの折衷土器を想定してのことであり、大半の東北系土器の位置づけは留保せざるを得なかった(注14)。

野田豊文氏も六地山遺跡の天王山式系土器を法仏式・月影式に併行する3期(滝ノ前2・3群)に位置づけている〔野田2005・2009〕。

一方、鈴木正博氏は石川日出志氏が「プロト天王山式」を「天王山式」と区別していないことを批判し、松影A遺跡の編年も逆転しているとし、「中村五郎の指摘を受け、新潟市六地山遺跡の図示土器群を「天王山式に後続する土器」と断言するが、「文様帯変遷論」の立場から指摘すれば順序が逆であり、「天王山式」の典型的な文様帯より古式であることは言を俟たない。」〔鈴木2014a〕とし、「天王山式」に至るプロト段階として天王山式→六地山式を順序が逆としている。そして、2つの論文〔鈴木2014a・b〕に掲載された編年を纏めると表4のようになろう。

松影A遺跡の報告書では、石川氏の指導を受けて、同遺跡の土器群は天王山式に後続する位置とされ〔加藤ほか2001〕、新潟県内ではそれが「定説」になっていった。佐藤信行氏・相原淳一氏・相澤清利氏らが兔Ⅱ遺跡など古手の天王山式土器に伴う平行沈線文系土器(2本描施文の土器)があることを指摘していたのに、なぜか新潟県内では忘却されていた。太平洋側の桜井式や十三塚式のことなので、日本海側の新潟では関係ないと思われて

表4 鈴木正博氏の編年(鈴木2014a・b)をもとに作成

対象地域など	中期終末	後期初頭～後期前葉の「プロト天王山式」
砂山遺跡	「砂山C 4段階」	「砂山K 1式」 → 「砂山K 2式」 → 「砂山K 3式」
新潟県日本海沿岸	「松ノ脇式」	「浜端式」 → 「六地山式」 → 「松ノ脇K式」
阿賀野川・阿賀川	「狐塚式」	「和泉式」 → 「松影A式」 → 「能登式」
油田遺跡	「油田YC式」	「油田YK式」 → (油田Y期) → (+)

いたのだろうか。会津で油田Y期土器が目撃されたことによって、新潟でもようやく見直しの機運になって来たと言えよう。

今回、六地山遺跡の再整理にあたり、鈴木正博氏の論文から受けた影響は大きい。甕と壺を同列に分類する砂山式の細別は理解できないが、天王山式と六地山式の編年を逆転させるとする説には賛同する。そうすることによって、様々なことが解決する様に思える。また、天王山遺跡天王山式以前、鈴木氏の言う「プロト天王山式」を認定する重要性に改めて気付かされた。

前述したように、本遺跡のA東北系列中で天王山式土器の特徴として挙げられた14項目のうち、明確に該当するものは③縦走縄文だけで、他は明確ではない。14項目にない特徴として、㉑I文様帯の下向きの連弧文や弧線文、㉒Ⅲ文様帯の上向き連弧文、㉓必ずしも同時施文とは限らないが、2本描や3本描の沈線文で文様を描くこと、㉔縄文原体の側面押圧があるという4項目を指摘できる。図26は上記特徴に関する資料を順不同で並べた図である。

㉑I文様帯の下向きの連弧文や弧線文(1～7・12・28・39・51・56)、㉒Ⅲ文様帯の上向き連弧文(7・9～11・13～24・26～33・35・37・38・40～45・47～50・52～55・57～62)である。㉑天王山式のI文様帯の連弧文・弧線文は原則として上向きで、下向きは希少。図示した例をみるとわかるように、弧線文の交点に刺突を入れ、㉑縄文を用いる共通性がある。51は口縁端部に突起を挟んで方向を変えるハの字状キザミを入れ、I文様帯の肥厚有段部下端を下向き弧線状に押圧し、その交点に刺突、RL斜縄文と側面押圧を入れる。Ⅱa文様帯には縦走縄文を入れ、下端に下向き連弧文とハの字状の交互刺突文?を入れる。

㉒Ⅲ文様帯の上向き連弧文は、天王山式土器には一般的ではなく、天王山遺跡にも1点しか確認できない(57)。1本描もあるが(13・31・45・49・50・57・58・60)、2本描が多く(7・9～11・14～24・26～30・33・35・42・44・48・52～55・59・61・62)、3本描(32・37・40～43・59)もみられる(注15)。38は多条の上向き連弧文。47は上向き・下向きが組み合わさった例、49は上向き連弧文と鋸歯文が併用される。29・(30)・33・35・38は北陸系の器形に上向き連弧文が入れられた折衷土器と考えられる。Ⅲ文様帯とⅡa文様帯間の区画文には刺突列



表5 六地山遺跡周辺の土器編年

北陸	田嶋	古津八幡山遺跡	六地山遺跡	福島中通り
戸水B式				
猫橋式	V-1 V-2 V-3		六地山遺跡	天王山遺跡天王山式古 天王山遺跡天王山式新
		13次 7 TSD03S10		
		SX1005		
法仏式	2-1 2-2	SX1004		明戸式

(15)、交互刺突文(10・22・40・53・58・62)もあるが少なく、数条の沈線を入れる例が大半である。同一個体に用いられる交互刺突文は、真上から刺突する例よりも方向を変えて刺突するハの字状交互刺突文や台形状の例が目立つ(7・10・40)。天王山遺跡の56はI文様帯下端を下向き連弧状にする例だがハの字状交互刺突文を入れている。

⑥Ⅲ文様帯の上向き連弧文と共に用いられる構図としては、Ⅱa文様帯の重菱形文(14・15・18・24・26・28・37・44・45・49)、Ⅱ文様帯のS字状連繋文(44・59)、円台形連結文(7)がある。46は重菱形文と円台形連結文を入れる例、44は重菱形文とS字状連繋文を入れる例である。

本遺跡のA東北系列の特徴として挙げた②本描や3本描の沈線文で文様を描くこと、必ずしも同時施文とは限らないとしたのは、このように連弧文や弧線文の施文法としての特徴でもある。④縄文原体の側面押圧は36・51にあるように①原体で用いられる施文法で、天王山遺跡でも多数確認できる〔中村2001〕。

図26の例をみると、屋敷式・明戸式あるいは天王山遺跡天王山式以降に認定される例がほほないことがわかる。むしろ、天王山遺跡天王山式以前とすべき事例、中期終末かと思われる例が多い。

前述のように、本遺跡のD北陸系列は後期前半の猫橋式併行期、北陸編年のV-1期～V-3期併行と考えられる。A東北系列は交互刺突文がないことから、天王山遺跡天王山式以後とする説が多かったが、諸特徴の比較から天王山遺跡天王山式以前と考えられる。よって、A東北系列とD北陸系列は概ね同時期に共伴していたと考えられよう。また、A東北系列とD北陸系列の折衷土器がみられ、高杯・器台がA東北系列にないことから、両系列群の器種は一部で補完関係にあったと言えるであろう。

本遺跡では砂山遺跡の特徴である重菱形文土器が1点もみられなかった。重菱形文が中期終末の宇津ノ台式土器に由来するなら砂山式と時期的に一部併行関係にある六地山遺跡にあってもよいのだが、六地山遺跡になかった意義は大きい。今後の課題としておきたい。

(渡邊朋和)

注

注1 この他に、〔上原・磯崎1968〕・〔武田ほか1960〕に掲載された上原甲子郎氏所蔵資料があると思われるが、現在は確認することができない。また、畠山祐二氏採集土器が〔新潟市史編さん原始古代中世史部会編1994〕で図化されている。

注2 長岡市立科学博物館には座布団に結び付けられた石鏃7点と剥片が多数ある(図25)。剥片は156点あり、石材はほぼ全て流紋岩もしくは頁岩と考えられる。真島衛氏資料の中に石鏃は確認できなかった。新潟市史には石鏃を主とする石器66点が掲載されているが、多くが地元曾和で採集された資料である。

注3 〔関2005〕に掲載されている六地山遺跡現況測量図は関氏から提供を受けた図と同じものである。

注4 〔上原1954〕に「縄文ある弥生土器に伴うものと考えられるものに石器では石鏃多数、この中にはアメリカ型石鏃あり、石小刀、なお未見だが磨製石斧もある由である。土製品には紡錘車が二例あり、内一個には土器と同様の縄文が施してあるのは注目に与する。又土師乃至須恵に伴うべきものとして直刀が一口出土している。」とあり、それによつたものであろうか。

注5 当時の文献としては〔上原1954〕・〔金塚1956〕などがある。上原は六地山遺跡を「曾和遺跡」と呼んでいた。〔真島1954〕には六地山遺跡の記載はなく、発掘調査以前の文献では〔上原1954〕が最も記載が具体的なので、真島が初めて遺跡を訪れたのは〔上原1954〕の後かもしれない。なお、六地山遺跡の調査経緯等については、故関雅之氏よりご教示を受けた。

注6 発掘調査の経緯は〔中村1995〕が詳しい。

注7 古津八幡山遺跡では縄文地文ではなく、ハケメ地文の土器で東北系土器の要素が入った土器を、C群在地折衷系としたから、これらもB群東北系に加えるならさらに比率が上がることになる。

注8 上開きの弧線・連弧文を上向き、下開きの弧線・連弧文を下向きとする。

注9 48の縄文原体は『日本先史土器の縄紋』〔山内1979〕の図版15の5の復元原体と同一である。縄文原体について鈴木正博氏のご教示を得た。

注10 前者は岩手県域にはほほない。天王山遺跡で見られる前者は日本海側経由の可能性が高い。

注11 石川日出志氏・前山精明氏よりご教示を得た。

注12 1961年に提出された『日本先史土器の縄紋』〔山内1979〕にも「この種の①条を用いた斜位圧痕は越後、能登にも発見され、相互に一脈の関連を持つものの如くである。」と同様の記載がある。山内は1957年8月19日～20日に長岡市立科学博物館を訪れて、科学博物館が発掘調査した新資料を見ているので〔中村1995〕、第1次調査直後の小瀬が沢洞窟だけではなく、六地山遺跡の資料も実見している可能性が高い。その他、高岡市氷見洞窟や小松市大野山遺跡出土の天王山式土器を念頭においての記述であろう。

注13 六地山式を天王山式土器よりも新しく位置づけ、畿内第V様式に併行させるとする中村編年は、天王山式を中期説とする根拠となり、新潟県内のみならず、富山県や石川県でもその後の「通説」になった。

注14 古津八幡山遺跡では天王山式系列と北陸系・折衷土器が遺構内で共伴しており、北陸の弥生後期編年との併行関係がわかる〔渡邊2004〕。遺構の前後関係は以下の①→②→③である。①外環濠C中層SD03S10から田嶋V-3群の北陸

系甕が出土。②方形周溝墓SX1005は外環濠Cの外側に造られた墓で、周囲から出土土器は天王山式系が主体。③横走縄文が目立つ。I文様帯下端のみ交互刺突文を残すが、ほかは円形竹管状工具による交互刺突、刺突列、押し状沈線・波状文となる例がある。口縁部が外傾し伸長する例では屋敷遺跡に類例が多い。④方形周溝墓SX1004は、SX1005と一本の溝を共有して造られた墓。周溝の形態からSX1005が古くSX1004が新しいと断定できる。また、溝覆土中に環濠掘削土が堆積しており外環濠よりも新しい。出土土器は田嶋2-1群の北陸系土器8点に折衷土器4点が伴う。方形周溝墓SX1005には北陸系土器は伴わないが、外環濠CとSX1004方形周溝墓の間に位置づけられる。すなわち、田嶋編年V-3期と2-1群の中間、猫橋式と法仏式の間である。SX1005の天王山式系列が「天王山式」を二分した場合の新相よりも新しい。所謂明戸式・屋敷式に接点を有する段階と考えられる。

注15 新潟市東区石動遺跡ではⅢ文様帯上端に3本描施文具で波状文を描くものがあるが、施文方向はほぼ全て左から右である。始点と終点が連続しない場合があるが、一筆で描いている。一方で連丸文状になっているものは施文方向が左から右だが、施文順位は右から左になっている。右側の弧線の左端を左側の弧線の右端の沈線が切っている例が多い(図26-23~26)。図面にすると似ているようにみえるが、施文の意識は全く違うのであろう。

資料の所蔵者・機関である嶋邦子氏、故関雅之氏、長岡市立科学博物館、新潟市歴史博物館には格別のご配慮により掲載の許可をいただいた。末筆ながら感謝申し上げます。

また、資料調査をするにあたり、多くの方々・機関からご指示・ご協力いただいた。記して謝意を表したい。

相澤清利・赤坂朋美・赤澤徳明・石川日出志・磯部保衛・伊東格・井上雅孝・上野章・岡本淳一郎・小野明・加藤由美子・金子昭彦・小林隆幸・小林達雄・小林克・風間栄一・菅野紀子・北林雅康・楠正勝・坂下博晃・齋藤瑞穂・坂井秀弥・笹澤正史・佐藤祐輔・佐藤由紀男・清水香・杉山大晋・鈴木功・鈴木正博・高田和徳・滝沢規朗・鶴巻康志・中村五郎・野田豊文・久田正弘・藤塚明・細辻嘉門・松島悦子・水澤幸一・森田賢司・安田隼人・山川史子・吉井雅勇・吉田博行・渡邊美穂子  
石川県埋蔵文化財センター・一戸町教育委員会・岩手県埋蔵文化財センター・鹿角市教育委員会・小坂町教育委員会・新発田市教育委員会・胎内市教育委員会・高岡市教育委員会・滝沢市埋蔵文化財センター・富山県埋蔵文化財センター富山市埋蔵文化財センター・長野市埋蔵文化財センター・中能登町教育委員会・七尾市教育委員会・福島県文化センター白河館・村上市教育委員会

(五十音順・敬称略)

#### 図26

○新潟県 1~3: 堂の前、4: 滝ノ前、5~10: 砂山、11・12: 長松、13: 道端V、14: 中曽根、15~17: 山草荷、18~22: 王子山、23~26: 石動、27: 草薙、28: 山口、29: 八幡山、30: 五斗田、31・32: 堅正寺、33~36: 五千石、37・38: 松ノ脇  
○富山県 39・40: ニツ塚、41・42: 頭川、43・45: 下老子笹川、44: 加納谷内  
○青森県・秋田県 47: 家ノ前、46・48・49: はりま館、50: 案内V遺跡、51: 猿ヶ平I遺跡、52・53: 館の上館、54・55: 小谷地  
○福島県 56・57: 天王山、58~60: 和泉、61・62: 能登

#### 引用・参考文献

- 相澤清利 2013 「天王山式と続縄文土器の南下」『東北部に  
おける弥生後期から古墳出現前夜の社会動向-福島県湯川  
村桜町遺跡資料見学・検討会-予稿集』  
甘粕健・小野明ほか 1986 『六地山遺跡-1982年発掘調査を中  
心に-』新潟市教育委員会  
石川日出志 1989 「長岡市堅正寺遺跡の弥生式土器と石器」  
『北越考古学』第2号  
石川日出志 1990 「天王山式土器編年研究の問題点」『北越考  
古学』第3号  
石川日出志 2000 「天王山式土器中期説への反論」『新潟考古』  
第11号  
石川日出志 2001 「弥生後期湯舟沢式土器の系譜と広がり」  
『北越考古学』第12号  
石川日出志 2004 「弥生後期天王山式土器成立期における地  
域間関係」『駿台史学』第120号  
石川日出志 2005 『関東・東北弥生土器と北海道続縄文土器  
の広域編年 研究成果報告書』  
井上雅孝ほか 2008 『滝沢村埋蔵文化財センター調査報告書第  
Ⅲ集 仏沢Ⅲ遺跡-平成2年度発掘調査報告書-』滝沢村  
埋蔵文化財センター  
岩本義雄・天野勝也・三宅徹也 1979 『青森県立郷土館第6集  
宇鉄Ⅱ遺跡発掘調査報告書』青森県郷土館  
上原甲子郎 1954 「越後平野に於ける最近の考古調査」『佐渡  
史学会々報』第1輯 佐渡史学会  
上原甲子郎・磯崎正彦 1968 「北陸地方Ⅱ」『弥生式土器集成  
本編2』東京堂出版  
宇部則保 2007 「古代東北北部社会の地域間交流」『古代蝦夷  
からアイヌへ』吉川弘文館  
大坂拓・福田正宏 2005 「尾白内貝塚の続縄文土器について」  
『北海道考古学』第41輯  
大坂拓 2007 「恵山式土器の編年-北海道南部における続縄  
文時代前半期土器編年の再検討-」『駿台史学』第130号  
大越正道ほか 1990 『福島県文化財調査報告書第242集 東北  
横断自動車道遺跡調査報告書10 能登遺跡 南原B遺跡  
村西遺跡 大村古墳群』福島県教育委員会  
笠井崇吉ほか 2018 『平成30年度指定文化財展図録 白河市天  
王山遺跡の時代』福島県文化財センター白河館  
加藤学ほか 2001 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第106集 松  
影A遺跡』新潟県教育委員会  
木本元治ほか 1991 『福島県文化財調査報告書第263集 東北  
横断自動車道遺跡調査報告13 和泉遺跡 横沼西遺跡』福  
島県教育委員会  
金塚友之丞 1956 「四、六字山その他の土器」『高志路』3期  
27号  
楠正勝 1996 『金沢市文化財紀要119 西念・南新保遺跡Ⅳ』  
金沢市教育委員会  
坂井秀弥ほか 1983 「内越遺跡出土土器の越後における編年の  
位置」『内越遺跡』新潟県教育委員会  
坂井秀弥 1985 「越後の弥生後期についての覚書」『新潟県史  
研究』  
佐藤友子ほか 2009 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第203集  
一般国道49号阿賀野バイパス関係発掘調査報告書Ⅰ 庚塚  
遺跡 狐塚遺跡』新潟県教育委員会  
鈴木正博 1976 「十王台式理解のために(2)」『常総台地』8  
鈴木正博 2014a 「『砂山』崩し-いつやるか今でしょ!-」

『利根川』36 利根川同人会  
 鈴木正博 2014b 「山草荷2式」に学ぶ－「十王台式」研究法は「山草荷式/天王山式文様帯変遷問題」を超えられるか－『福島考古』第56号  
 関雅之 2005 「Vまとめ 1 砂丘遺跡の実相と変容」『新潟県豊栄市甲山遺跡』豊栄市教育委員会  
 高田和徳 1984 『一戸町文化財調査報告書第7集 上野遺跡－昭和58年度発掘調査報告書－』岩手県二戸郡一戸町教育委員会  
 高橋和樹ほか 1976 『瀬棚南川遺跡』瀬棚町教育委員会  
 高橋潤・葛西励 1979 『家の上遺跡・外崎沢(1)遺跡』協野沢村教育委員会  
 高橋與右衛門 『岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第214集 岩崎台地遺跡群発掘調査報告書』1995  
 滝沢規朗・野田豊文ほか 2003 「新潟県岩船郡域における弥生時代中期～後期にかけての様相－村上市砂山遺跡・滝ノ前遺跡－を中心に」『三面川流域の考古学』第2号  
 滝沢規朗 2005 「土器の分類と変遷－いわゆる北陸系を中心に－」『新潟県における高地性集落の解体と古墳の出現 第1分冊』新潟県考古学会  
 滝沢規朗 2014 「続縄文土器と在土器の併行関係－越後の事例を中心に－」『古墳と続縄文文化』高志書院  
 武田克忠ほか 1960 「第3章 近郷の遺跡」『内野町誌』内野町  
 田中耕作・石川日出志ほか 2018 『山草荷遺跡出土の弥生土器 新発田市指定有形文化財(考古資料)』新発田市教育委員会  
 田辺早苗 1991 『神林村埋蔵文化財報告第3 長松遺跡発掘調査報告書』神林村教育委員会  
 坪井清足 1958 「福島県白河市天王山遺跡」『弥生式土器集成資料編1』東京堂出版  
 寺村光晴 1960 「越後六地山遺跡」『上代文化』第30輯 國學院大學考古学会  
 中村孝三郎 1960 「弥生式 六地山遺跡」『NKH 長岡市立科学博物館友の会会報』Vol.2-No.4  
 中村孝三郎 1966 『先史時代と長岡の遺跡』長岡市立科学博物館  
 中村孝三郎 1995 『市史双書No.30 越後発掘遺跡－思い出の史蹟・思い出の人々－』長岡市  
 中村五郎 1983 「東北中・南部と新潟」『三世紀の考古学 下巻』学生社  
 中村五郎 2009 「天王山式土器メモ2008年」『福島考古』第50号  
 中村五郎 2010 「天王山式六十年」『坪井清足先生卒寿記念論文集－埋文行政と研究のはざまで－』  
 中村五郎ほか 2011 「油田Y期とその周辺－会津地方の天王山式以前の諸段階－」『福島考古』第53号  
 中村五郎 2001 「80天王山遺跡」『白河市史第4巻 資料編1 自然・考古』白河市  
 新潟市史編さん原始古代中世史部会編 1994 「第3章 弥生時代」『新潟市史 資料編1 原始古代中世』新潟市  
 新潟県 1983 『新潟県史 資料編1 原始・古代1 考古資料編』新潟県  
 野田豊文 2005 「三面川流域における弥生時代の終わり－天王山式土器から見た新潟県内弥生後期の様相－」『三面川流域の考古学』第4号  
 野田豊文 2009 「新潟県内の弥生時代後期東北系土器群像」『新潟県の考古学II』新潟県考古学会

藤田定一 1951 『天王山式土器の紋様図集』白河農業高等学校歴史研究部  
 前川雅夫ほか 2006 『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第162集 日本海沿岸東北自動車道関係発掘調査報告書X V 道端遺跡V』新潟県教育委員会  
 前山精明・相田泰臣 2002 『南赤坂遺跡－縄文時代前期～中期・古墳時代前期を主とする集落跡の調査－』巻町教育委員会  
 真島衛 1954 『西蒲原郡内遺跡地名表 第壹報』  
 丸山一昭 1998 『和島村埋蔵文化財調査報告書第6集 松ノ脇遺跡』和島村教育委員会  
 水澤幸一 1998 『中条町埋蔵文化財調査報告第15集 兵衛遺跡・四ツ持遺跡』中条町教育委員会  
 谷内尾晋司 1982 「北陸地方の墓制」『西日本における方形周溝墓をめぐる諸問題』第11回埋蔵文化財研究会資料  
 八木光則 2004 「蝦夷考古学の地平」『古代蝦夷と律令国家』高志書院  
 山内清男 1964 「日本先史時代概説」『日本原始美術1 縄文式土器』講談社  
 山内清男 1979 『日本先史土器の縄紋』先史考古学会  
 弥生時代研究会編 1990 『「天王山式期をめぐる」の検討会』  
 渡邊朋和 2001 「第VII章 まとめ」『八幡山遺跡発掘調査報告書』新津市教育委員会  
 渡邊朋和 2004 「VI章 まとめ」『八幡山遺跡群発掘調査報告書 第11・12・13・14次調査』新津市教育委員会  
 渡邊朋和 2016 「(5) 六地山遺跡 第11次調査」『新潟市文化財センター年報』第3号 新潟市文化財センター  
 渡邊朋和・立木宏明ほか 2001 『八幡山遺跡発掘調査報告書』新津市教育委員会  
 渡邊美穂子 2008 『新発田市埋蔵文化財調査報告第36 王子山遺跡発掘調査報告書』新発田市教育委員会



## 2 朝日普談寺観音堂の文禄五年銘鰐口

### はじめに

ここで報告する鰐口は、平成30年度文化財センター企画展2「新潟の鋳物師－近世新潟町の職人－」に先立ち、『日本の梵鐘』〔坪井1970〕に記載のある普談寺の鰐口の所在調査をした際に再発見したものである。

『中蒲原郡誌 上編』〔新潟県中蒲原郡1918〕に掲載された鰐口が『大悲山殿堂寺往昔之記』の引用ではなく、現存することを確認できた意義は大きいと考え、資料報告を行うこととした。

### 発見の経緯

普談寺は新潟市秋葉区朝日に所在し、真言宗智山派に属している。また越後三十三観音霊場の第三十番札所として、観音堂のご本尊十一面観音菩薩は朝日の観音様として信仰の対象となっている。

平成30年5月23日に観音堂に鰐口が懸けられているのを発見し、何らかの銘があることを確認したが、銘文のある面が表側であったために建物の墓股に隠れて銘文を全ては読むことができなかった。その後、6月20日にご住職の小林一三氏の立会いのもと、鰐口を取り外させていただき、文禄五年銘のある鰐口であることを確認することができた。この鰐口は、企画展の会期中お借りして展示を行った。

### 鰐口

これまでこの鰐口について、文献等で記されている主なものを紹介する。

・貞享4（1687）年の『大悲山殿堂寺往昔之記』に「一頃野火余り殿堂記録或宝物等不残焼失」  
「一、堂前鰐口陶冶之儀会津若松遠藤甚四郎、暦号者文禄五年、即当貞享四丁卯九十二年ニ御座候」とあり、  
「一、後堂建立棟札之写ニ云  
源新津丹波守 勝資  
源新津内記進 秀祐  
千坂村馬守 頼儀  
旭村普陀路山普談寺尖雄  
暦者文禄年中、裏書之写ニ云」と棟札の写しを伝える（『新津市史 資料編第3巻 近世2』〔1990〕）。

『大悲山殿堂寺往昔之記』には棟札の年号の記載はないが、『新津市史』が引用する福王寺所蔵の文書には「文禄二年癸巳」と書かれているという（『新津市史 資料編第1巻 原始・古代・中世』〔1989〕）。

・大正17（1918）年の『中蒲原郡誌 上編』「巻十五 金津村誌」に普談寺宝物の一つとして「鰐口一個（方一尺五分文禄五年丙申、朝日村普陀洛山普談寺大工會津若松遠藤甚

四郎の銘あり）」と記載されている。

県内の鰐口の金文は『新潟県史 資料編5 中世3 文書編Ⅲ』〔1984〕に集成されているが、この鰐口は未掲載で、『新津市史 資料編第1巻 原始・古代・中世』〔1989〕にも未掲載であり、調査対象から漏れていたと思われる。

第2次世界大戦時の金属類の供出前に梵鐘や鰐口などをまとめた『新潟県史蹟名勝天然記念物第12輯』〔齋藤1944〕でも「普談寺 鰐口 不明」と記載されていることから、この頃すでに所在が分からなかったのかもしれない。『日本の梵鐘』〔坪井1970〕の中世金工品一覧に「會津大工遠藤甚四郎」と記載があるのは、上記『中蒲原郡誌 上編』〔1918〕に拠ったものであろう。

### 鰐口の調査所見

鋳銅製で部分的に地金の色が見えるが、全体に薄く青錆色を呈している。大きさは、最大幅35.3cm、鼓面径29.3cm、鼓厚12.4cm、肩厚7.5cm。重さは約8.2kg。

鼓面は撞座を中心に4重の圏線で区画されるが、圏線は最も内側と外側は2条の複圏となっている。圏線はいずれも断面蒲鉾形であることから、挽型で鋳型が作られたと推察される。撞座は陽鑄で、三角形の小蓮弁8枚で囲まれた中に9個の蓮子とその外側の30数本の放射状の蕊が配されている。後述するように最外区には中央から左右に逆時計回り、時計回りに銘が陰刻される。吊環（耳）は不整形で大きくはなく、円筒形の目は比較的長く、断面形は小判形を呈する。また、左右の目から縁沿いに開いた口唇の幅は1.9cm程である。

鼓面を観察すると、最外区には6mm四方の型持が5か所認められ、赤錆びが付着していることから、鉄製の型持と考えられる。5個ある型持のうち4個は銘文を避けているように見える。裏面の型持は4個確認できる。鋳揚がりは良好で鋳掛の跡は認められない。鼓上部、耳周辺にはヘラ状のナデ跡が認められる。

### 銘文

外区左 「旭村普談寺 普墮樂山」

外区右 「文禄五年丙申 何月何日 大工 會津  
若松 遠藤甚四良」

「旭村普談寺」は 鰐口が伝わる同寺のこと。「普墮樂」（補陀樂 ふだらく）は、観音菩薩の降臨する霊場の事であつては観音堂のある普談寺らしい山号だったが、延宝4（1676）年に「大悲山」に改められたので〔新津市役所1979〕、それ以前の山号ということになる。

「文禄五年」は同年10月に慶長と改元されるので、改元前の年（1596）になる。右から左に書かれる干支（丙申）も矛盾はない。「何月何日」は自分が作ったものにこの

ように書くものだろうか。妙案はない。奉納する日付を入れるつもりだったものを何らかの理由でそのまま鋳込んだのだろうか。

「大工 會津 若松 遠藤甚四良」は鋳物師名で、「大工」は鋳物師大工のこと。会津周辺の鋳物師に早川姓・長谷川姓はあるが、遠藤姓は見当たらない。「會津 若松」は、「會津」と「若松」の間が空いていることから会津若松としての通称として用いられたのではないと考える。「會津」は『福島県史第7巻 資料編2 古代・中世資料』〔福島県1966〕によれば、同時期の資料で「(奥州)会津」などとして散見される。また、「若松」の使用は、天正18(1590)年に蒲生氏郷が伊勢から会津に移封されたことに由来すると言われているから、文禄5(1596)年銘の矛盾はないと言える。亡失資料ではあるが福島県史に掲載されている南会津郡田島町愛宕神社鰐口銘の「慶長十八年五月吉日 大工若松住 長谷川清六」(資料776)の慶長18(1613)年が近い年代と言えよう。

仮に「会津若松」とした場合、恵日寺旧蔵の室町時代の作品と考えられる十二天図の軸木には修復の墨書銘があり、第2期の延宝3(1675)年に「奥州会津若松赤井町」などの表記が見られ〔阿部2005〕、17世紀後半頃からの通称と考えられるが(※1)、本例はそれよりも80年以上古い会津若松の使用例ということになる。

なお、奉納者、願主の名前が書かれていないが大工自身が奉納したと鰐口と考えられる。

写しではあるが観音堂の再建時の棟札に文禄二癸巳年の記載があるので、観音堂再建後に寄進された鰐口ということになる。新津勝資とともに観音堂を再建した新津秀祐は勝資の実子でなく、会津を治めていた輩名家旧臣の赤津弾正の次男であり(「新津系図」『新津市史 資料編第1巻 原始・古代・中世』〔1989〕)、主家没落後越後に逃れて来たと考えられるから、このあたりに会津と普談寺の関係があったのかもしれない(※2)。

## おわりに

『中蒲原郡誌 上編』〔1918〕に掲載された鰐口を約100年ぶりに再発見した。鰐口に陰刻された銘文に意味の不明瞭な箇所があるが、鰐口そのものは文禄年間頃のもので問題はないと、鰐口を精力的に研究されている愛甲昇寛氏に確認していただいた。

今後は、現在の観音堂が文禄二年に再建された建物かなど、別の視点からも調査を行う必要がある。

末筆ではありますが、資料紹介をお許し下さった普談寺住職小林一三氏、会津若松の地名の由来などについて高橋充氏、鰐口のことについて愛甲昇寛氏・五十川伸矢氏、金文について伊東祐之氏、郷土史全般について木村宗文氏・今野誠氏にお世話になりました。お名前を記して感謝いたします。(渡邊朋和)

※1 福島県立博物館高橋充氏教示。

※2 今野誠氏教示。

## 引用・参考文献

- 愛甲昇寛 2005「鰐口にみる銘文の表現」『真鍋俊照博士還暦記念論集 仏教美術と歴史文化』
- 愛甲昇寛 2007『改訂増補 慶長以前鰐口・雲版年表稿 付鰐口鋳物師一覧 朝鮮金鼓』真言史学会
- 阿部綾子 2005「研究ノート 軸木墨書にみる「十二天図」の修復過程」『季刊博物館だより』79 福島県立博物館
- 齋藤秀平 1944『新潟県史蹟名勝天然記念物第12輯』新潟県
- 高橋充 2004「3 南奥の鋳物師」『陸奥国の戦国社会 奥羽史研究叢書6』
- 坪井良平 1970『日本の梵鐘』 角川書店
- 新潟県 1984『新潟県史 資料編5 中世3 文書編Ⅲ』
- 新潟県中蒲原郡 1918『中蒲原郡誌 上編』
- 新津市 1989『新津市史 資料編第1巻 原始・古代・中世』
- 新津市 1990『新津市史 資料編第3巻 近世2』
- 新津市 1991『新津市史 資料編6 民俗・文化財』
- 新潟市役所 1979『新津市史 金津・小合・新関地区編』
- 林佐平 1967「二 早川家の伝承と鋳物師の支配」『会津若松市史 第11巻 文化編』
- 福島県 1966『福島県史 第7巻 資料編2 古代・中世資料』
- 渡邊明 2010「会津の鋳物師」『会津若松市史研究』第11号 会津若松市



表

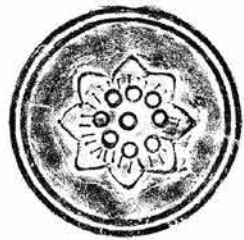
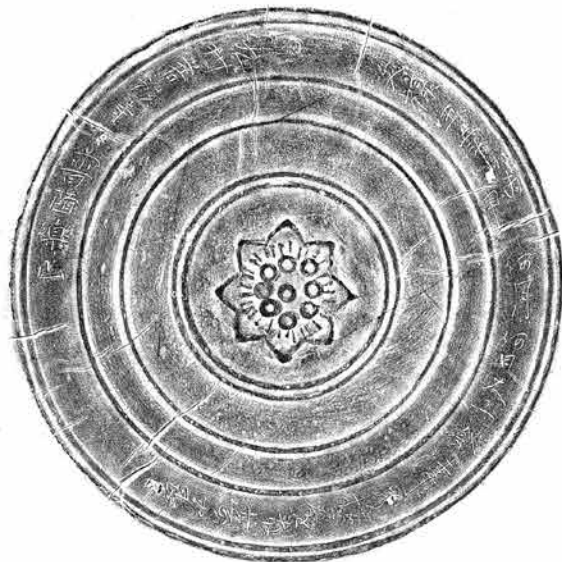
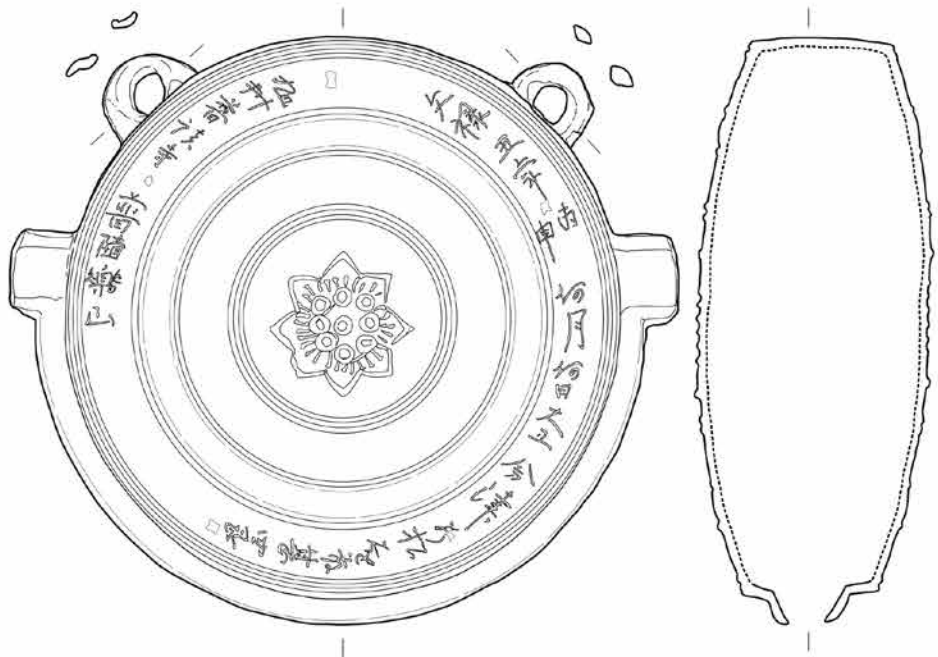
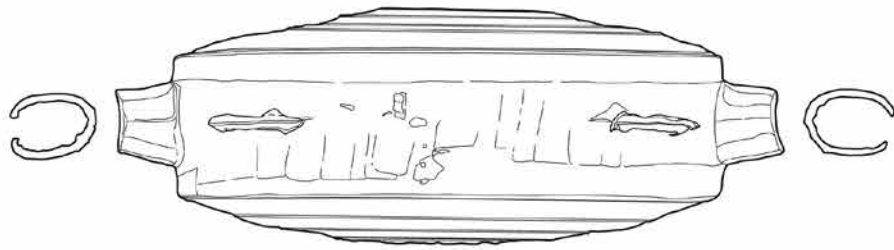


裏

朝日普談寺観音堂鰐口

文禄五年六月廿一日  
 朝日普談寺  
 今津大松をなす其也

朝日普談寺  
 普隨樂山



0 (1:4) 15cm

朝日普談寺観音堂罏口

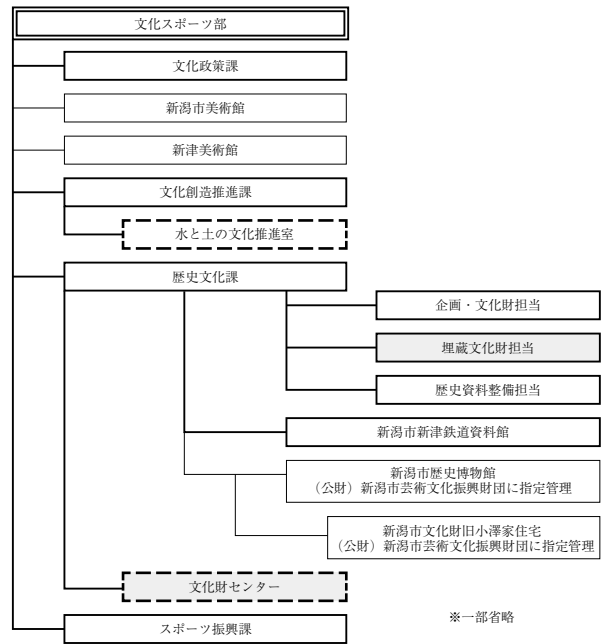


## 引用・参考文献

- 相田泰臣ほか 2019 『平成30年度 国史跡古津八幡山 弥生の丘展示館 企画展関連講座・講演会 記録集』 新潟市文化財センター
- 相田泰臣・金田拓也ほか 2017 『国史跡 古津八幡山遺跡 保存活用計画』 新潟市教育委員会
- 今井さやか 2014 a 「Ⅲ 7 教育普及活動」『新潟市文化財センター年報－平成23（2011）年度・平成24（2012）年度版－』第1号 新潟市文化財センター
- 今井さやか 2014 b 「Ⅲ 8 保存処理」『新潟市文化財センター年報－平成23（2011）年度・平成24（2012）年度版－』第1号 新潟市文化財センター
- 遠藤恭雄 2015 「Ⅲ 2（1）小丸山東遺跡 第1・2次調査（2012184・2013001）」『新潟市文化財センター年報－平成25（2013）年度版－』第2号 新潟市文化財センター
- 遠藤恭雄・重留康宏ほか 2020 『砂崩前郷遺跡 第3次調査－市道砂崩南線建設事業に伴う砂崩前郷遺跡第2次発掘調査報告書－』 新潟市教育委員会
- 春日真実 1999 「第4章 第2節 土器編年と地域性」『新潟県の考古学』 高志書院
- 齋藤秀平 1944 『新潟県史蹟名勝天然記念物第12輯』 新潟県
- 立木宏明・澤野慶子ほか 2019 『赤鎗砂山遺跡 第5次調査－商業施設建設に伴う赤鎗砂山遺跡第3次発掘調査報告書－』 新潟市教育委員会
- 立木宏明・奈良佳子ほか 2019 『細池寺道上遺跡Ⅷ 第50次調査－県営ほ場整備事業（担い手育成型）両新地区に伴う細池寺道上遺跡第25次発掘調査報告書－』 新潟市教育委員会
- 牧野耕作・脇本博康ほか 2019 『川根谷内遺跡 第6次調査－主要地方道新潟中央環状線道路整備事業に伴う川根谷内遺跡第2次発掘調査報告書－』 新潟市教育委員会
- 渡邊朋和 2014 a 「Ⅰ 新潟市の埋蔵文化財保護行政について」『新潟市文化財センター年報－平成23（2011）年度・平成24（2012）年度版－』第1号 新潟市文化財センター
- 渡邊朋和 2014 b 「Ⅲ 6 資料の収蔵・保管」『新潟市文化財センター年報－平成23（2011）年度・平成24（2012）年度版－』第1号 新潟市文化財センター
- 渡邊朋和 2014 c 「Ⅴ 1 史跡古津八幡山遺跡保存活用事業の概要」『新潟市文化財センター年報－平成23（2011）年度・平成24（2012）年度版－』第1号 新潟市文化財センター
- 渡邊朋和 2018 「Ⅱ 2（11）近世新潟町跡第32・38次調査、第27次に伴う工事立会（2016116・2016252・2016192）」『新潟市文化財センター年報－平成28（2016）年度版－』第5号 新潟市文化財センター
- 渡邊朋和・八藤後智人ほか 2014 『新潟市文化財センター年報－平成23（2011）年度・平成24（2012）年度版－』第1号 新潟市文化財センター

平成30年度文化財センター・歴史文化課埋蔵文化財担当職員名簿

文化財センター		
所長(学芸員)	渡邊 朋和	統括・埋蔵文化財
主幹	天野 泰伸	事務
主幹(学芸員)	遠藤 恭雄	埋蔵文化財
主査(学芸員)	立木 宏明	埋蔵文化財
主査	飯塚 和美	事務
主査(文化財専門員)	今井 さやか	埋蔵文化財
主査(学芸員)	相田 泰臣	埋蔵文化財
主査(文化財専門員)	龍田 優子	埋蔵文化財
主査(文化財専門員)	相澤 裕子	埋蔵文化財
主事(文化財専門員)	牧野 耕作	埋蔵文化財
主事	山縣 美春	事務
主事(学芸員)	前山 精明	埋蔵文化財
非常勤職員	久住 直史	民俗文化財
非常勤職員	澤野 慶子	埋蔵文化財
非常勤職員	八藤後 智人	埋蔵文化財
非常勤職員	田中 耕作	弥生の丘展示館
非常勤職員	奈良 佳子	埋蔵文化財
非常勤職員	宮下 佐貴子	弥生の丘展示館
歴史文化課埋蔵文化財担当		
主幹(文化財専門員)	朝岡 政康	埋蔵文化財
主査(文化財専門員)	諫山 えりか	埋蔵文化財
主査(学芸員)	潮田 憲幸	埋蔵文化財
主事(文化財専門員)	金田 拓也	埋蔵文化財
非常勤嘱託	古澤 貴子(H30.7～)	埋蔵文化財



文化スポーツ部の組織機構図(平成30年度)





新潟市文化財センター年報 第7号  
— 平成30（2018）年度版 —

2020年3月27日印刷・発行

編集・発行 新潟市文化財センター  
〒950-1122 新潟市西区木場2748番地1  
電話 025-378-0480

印刷 有限会社 スタッフラン  
〒950-0211 新潟市江南区横越川根町3丁目13-23